



ベルビュー荘のべらぼうに  
愉快的な奴ら

---

---

ルシア

---

わたしは<普通の人々>が嫌いだ。

何も、自分が「普通」ではなく特別な存在だと自惚れているわけではなく――ただ、嫌いなのだ。

わたしが小さな頃、隣の「普通の」家では、それこそ普通の人々によくあるように、一軒家で犬を飼っていた。

時々、回覧板をうちにまわす時などに、その家の奥さんはその小型犬と一緒に連れてきたものだった。

ちくわという名前のそのチワワは、「死んだフリ」をする芸が得意だったというが、ある日振りではなく本当に死んだ。

まだ飼いはじめて四～五年のことで、生後数ヶ月から飼っていたというから、人間の年齢にして三十四、五歳といったところだろうか。だが、その死因を聞いて、わたしは慄然としたのをよく覚えている……何故ならその犬は、腹部に腫瘍が出来て、それを手術するでもなく放置していたから亡くなったという話を、飼い主である奥さんがわたしの母にしていたからだ。

「本当にとっても苦しそうでね……最後は血を流しながら死んでいきました」

「それはとても……お可哀想に」

町内の回覧板を受けとった時の母は、いかにも義理で弔辞を述べているといったような様子だった。

そして、隣の一見どこからどう見ても善良そうにしか見えない主婦のことを、彼女がドアを閉めるなり批判しはじめたのを、わたしはよく覚えている。

「お金持ちって怖いわね。お父さんが隣の旦那さんから聞いた話によると――ちくわちゃんはとても痛がっていて、毎日お腹をなめてばかりいたそうよ。もちろん、動物病院で手術するには、結構な金額のお金がかかるでしょうけど……それにしてもねえ。『昔は犬が病気でも、動物病院なんぞありやしなかった。まあ、自然死ですよ』ですって！信じられないわ」

確かにこの話は、当時まだ幼かったわたしにとっても、「信じられない」話だった。

わたしの父親は公務員で、それなりの役職と地位にある人だったが、その界限は比較的裕福な家がずらりと並んでいるといったような一画で、隣のおじさんとおばさんは不動産業者だった。つまり、飼い犬に動物病院で手術を受けさせるくらいわけないくらいの資産を持っていたのである。

わたしは弟と、間にきゅうりを挟んだちくわを持って、庭先に出てきたちくわによくそれをあげたものだった。

「ちくわを食べるのが好きな、ちくわという名前のチワワ犬」

「泡をくって、慌ててちくわを食べる、あわてんぼうのチワワ犬」

わたしと弟は、ちくわにちくわをやりながら、よくそんな話をしては笑っていた。

そしてそのちくわが死んで一ヶ月と経たないうちに――隣のおじさんは長年乗ったマークIIからロールスロイスに車を乗り換え、その隣にはジュリエッタという名前のプードル犬が座って

いた。

「あのおじさんのネーミングセンスってよくわかんないよな」と、セキュリティ付の立派な車庫からロールスロイスが出ていくのを見送りながら、弟のアキラが言った。「ちくわの次はジュリエッタだってさ。なんにしてもちくわが可哀想だよ。死んで一ヶ月も経たないうちに一一死んだことさえ忘れ去られたみたいに、別の犬を飼われるだなんてさ」

「隣のおじさんにとって＜犬を飼う＞ってというのは、一種のステイタス・シンボルみたいなものなんじゃないの？よくわかんないけど」

「ステイタス・シンボルって何？それがあつたら、何をしても許されるの？」

四つ年の離れた弟は、意味のわからない単語がわたしの口から出てくると、いつもそんなふう

に聞いてきた。  
わたしはそのたびに「わからなきゃ辞書を調べなさいよ」とか、「あんたみたいなガキには、まだわからないかもね」と言って誤魔化してきたけど一一実をいうとわたしは、弟のアキラのことを（我が弟ながら、ちょっと普通じゃないわね）と思っていた。

それは父や母にしても同じで、彼はキッズモデルになれそうなイケメン小僧であるばかりでなく、成績も優秀で、何よりスポーツがよく出来た。高校の時、当時熱中していたアイスホッケーで、プロのリーグから勧誘が来たこともあったけれど、それを蹴って大学へ進学。その後、膝を壊して選手生命を絶たれたが、（スポーツをやっている人間らしく）友人も多く、父のコネで世間でも名の通った一流企業に就職していた。

つまり、わたしの弟は「性格が暗く友達もおらず、中学時代から引きこもっており、現在はニートをしている……そして本人がなかなか入らせない部屋には、アニメや漫画などのオタクグッズがひしめいていた。だが、それはすべて公務員をしている父親から月々お小遣いをもらって買ったものである」一一といったようなこととはまるで逆の意味で、少し普通じゃなかった。

それに引き換え姉であるわたしは、成績は中の下、容姿のほうはモデルのようだがどう見ても将来はお水系の顔立ち、実際十六の時から家出を繰り返し、ボーイフレンドの家と実家を出たり入ったりしていた。

女友達はひとりもおらず、髪の毛を茶色く染め、派手なピアスやネックレス、指輪をするのが大好きという子だった。

好きなブランドは、グッチやシャネル……四十万するバッグや二十万の靴をひとつ買うたびに、同居しているボーイフレンドとは別れる・出ていくの喧嘩になるという、そんな生活を繰り返していた。そしてこういう、頭カラッポそうな娘には、それに相応しい男しか寄ってこないものだ。

わたしは最初はウェイトレス、それから友達で紹介してくれたバーで働くようになり、最後にはキャバ嬢になった。

ここでわたしが今までどういう男とつきあってきたかとか、そうした男遍歴について長々と語るつもりはない。キャバ嬢をやっていたのは五年になるから、その間色々なことを経験したし、その中には面白いエピソードや笑えるエピソードもたくさんあったと思う……でもわたしはあえて、自分がキャバ嬢をやめた二十八歳の夏から、この物語をはじめたいと思っている。



人間、二十八歳ともなると、どんな馬鹿でも先々のことがそれなりに不安になるものだ。

もちろん、「自分は今二十八歳で、将来になんの不安も感じていませんが、何か？」という人もいるには違いない。

けれど、わたしは二十八歳の時、あるひとつの決意をした。三十を過ぎて、年齢を気にしながらキャバ嬢として働き続けるより——もっと地に足のついた生活がしたいと、初めて思うようになったのだ。

キャバ嬢として五年も働いたのなら、それなりに貯金もあるのだろう……普通の人はそのふうには想像するかもしれない。

だが、月々のお給料の大半がブランド物の服やバッグや靴に変わるというわたしの性癖は相変わらずだったので、それほど大した額の貯金があるわけではまったくなかった。加えて、わたしにはもともと将来というものに対する計画性といったものがまるでない。

この時も正直、（やめたらやめたで、なんとかなるだろう）としか思っていなかった。けれども、世間はそんなに甘いものではなく、「キャバ嬢」という職業をひとつのスキルとして認めてくれるような、懐の深い面接官などは、ほとんどいなかったとっていい。

結局わたしは派遣社員として二千円のポロシャツが半額の千円で売られているといったような、デパートの洋服売場で働くことになった。しかもここでさえ、「勤務態度が悪い」ということで、二ヶ月でクビになるという始末……パトロンになっていた男が提供してくれた部屋も、別れることが決まると同時に没収。

こうしてわたし、川上サクラは、新しいアパートと職業を同時に探すはめになったというわけだ。

実をいうとわたしがキャバ嬢をやめたのには、弟アキラの存在が大きい。

よく出来た弟に、不出来な姉……世間ではよくある構図だけれど、十八で完全に家を出て以来、弟と会ったのはほんの数回だけだった。四つ年の離れたアキラはその時二十四歳で、大学卒業後に就職した一流企業（時々TVでコマーシャルを見かけるくらいの、名前を聞けば誰もが知っている企業）で働きはじめ、二年目になろうかという頃だった。

「一体、どうしたのよ、あんた」

アナスイの紫色のスリッパドレスを着たあたしは、「柊由美さんをお願いします」と指名してきた客が実の弟であると気づくなり、正直少しがっかりした。弟はジュノンボーイになれそうなくらいの童顔で可愛らしい顔立ちをしており、そんな顔ではにかんだように微笑まれると、大抵の女性は陥落するだろうと思われるような容姿の持ち主である。そんな男のすらりと背の高いビジネススーツの後ろ姿を見て——（もしかしてイケメンだったりして！）と期待したわたしの心は見事裏切られる結果となった。

「ふう～ん。姉ちゃんってこういうところで働いてんだ」

きよろきよろと周囲を見回し、薄暗いアンティークな照明の間に飾られた、モネの睡蓮やゴッホのひまわり、ルノワールの浴女といった絵に目を留め、彼はベルベットのソファを何気なく撫ぜていた。わたしが弟の顔の表情を見ていて思うに――わたしはアキラがおそらくは、もっと場末のひどい酒場といった場所を想像して、実の姉を訪ねてきたのではあるまいかと感じていた。

「悪くない店だね。ここまで案内してくれた人も、心の中で札束を数えているようなポン引きって感じの男じゃなかったし」

「ぼん引きってあんたねえ……」あたしはウィスキーの水割りを作りながら、呆れたように言った。もちろん弟のためにではなく、自分が飲むためだ。「その死語の意味、ちゃんとわかって言ってる？ミズシマさんは案内係って言うよりは用心棒として働いてるって言う人なの。ちなみにオーナーはあっち」

スワロフスキークリスタルのシャンデリアの下、店の常連客と話しこんでいる今時リーゼントの中年男を、あたしは指差した。

「なんだか、シャネルズのヴォーカルに似た雰囲気の人だね。いや、横浜銀蠅かな」

「あんたの年で横浜銀蠅がわかるってどうなの？まあ、それはいいとして、あたしになんか用？」

下戸というほどではないけれど、酒があまり飲めない弟のことを、あたしは脚を組んで馬鹿にしたように振り返った。

「酒の入った男の前で、そんな際どいポーズを日常的にとってるって知ったら、父さんがどんなに嘆くか……なんていう話をしにきたんじゃないけど、ちょっと仕事で色々あって、憂さ晴らしにきたって言うそれだけなんだ。会社のつきあい以外でこういうところに来たことって一度もないし、これからも来たいとは全然思わないから」

「ふうん、あっそ」

オーダーがなかなか出ないので、カウンターの向こうのバーテンダーが少し不思議そうに首を傾げていると、ミズシマさんが「おとうと」という単語を彼に耳打ちしているのが見えた。するとバーテンダーのヒロユキは、あたしに弟がいるだなんて、天地がひっくり返ってもありえないといったように驚いた顔をしている。

(あたしにだって弟や、生んでくれた親くらいいるわよ)

心の中でそう思いながら、あたしはウィスキーをがぶ飲みした。これは全部、弟のおごりになるとわかっている。

「俺のまわりには、姉さんみたいにウィスキーやブランデーを普通に飲むようなタイプの子って、ひとりもないんだよな……なんでだろ」

「なんでって、決まってるでしょ。あんたがそこそこいい大学を卒業していて、テニスコートでパンチラしてるような清純な子としかつきあわないっていう偏見レンズの眼鏡を通してしか、周囲を見てないからよ」

「俺、姉さんのそういう皮肉っぽいところ、すごく好きだよ」アキラは人好きのする笑みを浮かべながら言った。でも今日は、その笑顔にどこか陰りや憂いといったものが混ざって見えるのは――店の薄暗い照明のせいばかりではなかったらしい。「俺が父さんのコネですごくいい会社に就職したって言うのは、姉ちゃんも知ってるだろ？この就職難って言われる時代にさ、普通に

考えたらすごくラッキーなんだって俺自身わかってるつもりだけど……毎日ペコペコ周囲に頭下げて働くことに、少し疑問を感じるっていうかさ。いや、一応表面上は営業成績も人間関係もうまくいってるんだけど、その下には<本当の俺>っていう奴が隠れてるんだよな。で、その<本当の俺>ってのは、物凄くストレスを抱えこんだ上、本当は仏頂面してて、上司の寒いギャグに対してピクリとも笑いたいとは思ってないのに――一生懸命空笑いしたり、飲みたくない酒を勧められるがまま飲んで騒ぐ振りをしてたり……疲れるんだよな、ほんと。もしこれが社会人とか、一人前の大人になるっていうことなら、俺だって家に引きこもってニートにでもなりたいたいって思うよ」

「くだらない悩みね。あんたの悩みがもし本当にそれだけなら、べつにあたしのアドバイスなんていらんんじゃない？あんたは自分の愚痴をきちんと聴いて吸収してくれる誰かさえいたら、次の日にはまた会社へ行ける気力も体力もあるってタイプよ。次にもしあたしに会いにくるんなら、もうちょっとまじな相談事ってものを持ってくるのね」

正直、通りいっぺんの男の愚痴なら、耳にタコが出来くらい聞き飽きている。そうした客の中にはスケベなハゲ親父やデブ男なんかがいっぱいいて、自分は自分の労力に見合ったものを社会や人生から見返りとしてもらっていないといったような愚痴をこぼす。

だからせめて金を払って少しばかりいい思いがしたい……そんな甘えるぼくちゃんの気持ち、わかってくれましょか？といったような具合で、胸の谷間をじろじろ見たり、色魔のように太腿にタッチしてくるというわけだ。

「そうだね。なんか姉ちゃんに会ったらさ、自分の悩みごとがやけに小さく感じられるようになったよ。あっちのテーブルにいる人」と、奥のテーブルにいるガラの悪い一団を、アキラは目線で示す。「はっきり言って、ヤクザだろ？あんな連中に酒を振るまったり媚を売ったりすることに比べたら、会社の接待の場で芸をすることくらい、大したことないように思えてきたな。うん、俺姉ちゃんの言うとおり、明日からまた頑張ることにするよ。じゃあ、今日は本当にどうもありがとう」

弟がこの時何故そそくさと席を立ったのか、あたしにはわかるような気がしていた。アキラの言ったヤクザ連中のひとりが、しきりにこちらへガン飛ばしていたからだ。それもそのはずというか、実はわたしは彼らに結構気に入られており、一晩どうだ？という誘いを前から何度も受けていた。

地下にある店から地上に出、そこに並んでいたタクシーに乗りこむ間際、弟は最後にこんな捨てゼリフをわたしに吐いてから帰っていった。

「姉ちゃんみたいに社会の底辺で這いつくばるように頑張ってる人が、世の中にはたくさんいるってことだよな。うん、俺、本当は会社辞めようかどうしようかって悩んでたんだけど、明日からまた頑張ってみるよ」

「……………っ！！」

――絶句するというのは、まさにこういうことを言うのだろう。

わたしは普段から皮肉な言葉による切り返しといったものを得意としていたけれど、流石にこの時ばかりは喉の奥から言葉が出てこなかった。一応、客の見送りといった態で用心棒のミズシ

マさんも一緒に来てくれたのだが、普段滅多に笑うことのない彼が、この時ばかりは大笑いしていたくらいだ。

「育ちがいいってというのは、ああいうのを言うんだろうな。俺、あんたが言い返せない相手を初めて見たぜ。流石はあんたの身内ってところか？」

「うるさいわねっ。本当はなんか一言言ってやろうと思ったんだけど、それと同時にタクシーのドアが閉まっちゃったっていう、それだけのことよっ」

わかった、わかったとミズシマさんは言い、あたしの肩を抱いて、再び弟のいう社会の底辺世界へと一緒に戻っていった。



この日の夜、何故かわたしの頭の中では弟の言った言葉がぐるぐると渦を巻くように何度も思いだされて――なかなか寝つけなかった。

隣には自分がずっと落としたいと思っていた男が、寝息を立てて眠っている。ミズシマさんは日系ブラジル人とフランス人のハーフだとかで、どこか日本人離れした整った顔と体躯の持ち主だった。そんな彼は店の女たちがいくら色目を使っても顔色ひとつ変えることはなく……かなりあからさまなボディタッチをされてさえ、尻の軽い女の誘いに乗ることは決してなかったのだ。

わたしはいつでも、次のうち二種類の恋愛しかしたことがない。つまり、表面上はどう見えるにしても、主導権を握って相手に物や心や時間を貢がせるタイプの恋、あるいは自分が一方的に相手に貢ぎまくってのぼせ上がるという恋愛のいずれかだった。

ミズシマさんとの恋は、もしこのままつきあい続けたとしたら、後者に属するものになるだろうと、あたしにはよくわかっていた。何故なら、わたしが結婚したいと思うタイプの男は大抵、わたしのことを結婚対象とは見なしてくれないからだ。

もちろん、大人の女としていわゆる「一晩のあやまち」として片付けることは出来たけれど……結局ミズシマさんも、弟のアキラと同じく、結婚するならテニスコートでパンチラしてるような女子がいいのだろうと、あたしはこの夜、ミズシマさんの部屋で煙草を吸いながら思っていた。

彼と寝たいと思っている、店の他の女たち――サヤカやカオルのことを出し抜いてやったというのに、全然素直に喜べない。

そしてあたしは、きっぱりキャバ嬢をやめ、弟アキラが言うところの「底辺社会で這いつくばるように頑張る」ことをやめることにしようと心に決めたわけだ。

とはいえ、数箇所登録していた派遣会社を次々クビになるに至って、わたしにはどうも社会適応能力といったものが欠如しているらしいとあらためて考えざるを得なかった。

「じゅげむ、じゅげむ、五劫のすりきれ、食う寝るところに住むところ……」

あたしはブツブツと何かの呪文かお経でも唱えるようにそう呟きつつ、最終的に唯一の自分の手持ち品となったキャリーバッグをゴロゴロ引きずり、丘の上にある〈ベルビュー荘〉という下宿を目指していた。

いつもブランド物を売りにいく中古品屋の目利きの親父と死闘を演じた揚げ句、今あたしの手元にはこれまで買いあさったシャネルのバッグもスーツもプラダやグッチの靴やアクセサリも綺麗さっぱり何もなかった。

(人間、身軽になろうと思えば、手荷物がこんなにコンパクトになるとはね)

あたしはげえげえと息を継ぎながら熱い六月の夏の午後、汗だくになってその坂道を上っていた。ミーンミーンだのシャワシャワだのと、セミの鳴く声がやたらうるさい。よもや、社会の

底辺から這いのぼろうとして、さらにその下の世界へ転げ落ちようとは……世界広しといえども、そんなのはあたしくらいのものでろうと、自嘲の笑みが自然と浮かぶ。

もちろん、「こうなったのはそもそもあんたのせいよっ！」と有無を言わせぬ勢いで弟を怒鳴りつけ、彼の部屋へ居候させてもらうという手もあるにはある。けれど、わたしは変なところで負けず嫌いだった。次にもしアキラがわたしに会いにきた時には――絶対に、「姉ちゃんには叶わないや」と奴が思うくらいの暮らしをしていなくては、気が済まなかった。

「もしかしてあんた、川上サクラさん？」

急な坂道の両側に生える樹木が、ちょうどよく陰を作っているその下に、男の影が溶けていた。ずっと下ばかり見つめていたから、首さえ上げるのも億劫だったけれど、名前を呼ばれちゃ仕方ねえとばかり、あたしは額の汗をぬぐって目の前にいるらしき人物をまっすぐ見つめた。

(あ、ちょっといい男じゃん。少し好みかも……)

そう思うまもなく、どう見ても年下そうに見える彼は、ひょいと白いガードレールから身軽な猿のように腰をおろしていた。

「寮母さんがさ、キツイ坂道を上ってくるんじゃない大変だろうから、暇なら迎えにいけっていうから来たんだ。まあ、期待はしてなかったけど、まさかここまでとはね」

――はあ？

その時のあたしはたぶん、全身汗まみれで疲れきってもいたから、相当間の抜けた顔をしていたと思う。

いつものように言い返す気力さえなく、あたしはただ(しっつつれいな奴!!)と思い、目の前の弟くらいの年の青年をじっと睨んでいた。

「おっかねー。あんたさ、もう二十八にもなるんだろ？それなのに住むところもなく下宿暮らして、ちょっとどうかと自分でも思わない？」

「うるさいわねっ。人にはそれぞれ、色々な事情ってもんがあるのよっ」

「まあ、そりゃそうだ」

まだ名前もわからない青年は、頭の後ろで両手を組むと、あたしの隣に並んで歩きだした。

どうやら、キャリーバッグをかわりに持ってくれるような、紳士の気遣いとは無縁の人物らしい……それとも、もしあたしが彼の期待どおりの可愛い女の子だったとしたら、そうしてくれたということなんだろうか？

「一応さ、いきなりうちに来たんじゃないびっくりすると思ったから、歩きがてら先にレクチャーしておこうかと思ってさ」

リアルなどくろの描かれたTシャツに穴のあいたジーンズ、すりきれたスニーカーといった格好の青年は、息の切れているあたしに構うことなく、リードするように先を歩いていく。

「まず、一号室に住んでるのが……」

「その前にあんた、自己紹介くらいしたらどう？第一、名前はともかくとして、なんであんたがあたしの年まで知ってんのよ。下宿のことをうちって呼んだってことは、あんた寮母さんの息子か何かかわけ？」

「だとしたら、良かったんだけどね」

彼が何故溜息を着いたのかは、この時のあたしにはまだわからないことだった。それで、息が

切れて言葉を継ぐのが億劫だったせいもあり、彼が次の言葉を発するのをただ待つことになる。

「あんたもわかってるだろうけど、下宿ってのは普通のアパートなんかと違ってかなりのところプライヴァシーってもんがあげすけになる。ただそのかわり、三食ついて一月の家賃がたったの二万円……こんなところで面倒を見てもらおうなんていうのはさ、貧乏学生か何かの事情を抱えた人間のどっちかだっで見当がつくだろ。あんたも含めてさ」

「まあ、そりゃそうよね」と、あたしは肩を竦めて答えた。セミの鳴き声が相変わらずうるさい。

「で、順にあんたの質問に答えていったとすると――俺の名前は <sup>ミズシマレン</sup>水嶋蓮。寮母の笹谷ミドリさんとは、血の繋がりも何もないよ。おんぼろ下宿のベルビュー荘には、二十二の時から四年住んでる。よくあるだろ？大学を卒業と同時に親の仕送りが止まって、でもこっちは相変わらずバイトで食い繋いでいて……みたいな話がさ。俺もその口」

「ふうん。あっそ」

（なんだ、ただの甘やかされたような、普通のお坊ちゃんじゃないの）

それと同時に、あたしの返答が素っ気なかったのには、もうひとつ理由がある。ミズシマ――その苗字を聞いてあたしが思いだすのは、俳優の水嶋ヒロか一度だけ寝た関係の水嶋昂のふたりだけだ。スバルとレン……どう考えても彼らふたりが遠い親戚であるとか、そうした可能性はなさそうだけれど、わたしは自分が店を去る時、彼が意外にも傷ついた顔をしたのを思いだし、なんとなく胸が痛くなった。

「あんたさ、もしかしてその『ふうん、あっそ』って言うのが口癖な人？もしそうだとしたら、その癖は直したほうがいいな。自分からつまんない人生を呼び寄せてるようなもんだからさ」

「年下のくせに、さっきから随分生意気言うのね。あんたアレでしょう？バイト先ですごく生意気な口か屁理屈ばかりこねるもんだから、ある日突然上司にクビにされたりするんじゃない？で、どこの職場でも長続きしなくて、いつまでも学生気分で下宿生活してるっていう、そういうタイプなんじゃないの？」

「ふん。なんとでも言えよ」

何も知らないくせに、というような、どこかひねた眼差しであたしを見返しながら、レンは坂道を先にずんずん進んでいった。

それ以上彼が何も言い返さなかったのは、それが凶星だったからなのかどうか、あたしにはわからない。

ただ、レンがデューク更家のデュークズウォークをしながら余裕綽々と坂道を上っていく姿を見て――「ちょっと待ちなさいよおっ！！」と叫びながら彼の後を追っていったという、それだけだった。

結局、レンから下宿の同居人についてレクチャーを受けられなかったあたしは、夕食の席で一階の1号室から3号室に住む住人、それから二階の五号室と六号室に住む人物の紹介を受けることになった（ちなみに四号室はなく、二階の七号室がわたしの居住空間となっている）。

「こちら、新しく七号室に住むことになった川上サクラさん。みなさん、仲良くしてくださいね」

寮母である笹谷ミドリさんは、まるで学校の先生が転校生でも紹介するような具合で、あたしのことをそう紹介した。

しかも、「引っ越し祝い」とかで、赤飯まで炊かれた日には……まるで初潮を迎えた中学生みたいに、なんだかあたしは気恥ずかしい感じがしていた。

ごはんのメニューは他に、しいたけとわかめのお吸い物にポテトサラダ、それに鶏肉の揚げ物といったところで、決して豪華というわけではない。それでもあたしは久しぶりに〈家庭の味〉といったものに触れることが出来て――なんだか昔懐かしいような、不思議な気持ちになっていた。

普段は大体、スーパーの惣菜物コーナーで一品か二品買って終わりなんていうことが、あまりにも多かったから。

「それで、こちらは1号室の斉藤久臣さん。印刷会社で夜勤の仕事をしてらっしゃるの。勤務時間は大体、夜の八時から翌朝の五時くらいまで……残業があると、帰りがもっと遅くなったりね。だから、出来れば昼間はなるべく静かにするようにしてほしいの。そして2号室に住んでいるのが……」

ミドリさんが斉藤さんの隣のレンを紹介しようとしたので、あたしが「もう知ってます」と言おうとしたところ、ベルビュー荘の一番の古株らしき、1号室の住人は席を立てていた。

「すみませんがミドリさん、私はもうこれで……」

お盆にのった赤飯とお吸い物、鶏肉とサラダといったメニューをそのまま持ち上げると、ブルーグレイの作業着を着た斉藤さんは、そそくさと自分の部屋へ戻っていった。

「じゃあ、僕も……」

席順から察するに、彼がおそらく3号室の住人なのだろうと思われる人物――大谷瑞希くんも、斉藤さんに続くようにトレイごと食事を持って自室へ籠もってしまった。

正直なところを言って、わたし的な判断による〈普通の人〉が、「わたし」という人間に対してとる態度としては、上々といったところだ。何故かはわからないけれど、昔からあたしはある種の人々に今のとまったく同じような態度を、一目見るなりとられてきた。

今は栗色をしているけれど、以前は金髪だったこともある髪や、膝上二十センチのホットパンツに臍だシルック、派手なピアスとやたらジャラジャラいうブレスレットやネックレスをしていれば、ある意味当然なのかもしれないけど……「彼ら」はわたしのことを第一印象で「将来ろくなものにならないアバズレ」といった烙印を押す。

もちろん斉藤さんやミズキくんがあたしのことを一目見るなり「しょうもないアバズレ」と思

ったかどうかは定かではない。というより、彼らの態度のそれは相手が誰であれ人見知りするのだといったものであるように見受けられたので、あたしはさして気に留めもしなかった。

「ミズキくんはね、わたしが離婚した夫のほうの甥っ子なの。まだ十九歳なのよ。可愛いでしょ？」

「そうですね。なんだか、人生まだまだこれから、青春まっさかりみたいなの……」

一応、場に合わせて社交辞令的にそんな言葉を口にしてみたものの、あたしがミドリさんの甥だというミズキくんを抱いた最初の印象は、（すごく暗そうな子……）というものだった。そして斉藤さんはどう見ても四十過ぎか五十過ぎの冴えないおっさんにしか見えず、（その年でいまだに下宿暮らしてどうなの？）と、自分のことは棚に上げて、あたしはそんなことを思っていた。

さらにもっと言わせてもらうなら、一番わからないのが寮母の笹谷ミドリさんだ。彼女は二階の5号室を自分の居住空間にしており、朝・昼・晩の三食の食事も彼女が作ってくれるのだという。ちなみに食費のほうは月二万という下宿代のほうに含まれているらしいが、もしそれを勘定に入れないとしたら、寮母の彼女には毎月五人の下宿人から約十万円ほどの収益があるということになるのか。

いや、それにしても、とわたしは思う。もしここがおもに学生を対象にした下宿屋だというのなら、半分以上ボランティア感覚で運営しているということで納得できなくもない。けれど、月にたったの十万ぼっちの収入しかないのに――ミドリさんがこの＜ベルビュー荘＞を運営しているメリットがどこにあるのか、あたしにはさっぱり理解できなかった。しかも、この寮母の笹谷ミドリさんという人は、いつもニコニコした気のいいおばさんといった感じの女性で、正直わたしは彼女の醸し出す＜善良オーラ＞のようなものが怖い気さえしていた……本当は、食べることと住む場所と働くところに困っていたのだから、こういうのを地獄で仏に会ったとでもいべきなのだろうけれど。

「ええと、五号室にはわたしが住んでいて、そして六号室に住んでいるのが」と、わたしの内心の思惑にはまったく気づかず、ミドリさんはニコニコしながら続けている。「二階堂ほたるちゃん。可愛い名前でしょう？ほたるちゃんはね、女優を目指してオーディションを受けてるのよ。サクラちゃんも応援してあげてね」

「やだあ、ミドリさん。劇団のことは言わないでって、いつも言ってるのに」

……正直な人間であるわたしは、やはりここでも、内心思った本当のことを告白せずにはいられない。

確かにわたしはこれまで、女友達がろくにいた試しはない。でも、それは自分に嘘をつくのが下手だからだ。そういう意味で、

（この子が女優のオーディション？寝言は寝てから言えって言葉は、こんな瞬間のためにあるのかしら？）

とわたしが彼女の容姿を見て思ったとしても――それは仕方のないことだと、笑って許してほしいと思う。

「二階堂ほたるです。前まで七号室には、モデルをやっててミス・ユニバースの最終選考にまで残った人が住んでたんですよ。七号室はやっぱり、綺麗な人が住む運命にあるのかもしれない

ですね」

もし他の場所で会ったとしたら、（どこの芋娘だろう）と無視するタイプの女と、あたしは愛想笑いを浮かべながら握手をした。心にもなく「よろしくね」などという言葉の口をしながら。「奈々美さんは、容姿だけじゃなく心も綺麗だったからな。サクラとは違うよ。この人は口も悪ければ性格も悪いって人だから」

「相変わらず失礼な奴ね！！」

あたしはテーブルクロスの下、レンの足を思いきり蹴ってやった。「いって一な」と言いながらも、大して応えてない様子で、レンは赤飯をもぐもぐと食べ続けている。

そのあと、食事の間中、レンはあたしのことを無視する形で、ミドリさんやほたるさんを相手にTVを見ながら世間話をしていた……会話の格好としては、レンが徹底的にあたしを無視しているので、気を遣ったほたるやミドリさんがあたしにも会話のネタを時々振るといったような感じだ。

今日は引越し初日だから、大人しく食堂のテーブルに着いていただけで一次からはわたしも、斉藤さんやミズキくんと同じく、お盆を手にして自分の部屋へ引きこもって食事をしようかと思っていた。ミドリさんの話によれば、食堂での食事は特別強制ではないということだったから。

あたしは「お先にどうぞ」と勧められるがまま、食事のあとお風呂へ入り、軽く挨拶をして二階の自分の部屋である七号室へ向かった。当然のことながらバスルームは一階にあるので、レンがミドリさんやほたるさんと仲良く話をしながら、食事の後片付けをしているらしい様子や、3号室からまったく物音や人の気配がしないのも確認していた……1号室の斉藤さんはすでに出勤しているので、そこから人の気配がしないのは当然にしても——（あの暗そうなミズキくんとかいう男の子は、普段一体部屋で何をしているのかしらね）と、あたしは不思議に思った。

「レンくんがいつも色々手伝ってくれるから、助かるわあ」

「そうそう。女のあたしなんかより、ずっと料理もお上手ですもん。結婚したら、女の人はずごく助かりそうですねえ」

「べつに、普通じゃない？まあ、俺はイタリア料理店で皿洗いしたりとか、喫茶店でラザニア作ったりパフェ作ったり、そういうバイトしてたから、そのせいかもしれないけど」

（やれやれ。あんな中年のおばさんと軽くブスめの女にちやほやされて、あいつも何が楽しいのやら）

自分のことは棚に上げて、あたしはこの下宿はようするに負け犬の巣窟なのではないかと思いはじめていた。わたしが今いる部屋には以前、モデルの綺麗な女の子が住んでいたというけれど——その女性ですら、ミスユニバースの最終選考どまりだったのだ。そしてこの部屋から出ていったということは、夢を追うのを諦めて郷里へ帰ったか何かしたということなのだろう。

（こんな縁起の悪い下宿、ある程度お金がたまったら、速攻でていくに限るわ）

それでも、最初に思っていたよりは、下宿といえどもそれほど居心地の悪い場所ではない……あたしはそうも思っていた。

もっとプライベートがなくて、性格のそりが合わない隣人ともうまくつきあっていなくて

はいけない——そんなふうには想像していたから。

でも、一階には昼間は夜勤に備えてほとんど寝ている人間と、ちょっとシニカルな性格のイケメン、いるのかいないのかよくわからない浪人生と、二階には人の良さそうな寮母さん、容姿は軽く不細工目でも、性格は良さげなひとつ年下の女の子が住んでいて、人間関係的にはなんとかやっていけそうな、そんな雰囲気だった。

確かに、＜ベルビュー荘＞は見ため相当オンボロなひどい建物だけれど、7.5畳ほどのワンルームには綺麗な絨毯が敷いてあって家具・ベッド付だし、それらは使用感はあるもとても清潔そうで、全体として好感の持てる室内だったといえる。

（もし、賃貸情報誌の片隅に、このベルビュー荘のことが載っていなかったとしたら）と、あたしはお日さまの匂いのするふかふかのベッドの中で思った。（今ごろあたし、どうしてたかしらね？明日、派遣会社からの振込みがちょろっとあるにしても、現在財布の中には千とんで十三円しか所持金がない。そのせいでバスにも乗れず、あの長い上り坂をえっちらおっちら苦労して上ってくるハメになったけど……ほんと、食事付の下宿、月二万円っていうあの広告がなかったら、今ごろマジであたしホームレスだわ……）

そしてあたしが、高架線下か公園脇あたりで「レイプされたらどうしよう」などと怯えつつ、体を惨めに縮こまらせている己の姿を脳裏に思い浮かべていると——ぶうん、と何か耳慣れない羽音が顔の真ん前を通り過ぎていくような気配があった。こ、これはもしや、ここ数年お目にかかっていない、あの……。

「ぎゃあああああ———ッっ！！！」

エクスクラメーションマーク×∞！！！！というの、まさにこのことだった。

そしてこの、絹を裂くよな……もとい、耳をつんざくような叫び声は、階下にもよく響いたらしい。

すぐにドタバタと階段を上ってくる足音が聞こえ、ノックをするでも許可を待つでもなく、即座にバタン！と部屋のドアが開けられた。パチン、という音とともに、照明がつく。

「フハハハハハハッ！！これでも食らえっ！！」

＜ゴキブリ殺し＞（コックローチ・キラー）と書かれた、何やら外来品らしいスプレーを、レンがゴキブリめがけて噴出する。

だが、敵もさるもの……そう簡単に殺虫剤の餌食にはならなかった。ミドリさんとほたるは部屋の入口のところで、突如マッドサイエンティストと化したかのような男のことを、口元を塞ぎながらじっと見守っている。

「ちょっとレン、その殺虫剤……ゴホッごほっ！！」

（人体に影響ないんでしょね！？）というあたしの言葉は、口から出てこなかった。

にも関わらず、レンはあたしが何を言わんとしているのかよく理解していたらしい。

「人間が吸い込んでも本当に大丈夫なのかって言うんだろ！？奈々美さんの話じゃあ、英語で「※人体に有害な物質を含みます」って書いてあるってことだったがな！！」

「ちょっと、それを早く言いなさいよっ！！」

あたしはベッドからすかさず下りると、部屋の入口、ミドリさんとほたるのいる場所まで避難することにした。

けれど……。

「ぎゃあああああっ！！やめてええーっ！！」

まるで狙った獲物は逃がさねえ、とでもいうように（そんな高度な知能がゴキブリ如きに備わっているはずはないのだが）、四匹いたゴキブリのうちの一匹が、あたしの後ろをすかさず追いかけてきた。

「サクラちゃん、こっちよ。わたしの後ろに隠れて！！」

箒を手にしているミドリさんとほたるが、互いに一致団結するように頷きあい、極めて原始的な方法で害虫を駆除すべく取り掛かる……結局この夜、出没したゴキブリのうち三匹をレンが殺虫スプレーで仕留め、残る一匹をミドリさんとほたるがドツタンバツタンみしみしと廊下に箒を振り回しながら、とどめの一撃を刺したのだった。

「ふう〜っ。一仕事したわね」

気の狂った鬼婆のように箒を振り回していたミドリさんが、ほっと溜息を着いて言う。

「ほたるちゃんも御苦労さま。下へ行ってゆっくり、お茶でも飲んで休みましょうか……よかったら、サクラちゃんも一緒にどう？」

「は、はい……」

すっかり度肝を抜かれ、廊下の片隅にぺたりと座りこんでいたあたしは、レンに助けられてようやくのことで体を起こした。

「今時、『ウォーリーを探せ！！』のパジャマを着てるって、どうなんだよ？」

「知らないわよっ！！商店街で割引千円で売ってたっていうそれだけよ。それより、今度からは勝手に人の部屋へ入ってこないでよねっ。今みたいな緊急事態の時以外はっ」

「ほーう。あんたもしかして、俺がゴキブリにかこつけて、寝込みを襲うとでも思ってんのか？」

「違うわよっ。あたしは人のプライバシーをもっと尊重しろって話をあんたに……」

階段を下りていくと、一番下の親柱のところに、何故かミズキくんが立っていた。どこか気遣わしげな様子で、居間の入口にあるのれんの前をうろうろしている。

「よう、ミズキ。夜食でも食いに食堂へきたのか？」

「ち、違います」と、一瞬びくつとしたように振り返って、ミズキくんは黒縁の眼鏡を持ち上げている。「なんだか上のほうが騒がしかったから、どうしたのかなと思って……前に下着泥棒がでたことがあったでしょう？なんか僕、あの時奈々美さんに疑われていたような気が……」

「気のせいっていうか、おまえの被害妄想だって」藍染めののれんをくぐりながら、レンはなんでもないことのように言った。「第一、あの時の犯人はすぐ捕まっただろ？テレビでニュースにもなったもんな。『三年で四百五十枚もの下着を盗んだ泥棒、捕まる』だったっけ？」

「それは、確かにそうですが……」

ミズキくんはレンが「一緒に来いよ」というように食堂を指さしても、首を振ってとぼとぼ自分の部屋へ戻っていった。

正直なところを言って、なんだかよくわかんない子だ。

「ま、あいつの引きこもりはそう重症ってほどでもないんだよな。人が困っていたりしたら、助



けようって思うくらいの気持ちはきちんとあるんだからさ」

「へえ……」

(引きこもりの浪人生ねえ) と思いつつ、あたしは勝手にいらぬことを色々想像した。

離婚した夫の側の甥を下宿に引きとって面倒見てるっていうことは、そもそも元の家のようにいづらい環境があるっていうことなんだろう。そういうことなら、あたしにもわからないではない。あたしだって、特にこれといった理由もなく実家に「いづらい」ものを感じて、ボーイフレンドの部屋に寝泊りしていたのだ。

ただ、あたしみたいに＜外向的＞になれない子は、内に引きこもる結果になるという、たぶんそういうことなんだと思う。

そのあと、あたしはミドリさんやほたる、レンと一緒にお茶やお菓子を食べながら、何気ない世間話をして一時間ほど過ごした。下宿には特に消灯時間のようなものはないけれど、大体十一時半頃までにはおのおの自分の部屋へ戻るという暗黙のルールみたいなものがあるらしい。

もっともこの時、時刻はまだ十時半くらいだったけれど、今度はレンがあたしのことを故意に無視しなかったために、それなりに会話が弾んだ。というか、レンがわたしのパジャマのウォーリーを探すことに夢中だったために――余計な茶々を入れられなかった分会話が弾んだ、といったほうが正しかったかもしれない。

丘の坂道を上りきったところにある下宿、そこは誰が呼んだかベルビュー荘。

ゴキブリ出るのがたまに瑕だが、それ以外では自由にして快適。

朝・昼・晩の食事がついて、なんとたったの五千円という下宿料！！

さあ、生活に困ったそこの君。ベルビュー荘で一緒に暮らしてみないか！？

「何これ？っていうか、なんかめっちゃ受けるんだけど」

「ああ、それな。昔、俺が今いる2号室に住んでた人が、面白がって<ベルビュー新聞>っていうのを書いてたんだよ」

晩ごはんの下ごしらえとして、さやえんどうの筋をとりながら、レンがそう言った。

場所はダイニングキッチンでのことで、今ミドリさんは銀行に用事があるとかで、出かけていない。

あたしは時々、こんなふうにレンとふたりきりになれる瞬間を見計らっては、彼に色々話しかけるようになっていた。

「歴代のベルビュー荘の住人の中でも、ほとんど伝説的って言ってもいいくらい、面白い人だったらしいよ。今は確か、どっかの有名大学で原子物理学の教授をやってる人だって」

「へえ……そういえば、そもそもベルビューってどういう意味なの？」

歴代の住人の中には、負け犬でない人もいると知って、ほっとしつつあたしはそう聞いた。

ちなみに、レンがいつもしているミドリさんの食事作りの手伝いを、あたしはさっぱりする気がない。

「フランス語で『美しい景色』っていう意味」

どこか軽蔑のこもった声でレンはそう言い、筋をとったさやえんどうを手に、流し台へ向かっている。

なんでも、胡麻和えにするんだそうだ。

「っていうかさ、おまえ働けよ。毎日毎日ベルビュー荘でゴロゴロごろごろ……引きこもりのミズキよりおまえのがよっほど始末悪いだろ」

「あなたに言われたくありません！！」と、防御のために、あたしは両方の手を×印に交差させて言った。「大体、この下宿の人間ってほたるちゃん以外、まともに外界との接触を持ってない人間ばかりじゃない？ 斉藤さんは確かに、社会人としてちゃんと働いてる立派な人だとは思わよ？ でも仕事へ行く以外ろくに外出もしないような生活だし、あんたに至っては、あたしと同じくちゃらんぼらんな人生送ってるようにしか見えないんだけど？」

「久臣さんはな」馬鹿を相手にしても仕方ないというように、レンは溜息を着きつつ、ほうれん草入りの卵焼きをじゅうじゅう焼きはじめた。「本当はすげえ人なんだよ。こんなこと言ってもあんたには、『あのハゲ親父のどこが？』くらいにしか思えないだろうけどな……それと俺は、あんたとは本質的に何もかも、絶対に違うぜ。あんたが三週間前にベルビュー荘へやってくる前まで

、俺は新築のビルの内装を半年くらい、最後のほうは泊まりこんでやってたからな。ようするに俺はそういうインテリアとか内装美術の仕事なんかを、友達や知り合いから依頼があった時にやっていたよ。で、ひとつ仕事をこなすごとに暫く休むっていうサイクルなわけ。おわかり？」

『パイレーツ・オブ・カリビアン』のジョニー・デップを真似て、レンがさいばしをあたしの鼻先に向けてくる。

「ふう〜ん。なるほどね！でもそれを言ったらあたしだって、先週の土曜と日曜日はちゃんと働いたもんね！」

負け惜しみを言うように、あたしはその小さな事実を誇張して、胸を張った。正確には、派遣会社のほうから「どうしても人がいないから頼む」ということで、某アウトレットモールでバーゲンの呼び込みをやったという、たったのそれだけだ。

「だからあんたは何もわかってないっていうんだ」

玉子焼きを綺麗な形に焼き上げると、レンは次の一品へ取り掛かった。もやしときのこの炒め物である。

今日の夕飯はこれの他にさばの味噌煮があるきりなので、毎日思うことではあるけれど——（ほんと、安くすむ大したことない食事が多いのよね、実際）とあたしは感じる。もちろん、今の自分の身分で贅沢をいうことは許されないし、大体他のものが食べたければ自分で買ってくればいいだけの話でもある。その上、三食の食事の他に、三時頃下宿にいる人間にはおやつまで供されることになっていた。他に、食堂のテーブルの上にはせいべいやクッキーやキャンディボックスが置いてあり、それらのものは勝手に食べていいということにもなっている……これを至れり尽くせりと言わずして、一体なんと言うのか？

「俺は何もあんたに、正社員として最低でも週に四十時間は働けなんていう話をしてるわけじゃない。あんた前に、ミズキが部屋に籠もりっぱなしで、本当に勉強なんてしてるのかって俺に聞いたことあったよな？俺はその時あんたに『勉強なんかどうでもいいだろ』って答えた……あんたも同じだよ。べつにミドリさんの食事の手伝いとかはしなくてもいいんだ。ミズキは自分が本当は一体何をやりたいのかについて悩んでるっていうそれだけだからな。で、ここであんたにも同じことを聞く。サクラ、おまえはこのままだらだらベルビュー荘で過ごす以外に、一体何がしたいんだ？」

こんなこと、いちいち説明させてんじゃねーよ、というように、レンは思いきり顔をしかめている。

この時になって初めてあたしは、目から鱗のようなものが落ちるのを感じた……確かに、月に最低二万円さえ稼げば、衣食住のうちの食と住は保証されているのだ。だったら、派遣会社から仕事に来るのを待つ以外に、他にも将来のために出来ることを、今のうちにやっておくべきなのかも……。

「さて、と。俺は友達と仕事の打ち合わせがあるから、今日の夕食はいらなくてミドリさんに言っておいてくれ。じゃあな」

ボールの中のさやえんどうの胡麻和えにラップをし、もやしときのこの炒め物には蓋をし、卵焼きの味を確かめるようにひとつつまみ食いしてから、レンはジーンズのポケットに手を突っこんで出かけていった。

(憎たらしいことばかり言う奴だけど、でもやっぱりあいつはいい男なのかも)

さばの味噌煮の入った平鍋の蓋を開けつつ、あたしはあらためてそう思った。

芸術大学に現役で入ってるあたりからして、もともと頭はいいのだろう。そしてその才覚を生かしてインテリア関係とか内装美術の仕事をしているのだ.....専門的なことはよくわからないけれど、そういう仕事ってレンくらいの年で簡単にまわってくるようなものでもないだろうから、となると、たぶんあいつには人脈があるってことだ。

あたしには今みたいにつらく当たることが多いけれど、これがミドリさんやほたるが相手となると奴はかなりのところ人当たりのいい対応をする。

特にほたるには優しい。もし彼女がそれを恋愛感情と錯覚したらどうするのかって、あたしが思うくらいに。

もっともレン曰く、

「ほたるはな、そんなこと考えもしないし、思いつきもしないだろうから可愛いんだよ。それと俺は奈々美さんにもそうだったけど、真摯に夢を追ってる人間のことは、応援したくなるんだ。それがあんたとほたるの違いだな」

ということだったけれど。

他にもレンがその時あたしに言ったことを思いだして、あたしはひとり、食堂で軽い自己嫌悪に陥った。

「あんたはさ、もし仮に目の前にミス・ユニバースを目指してるって子がいたら、こう思うんじゃないか？相手がほんのちょっと可愛いくらいの容姿だったら、『ほんのちょっと可愛いくらいでなれるものじゃないのに、ご苦労さま』とかなんとかさ。で、相手がかんりのところ綺麗な容姿の持ち主だったとしても——『同じくらい綺麗な子がたくさん集まる中でしのぎを削るんだから、その中で選ばれるなんてありえないわ』みたいだね。それと、ほたるが女優を目指してるって聞いてあんたどう思った？彼女になれるくらいなら、まだしも自分のほうが望みがあるって、そんなふうにしたんじゃないのか？」

もちろんあたしはそのあとすぐに、「そんなこと思うわけじゃないっ！！」って、全力で否定はした。

でも本当は、ズバリ凶星を指されたも同然だった。あたしにはなりたいものがあるわけでも、将来こうなりたいという具体的な夢があるっていうわけでもないのに——他人のことに対してはあれこれ物知り顔に裁く傾向があるってことだ。

(あたして、そんなに嫌な奴だったっけ?)

チェックのテーブルクロスの上に突っ伏してると、サイドボードの上いくつかフォトフレームがのっているのが見える。

レンを中心にミドリさんやほたる、奈々美さん、斉藤さんやミズキくんの写っている写真が、たぶん一番最近撮られたものなのだろう。ベルビュー荘のベルビューというのは、フランス語で「美しい景色」という意味だとレンが言っていたけれど、確かに丘の上にあるこの場所からは、星空や街の景色が綺麗に見渡せたし、近くには桜の並木道を含んだ広い公園まであるのだ.....ほたるに聞いたところによると、この写真はみんな花見をしにいった時に撮影したも

のらしい。

(どうりで、バックに桜が写っているわけよね)

あたしは突然、何かが悲しくなった。レンはカメラに向かって満面の笑顔を浮かべており、その隣でモデルをしていた奈々美さんという綺麗な子が優しそうに微笑んでいる……レンはあたしに対してはこんな顔、一度もして見せたことがない。

いうなれば、わたしはこのバックに写っている桜と一緒にいたのだ。考えてみれば、昔からそうだ。本当はみんなと一緒にフレームの中に収まりたいのに——「そんなことして馬鹿じゃないの」とか「そんなくだらないこと、興味ないわ」とかなんとか言って、みんなと同じことをしようとしなかったのだ。

(一体いつからこんなひねくれた人間になったのかしらねえ……もしかして、生まれつき?)

そしてあたしが、「引きこもってるミズキより始末が悪い」と言ったレンの言葉に対しても、まったくそのとおりで反省していると——玄関のドアが開いて、ミドリさんが帰ってきたのだ。

「あら、レンくんがすっかり夕食を作ってくれたのね。本当にもう、助かっちゃう」

エコバッグふたつをパンパンにして両手に提げたミドリさんは、早速とばかり、商店街のスーパーで買った品を冷蔵庫へしまい始める。えのき茸、こんにゃく、白滝、豚バラ肉、じゃがいも、人参、ピーマン、ハムやさつま揚げなどなど……ミドリさんの隣に立って何気なく手伝っていると、最後に「じゃーん!」と言って、ミドリさんがハーゲンダッツのアイスクリームをあたしに差し出す。

「手伝ってくれたお礼ね。あと、最後の一個はミズキくんに渡してこなくちゃ」

「あ、あたし届けてきましょうか?」

「あら、そう?じゃあお願いね」

クッキー&クリームのアイスとスプーンを手に持ち、あたしはミズキくんの住む3号室のドアをノックした。暫くして、「なんですか?」という、いかにも生気のないような声が奥から返ってくる。

「アイスクリーム食べない?ハーゲンダッツのクッキー&クリーム」

「……結構です」

礼儀正しく断られたあたしは、(せめてドアの間から顔くらい見せたらどうなの!?) などと思いつつ、廊下をリビングへ戻っていきこうとした。

すると、1号室からぬうっと幽霊のような人物が現れ——それはパジャマ姿の斉藤さんだった——あたしの顔を見ても挨拶するでもなく、そのままトイレに入っていった。数秒後、ぶうっ!!と放屁する音が聞こえ、思わず笑わずにはいられない。

(やれやれ。あたしにはやっぱり、斉藤さんがレンの言うような「すげえ人」には思えないわね)

食堂では、TVでドラマを見ながら、ミドリさんがバニラ味のアイスクリームを食べていたので、あたしもまたその隣でストロベリー味のアイスを食べた。

ベルビュー荘での毎日というのは、とにかくこんな感じだ。三食のごはん以外にも何かとおやつがついてくるし、食堂や居間で新聞を見たりTVを見たりしていても、誰に気兼ねするでもな

くリラックス出来てとても居心地がいいのだ。

(でも、いつまでもその「居心地の良さ」に甘えてちゃいけないって、レンはそう言いたかったのかもしれないわね)

わたしはベルビュー荘及びベルビュー荘の住人について、自分が気になったことや知りたかったことは大体、レンかほたるに話を聞いて知っているつもりではあった。

たとえば、ミドリさんはやたら気前がよくて感じのいい人なのだけれど——こんな採算の合わない下宿屋を何故いつまでも続けているのかといったようなことだ。

「まあ、話すと長くなるんだけどな」

庭先で煙草を吸うレンの隣でマルボロに火をつけながら、あたしはインパチェンスやブーゲンビリアといった満開の花を眺めつつ、レンのいう〈長い話〉を聞いていた。

「ベルビュー荘にはこれまで、色々な人間がたくさん出入りしてきた……何しろ、ミドリさんの父親や母親の代から続いているんだから、ある意味当然といえば当然だけど。で、ミドリさんはこの下宿屋のひとり娘で、小さな頃からそんな〈色んな人たち〉と接してきたってわけだ。初期のベルビュー荘っていうのはもっぱら学生寮みたいなものだったらしくてさ、そうすると自然、色々なドラマが生まれる結果になるだろ？今は使われてない隣接した、すぐそばの棟」

と言って、レンは古ぼけてヒビの入った灰色の建物へ、煙草を向けた。

「あそこは昔ベルビュー女子寮って呼ばれてて、一階の広いフロアにはミドリさんを含めた管理人一家が住んでたんだよ。で、今俺たちが住んでるところっていうのは、そもそも男子寮だったんだ」

「へええ。それで、それで？」

とりわけ男女の恋愛話に興味のあるわたしは、レンのことを急かした。

レンはそういうあたしの性格を軽蔑しているみたいに、軽く溜息を着いている。

「まあ、年ごろの男女がこんな目と鼻の先に住んで青春を謳歌してるんだ……となると、起こることは決まってるよな？失恋か恋愛の成就、あるいはそこに至るまでの過程で生じる駆け引きとか……実際、ここの女子寮の子と自分の大学の後輩に二股かけてた奴が、その両方に引っぱたかれたりとか、色々あったらしい。まあ、このことはミドリさんの恋愛相手だった小山内克英氏の書いた、〈ベルビュー新聞、第56号〉に詳しい経緯が載ってるから、興味があったら読んでおくといい」

「えええ〜っ！？でもミドリさんの苗字、小山内ちゃうやん！旦那さんの苗字はミズキくんと同じ大谷やろ！？」

「なんでそこで大阪弁になる必要あるんだよ……まあ、それはいいとして」

じゃり、とスニーカーの裏で煙草をもみ消すと、「続きが聞きたきゃ、もう一本寄せ」とばかり、レンはあたしにマルボロを催促する。

「簡単にまとめるとすれば、だ。ミドリさんの青春時代っていうのはさ、東大で安田講堂事件があったりとか、浅間山荘事件があったりとか、大体あの頃なわけ。俺の親父やおふくろもその頃に恋愛結婚してるから、なんとなく時代の空気がわかるんだけど……簡単に言ったとすれば、その頃っていうのはまだ、今と違って〈青春〉っていう言葉が生きて輝いてたんだよ。何しろ俺

のおふくろなんか、兄貴を妊娠した時、「傷モノになった以上は家から出てけ！」って親に言われておんだされたって言ってたからな。今じゃ出来ちゃった結婚なんて、珍しくもなんでもないだろうけどさ」

「ふう〜ん。あんた、お兄さんいるの？」

「ああ。年は八つ違うけど、今髪を七三に分けた折り目正しい銀行員っていうのをやってるよ。おふくろは難産の末に兄貴を出産したとかで、その時「子供はもういらない！」と思ってずっと避妊してたんだってさ。でも八年後に「ついうっかり」出来ちゃったのが俺ってわけ」

「.....あんた、ちゃらんぽらんそうに見えて、結構シビアなもの背負ってんのね」

「今時シビアとか言わねーだろ？」と、レンは笑った。いつものどこかシニカルな笑い方。彼はいつもわたしの前では、こういう笑い方しかしたことがない。「まあ、俺のことはどうでもいいよ。それより今はミドリさんのことな。当時のミドリさんは言ってみれば、ベルビュー荘のマドンナ的存在だったらしい。あんたは相当切羽詰ってて、この下宿を下見にすらしに来なかったけど、普通は住む前に最低一度は見にくるもんだよな？で、庭先の花の間で箒を片手に掃除してるミドリさんのことを見て、即ここに居住を決めた男ってのは、ひとりふたりじゃないらしい... ..普通下宿っていうのは、プライバシーがあるようでないから、大抵一年か二年もいれば引越してくるなんて珍しくもなんともないけど、当時の学生はみんな大学を卒業するまでここベルビューにいたらしいよ。そのくらいこの場所が居心地よかったってことだ」

「うん、なんかわかる」

「ここでミドリさんと今は著名な原子物理学の第一人者になった、小山内氏の恋愛話に戻るけど.....ミドリさんとミスター小山内との恋愛っていうのはさ、ようするによくある三角関係だったわけ。今ミズキが住んでる3号室に当時いたのが、のちにミドリさんと結婚した大谷嵐っていう、哲学を専攻してるやたら理屈っぽい男だった。たぶん、ミズキのあの暗い性格は大谷家に流れる何がしかのDNAが影響してると思うんだけど.....まあ、そのことは今はいいとして、ミスター小山内は相当に破天荒な人物でさ、物理学の研究と称して、死刑の時使われる電気椅子と同じものを作ったり、女子寮までターザンよろしく登山ロープを繋いだりとか、色んなことをやった人らしい。こんなことを言ったら大抵の人はたぶん、「そこまでして女子寮に乗りこみたいか！」って思うかもしれないけど――ミスター小山内はそういう浮ついた動機からロープに滑車を付けたりしたわけじゃないんだ。さっき言った女子寮の子と大学の後輩に二股かけてた医学部の男がさ、名前を羽柴亮太郎っていうんだけど、自分はワンダーフォーゲル部で鍛えてるから、女子寮の壁を小山内より速くのぼれるって言ったんだよ。そこで小山内氏は「それは物理学的にありえない。必ずそれを証明してみせる！」とか言いだしてね、次の日から早速洗濯のビニール紐を.....」

「洗濯のビニール紐？登山ロープじゃないの？」

煙草の灰がかなりのところ落ちているのも構わず、あたしはレンのことを見返した。

今は当時の面影もなくひっそりした廃墟と化してる女子寮だけど、男子寮の屋上からの距離は、どう軽く見積もっても十メートル以上はある.....あれを洗濯のビニール紐に滑車をつけて渡ったのだとしたら、小山内氏は結構な勇者といえはしないだろうか？

「正確にはまあ、登山ロープという名の強化洗濯紐っていったところだな」

かつてあった女子寮と、今はベルビュー本館と呼ばれる昔の男子寮の狭間——その間に広がる星空を見上げて、レンはどこか不適ににやっと笑った。

「なんにしても、小山内氏は自分が作った強化洗濯紐を滑車で渡るとなりリスクは犯さなかった。ミスター小山内は自分の隣室にいるサルトルの実存主義の本を愛読している男、大谷嵐にそれをやらせたんだ……もちろん彼は小山内に背中を押される前にこう言ったよ。『僕はまだ死にたくない』ってね」

「そりゃそうでしょうよ」

「だけど、大谷が普段からあんまり＜生と死＞がどうの、魂の不滅と地獄がどうのっていう話ばかりするもんだから——小山内氏は「ちょっとした死に近い状況」を大谷氏に与えて、それで彼の思想に変化が見られるかどうか試したかったらしい。そして実際、それ以来彼は変わったんだよ。理詰めで物を考える人間から、行動する人間にね」

「それで結局、ミスター小山内はドクター羽柴に勝ったの？」

「ああ。大谷氏がなかなか強化洗濯紐の耐久性を信じなかったせいで、確かに大谷が羽柴より大幅に出遅れて、女子寮の屋上へ先に到達したのは羽柴だった……でも、勝ったのはやっぱり小山内氏だったんだよ」

「どういうこと？」

「つまり、小山内氏は最初から＜そのことも計算のうちに入れてた＞ってこと。ミスター小山内は嫌がる親友・大谷の背中を押したあとで——自分で作った自家製ハングライダーで悠々と羽柴より先に女子寮の屋上へ到着したんだよ。もっともそのあと、問題がなくもなかったけどね」

「問題って？」

「つまり、一度は女子寮の屋上に到着したまではよかったけど……そこで羽柴が男らしく「俺の負けだ」と認めたままではよかったんだ。でもそのあと急に突風が吹いて、小山内氏はハングライダーごと屋上から落ちちゃったんだよな」

「マジで!？」

「うん、マジ。少しの間ハングライダーごと飛ばされて、すぐそこに桜並木のある公園があるだろ？そこで桜の木に引っかかってさ、片足を骨折したって話」

「……………」

——正直あたしはこの時、（正真正銘の馬鹿だ）と小山内氏に対して思ったけれど、何故かその「馬鹿さかげん」が羨ましくもあった。

つまり、レンの言う「青春という言葉が生きて輝いてた」っていうのは、簡単にいえばそういうことなのだろう。

そしてあたしはこのあと、どこか内気そうな性格の大谷が何故寮生のマドンナと結婚するに至ったのかについて、レンに聞いてみた。それと、そんな素敵な青春時代を過ごして結ばれたのに、何故ミドリさんは彼と離婚してしまったのかについても……。

「まあ、夫婦の間のことっていうのはさ、当人同士にしかわかんないことだと俺は思う。当時の写真を見ても思うけど、ミスター小山内って結構格好よかったから……それで、ミドリさんは諦めちゃったんじゃないかなって思うよ。彼女はその頃から家庭的な女性でさ、高校卒業後は管理



人の娘としてここの下宿を手伝ってるだけだった。これはミドリさん本人から聞いたことなんだけど、彼女はまわりの女の子にコンプレックスを持ってたらしい。小山内氏は大学在学中からアメリカ留学の話が持ち上がるくらい優秀な人だったけど、ベルビュー荘が好きすぎて、その話は一旦見送ったらしい。でも卒業後にボストン大学へ留学することになって——とうとう最後に言ったらしいよ。ミドリさんに一緒についてきてくれないかって」

「それで、ミドリさんはなんて答えたの!？」

「『あたしはいつまでもベルビュー荘のミドリとして、克英さんのことを待ってる』って言ったんだってさ」

「えっ、それってどういう意味？」

「さあね。ミドリさんが言うには——自分には小山内くんについていけるような冒険心がなかったっていうことだったな。ベルビュー荘の女子寮にいた子の中にはさ、ドイツからの留学生がいたり、フランス語と英語とドイツ語の三ヶ国語を流暢に話せたりとか、あるいは医者や弁護士を目指してるなんていう子もいたりして……ミドリさんはそういう活発な女性と小山内氏はつきあうべきだって、そう思ったらしいよ。でも、本当は両想いだったんだよな」

「何よ、それ!？馬鹿じゃないの?もし、あたしだったら——」

「何を置いても、好きな男についていく、か?でもまあ、俺はそういうミドリさんの気持ち、わかんなくもないな。彼女は自分のことを周囲の人間に比べて、ただの凡人だと思ってた。だけど、非凡人が輝くには、多くの凡人の存在が不可欠なんだよ。ミドリさんは自分のことを凡人と思ひ、一歩引いたところからまわりの人と接してたから、それで誰からも好かれたんじゃないかな……俺にも経験があるけど、まわりに才能のある連中ばかりいると、結構息が詰まるものなんだよ。で、そこに自分の分をわきまえた平凡な奴がひとりくらい挟まると、喧嘩にならずに議論がいい具合に発展するものなんだ……しかもその子の性別が女で容姿的に可愛かったりしてみる。才能ある男どもの間でマドンナになるのに、三秒とかからないのは自明の理ってもんだろ」

「まあ、そりゃそうかもね。で、ミスター小山内はアメリカへ旅立ち、残った根暗の哲学青年と結婚したってこと？」

「簡単にいえば、そういうことになるんだろうな。でもさ、例の<ターザンロープで女子寮へ渡ろう>事件以来——大谷嵐は180度性格が変わったらしい。なんかよくわかんないけど、「明日死ぬつもりで今日を生きる」ような気持ちになったとか何とか……言ってみればミズキもさ、そういう人生変えてくれる人間との出会いってのがあればいいんだろうけど、どうやら俺じゃあ、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』にはなれないらしい」

「『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』？」

「そ。べらぼうってのは、普通じゃ考えられないとか無茶苦茶っていうような意味だから、『ベルビュー荘の普通じゃ考えられないくらい愉快的な奴ら』っていうこと。時々時代劇で「べらぼうめ!」とか言ってるの、聞いたことない?あるいは「てやんでい、べらぼうめ!」とか。あれはまあ、相手を罵っていったる言葉なんだけどさ」

「まあ、確かにあたしもブルガリの指輪を見て、「べらぼうに高い」とか思ったりするわね」

「そうだな。もしあんた流に言ったとすれば、『ベルビュー荘のブルガリ級に愉快的な奴ら』って

という言い方でもいいんだと思う。とにかく、ここベルビュー荘にはそういう伝説があつてね、今じゃ見る影もなく落ちぶれてるけど、ある瞬間にそういう面白い奴らの揃う黄金期があるんだよ。たぶん、ミドリさんは今もそれをずっと待ってるんだと思う……俺と同じようにね」

――あたしがストロベリー味のハーゲンダッツアイスクリームを食べ終わる頃、TVでやっていた昔の学園ドラマの再放送が終わり、よくある安手のサスペンスドラマがはじまった。

ミドリさんはそのドラマがはじまるなり、そそくさと椅子から立ち上がり、「さあて、そろそろ夕食の盛りつけでもするとしましょうか！」と明るく言って、キッチンへ向かった。

そしてあたしは本当にさりげなく、リモコンでチャンネルを変えることにした……自分が大して見たいとも思っていない、ニュース報道番組に。

このこともまた、レンから『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』について聞いたあと、強く注意されていたことだった。

ベルビュー荘はその後、ミドリさんと元旦那の大谷氏が夫婦で運営していくことになり（ミドリさんの両親は四国にいる老親の面倒を見るため、そちらへ戻っていた）、そんなふたりの間には息子もひとり生まれ、幸福な毎日を送っていたという。けれど、そのひとり息子の静くんがある日女子寮の一階で何者かに撲殺されているのが見つかり、こうしてベルビュー女子寮は閉鎖が決まったという話だった。

「だからさ、あんた無神経そうだから、先によくよく注意しておくけど」

煙草を吸い終わったレンに、もう一本マルボロを勧めたけど、彼は「いらない」というように手を振っていた。

「ミドリさんの前で、その手の話は絶対してくれるなよ。もちろん、軽い一般的な世間話としてなら問題ないけど……ミドリさんは特に木曜サスペンス劇場とか、水曜サスペンスアワーとか、日曜サスペンス・スペシャルとか、あの手の二時間ドラマが大嫌いでさ。ああいうドラマは全部、本当の意味での人の死を描いてないって言って毛嫌いしてる。だから、リビングでは絶対その手のドラマがはじまったら、頭の軽いあんたの好きそうなバラエティ番組にでも、さりげなくチャンネルを変えるようにしてほしいんだ」

「頭の軽いつてのは余計よ！」と言いつつ、あたしは確かにレンのその言いつけについては忠実に守っていた。

――ミドリさんは本当に、とても優しい素敵な人だ。

でももしレンから、ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴らのこと含め、彼女とその夫だった大谷嵐氏、そして息子さんの身に起きた悲劇について何も知らなかったら……あたしはたぶん、（このニコニコと愛想のいいおばさんは、何か裏の魂胆でもあるのだろうか？）と、勘繰ったままでいたかもしれない。

ここからはレンから聞いたことではなく、女のあたしの想像だけど、たぶん大谷氏は息子の静くんが死んだ時、女子寮だけでなく今は本館と呼ばれている男子寮も閉鎖しようと言ったのではないだろうか？でも、ミドリさんは小さい頃からの思い出や青春の思い出の詰まったベルビュー

荘を離れたくなかったのだ。実の息子が何者かに殺されるという悲劇が起きてなお。

ちなみに、ミドリさんの息子を殺した犯人は、今も逮捕されていないという。

捜査筋の話では、女子寮の女性の下着を狙った人物か、あるいは当時女子寮に住んでいた女性に偏執的な思いを抱いていた何者かが、寮に忍びこんだまではよかったものの、うっかり静くんに顔を見られてしまい、それで口封じに殺したのではないかということだった。

確かに、この実話をもし二時間の安っぽいサスペンスドラマに仕立てるとしたら、『ベルビュー一荘殺人事件』とでも名づける以外にないかもしれない。レンから聞いた話によると、大谷氏とミドリさんは憎みあって別れたというわけではなく、氏は今も時々、ここベルビュー荘へやってくることもあるという。そして、ミズキくんのことをベルビュー荘で暮らすよう説得したのも大谷氏とのことで、彼はミズキくんと何気ない会話をして帰っていくという話だった。

あたしはテーブルの上のえびのみりん焼きせんべいをめりめり食べると、レンが作っていった夕食をお皿に盛りつけているミドリさんのことを振り返った。

ミドリさんのはっきりした年齢はあたしにもよくわからないけれど――それでもたぶん、あたしの母親と同じくらいだろうかと思われる。白髪一本ない黒々とした髪を三つ編みにして、頭の後ろでお団子にしている姿は、どこか昔の女学生風だった。肌のほうも白くて、よく見なければしみひとつ見当たらず、目尻の皺はむしろ人間的な魅力をたたえていると言っている。

わたしはレンから東大の安田講堂事件であるとか、浅間山荘事件のことを聞いて、ミドリさんがおそらくは母と同じくらいの年齢ではないかと思ったのだけれど――でも、自分の母親と比べると、ミドリさんのほうが決定的に若いと感じていた。

うまくいえないけれど、精神的に若いことが、容姿やちょっとした仕種や立ち居振るまいといったものに現れているとでもいったらいいだろうか……なんとなく、そんな感じなのだ。

そしてそのことの原因はおそらく、彼女がここベルビュー荘にいて、いつまでもずっと青春時代を追体験しているそのせいなのではないかと、あたしはそんな気がしている。

何より、わたしの感じるミドリさんの一番すごいところは、一緒にいて全然気詰まりな感じがしないということだったかもしれない。

今、ミドリさんはひとりでお盆の上に皿を並べ、食事の盛りつけをしているところだけれど、無言のうちにも「女の子なら、少しくらい手伝いなさい！」といった感じを決して相手に与えないのだ。

だからこそあたしは、えびせんべいを無神経にめりめり食べていられるのだけれど――今日は何故かなんとなく、ミドリさんの手伝いがしたいと、そんなふうに思って席を立った。

「ミドリさん、今度アスパラのベーコン巻きの作り方、教えてもらえますか？」

『ベルビュー荘で二股事件が発覚！！プレイボーイのミスター羽柴、「二兎を追う者は一兎をもえず」と涙ながらに語る』

(～ベルビュー新聞第56号、見出しより～)

あたしはミドリさんに教えてもらって、綺麗に整理された倉庫にある、スクラップブックの並んだ棚からようやくのことで『ベルビュー新聞、第56号』を発掘した。

それによると、

＜羽柴氏（以下H氏と略）は登山部の後輩I嬢と我がベルビュー女子寮のO嬢とに二股をかけており、6月6日にあったバーベキューパーティで偶然にもふたりは鉢合わせ。当然H氏は挙動不審の大慌て。本記者K（克英のKということらしい）も「特急・研究・バーヴェQ、救急・オバQ・ウルトラQ」などと冗談を言って場を和ませようとしたのだが――いかんせん、ふたりの女性の怒りを鎮めるには至らなかった。

自業自得の羽柴……じゃなくてH氏は、おろおろとO嬢とI嬢の機嫌を右や左ととっている様子だったが、その情けない姿にとうとう愛想が尽きたのであろう。最後はふたりとも「あんな男、のしつけてくれてやるわよ！」と互いに言いあい、H氏の顔を引っぱたいて帰っていったそう。

たぶんそのしには、「浮気男願い下げ」とか「死ぬまで直らぬ、万年発情男」とでも書いてあるのかもしれない。

最後にひとり残された傷心の羽柴氏は、「二兎を追う者は一兎をもえず」と涙ながらに語り、1号室の住人S氏とその日の夜は朝まで飲み明かしたとのことである……>

「ふう～ん。字は汚いけど、書いてあること自体は結構面白いわね」

茶ばんだ紙にびっしりと書かれた文字は、特徴があってかなりのところ読みにくかったけれど――これが60号を越える頃には、突然すっきりと読みやすい女性の字に変わっている。

最後のページに編集後記なるものがある。そこには文責：小山内克英、清書：笹谷ミドリと名前がある。それと、ベルビュー新聞は1～4ページ程度の分量で不定期に発行されていたらしいけれど（時に号外もあり）、だんだんに寄稿者の名前が増えて、小山内氏自身はトップ記事のみを書いているだけ、という回も結構あった。

その中でも特にあたしが興味を持ったのは、大谷嵐氏が連載している＜共産主義の脅威＞などという小難しいコラムではなく――『男と女の恋愛相談室』と題された、今でいうチャット風の記事だったかもしれない。

『男と女の恋愛相談室～第5回～』

相談者O嬢：先生、男の人ってどうして浮気するんでしょう？

回答者Dr. H：男は上半身と下半身が分離した存在なんです。そのことをまず、理解しましょう。

O嬢：納得できません！！つい最近まで私がつきあってた男性は、私ともう一人の女性に二股をかけていたんです。

私と、将来は結婚する約束までしていたのに、ですよ？

Dr. H：それはひどい男ですね。たぶんきっと、そのもう一人の女性にも同じことを言ったんでしょな。

男の風上にもおけない、まったくひどい奴だ。

O嬢：それ、あなたのことなんですけどね、先生。

Dr. H：えっ！？ごほっ、ごほっ。

いや、私には酒が入ると誰とでも結婚の約束をしてしまうという、悪い癖が……。

O嬢：もーっ。しょうがありませんね。

でも、次は絶対許しませんから、その時は刺されて救急車で運ばれる自分を想像してから、他の女性とデートしてくださいね。

Dr. H：あ、許してくれるんだ？わーい、やったー！！

……わたしの経験上、羽柴氏のようなタイプは絶対にまた浮気すると思うのだが、O嬢こと太田晴美さんは医学部を卒業後、無事羽柴晴美になったということだった。

まあ、56号の新聞以降、『ふたりの女性に同時にフラレ、体重が3kg落ちた羽柴氏』だという記事が、頬のこけた諷刺画と一緒に載っているのを見れば、晴美さんとしても自然、許さざるをえなかったのかもしれない。

他に、この『男と女の恋愛相談室』には、A氏なる人物が片想いの女性にどうアプローチすればいいか相談していたりするのだけれど――これは内容から察するに、たぶん大谷氏が将来の妻ミドリさんのことを思って書いたものと思われる。

しかも、その相談の回答者は他にもない小山内氏なのだ。小山内氏は相談者に「綺麗な花と一緒に詩の言葉を添えて、意中の人に渡すといいでしょう」などと答えている……それに対して、途中からDr. Hが茶々を入れ「そんなんじゃ全然ダメだ。女は本当は結構強引でワイルドな男が好きなんだよ。どこか感じのいいバーにでも誘って、『今夜、俺のマグナム44が火をふくぜ！』とでも言えば一発だな。うん」などと、いい加減なことを言っている。

「うっわ、さむ……マグナム44？あの頃ってそういう時代だったっけ？まあ、もしわたしがそ

の感じのいいバーとやらでそんな寝言を言われたら——化粧室にいて、そのあと絶対戻ってこないわね。悪寒がするとか言って、絶対速攻帰るわよ」

思わずあたしが独り言をつぶやいていると、開け放しになったドアをすべて塞ぐような形で、突然影が差していた。

その人物は身長170センチ、体重はたぶん……最低七十キロはありそうな、女優志望の隣人、二階堂ほたるだった。

「ミドリさんに聞いたら、物置でベルビュー新聞を探してるって聞いたもんだから。いくら同じ屋根の下の住人とはいえ、最近知りあったばかりの人に、こんなことを頼むのは心苦しいんだけど——」

「何よ。なんでも言いなさいよ」

羽柴氏のマグナム44発言でおおいに笑わせてもらったあたしは、この時極めて寛容な気分になっていた。

ベルビュー新聞を何号か続けて読んでいて思うに——Dr. Hこと羽柴亮太郎なる人物は、ちょっとお調子者で抜けてるタイプの、どこか憎めない奴なのだろうという気がしていた。

もっとも、その後夫妻で羽柴内科医院を開業したという彼に、診察してもらいたいかといえど、答えは断じてノーではあったけれど。

「これ、うちの劇団のチケットなんだ。もしよかったら友達と一緒に来てもらえないかな～なんて……」

「ふーむ。なるほど」

夏の陽射しの中をほんの数メートル移動しただけで、ほたるは汗だくになっている。

もちろん日ごろからダイエットは一応しているらしいのだが、リバウンドですぐ太ってしまうのであまり効果がないのだという。

前にいいダイエット法があったら教えてほしいと言われたけれど、わたしは生まれつきの痩せ型で、これまで一度もダイエットなんてしたことはないのだ。決して自慢するわけじゃないけど。

「でも、ほら……あたしって今、半分以上失業してるようなもんじゃない？ 今月だって、数えるくらいしかまだ仕事してないし。なのに演劇なんて……」

「ああ、べつにいいのよ。全員がどんなに頑張っても配り歩いて、チケットはどうせたくさん余るって、劇団の連中はみんなわかってるから」ほたるはあっけらかんとして言った。「ただ、わたしが今してるのは座席がひとつでも埋まるようになっていう最後の悪あがきみたいなものなんだ。一応一枚千円で売ってるんだけど、べつにお金は払わなくていいの。サクラさんとサクラさんの友達ひとりかふたりと、一緒にただで来てもらえたらいいな～っていう、それだけ！」

「レンは来るの？」

鈍いほたるは、わたしのこの言葉を深い意味のないものとして受けとるだろうと、あたしにはわかっていた。

「うん。レンさんはうちの定期公演には絶対来てくれるんだ。いつも、友達や知りあいに50枚くらい売ってくれたり、あちこち劇団のポスターを貼る手伝いをしてくれたり……すごく顔の広

い人なんだよね」

「へえ～、そうなの」

逃げ道を失ったあたしは、正直どうしたものかなと、首を傾げた。

レンが友人や知りあいにチケットを配りまくってるなら、奴はそうした顔見知り連中と三流アマチュア劇団の生ぬるい芝居を見にくるっていうことだろう。となると、レンと座席を隣り合わせて座るなんていうことは出来なさそうだ。

しかも、今のあたしには友達がない。いや、昔の男を誘ってもいいけど——今の落ちぶれたこの姿を、あんまり見られたくないというのが、正直なところだ。

「あのさ、ほたる……あたし、あんたみたいに劇団の仲間とか、そういう友達ってひとりもないのよ。だから、あたしひとりで見に行くっていうんじゃダメ？」

「うん、もちろんいいよ！！」

性格の優しいほたるは、友達のいない可哀想なあたしを気遣って、そのあと横で色々なことをくっちゃべってからようやくのことで物置を出ていった。

(やれやれ。べつにあんたに哀れんでもらわなくても結構よ)

ポケットから日焼け止めをとりだし、首筋や肌の露出した箇所をそれを塗りたくりつつ、あたしはSPA50+、PA+++の日焼け止めクリームが、いくらチューブを押しても出てこないとわかり、かなりのところイライラした。

午前中にニュースで見た紫外線の量によると、この倉庫を出る前に、今絶対塗っておきたいのに。

「ああ、やだやだ。これ高かったのに……新しいの買うとしたら、ランク落として次は安いを買うしかないわよね。あと、服はどうしよっか……三流アマチュア劇団とはいえ、レンも友達や知りあいとくるんだろうし」

ここで一応断っておくと、何もあたしは奴に惚れてるというわけでもなんでもない。

ただ、あいつがよくあたしのことを「性格ブス」というあだ名で呼ぶから——その性格ブスにむしろ逆に惚れさせて、めろめろにした揚げ句、振ってやろうという計画をあたしは立てているところなのだ。

「ふんっ。今に見てなさいよ。あたしをブスって呼んだこと、絶対後悔させてやるからっ！」

あたしは部屋へ持ちこんで続きを読むために、ベルビュー新聞の78～145号くらいまでを、両手いっぱい抱えこんだ。それからバーベキューのコンロや庭を掃く箒や落ち葉を集めるための熊手、その他さまざまな園芸道具のしまいこまれた物置を、強い夏の陽射しに備えるように、えいやっ！と外へでた。

ベルビュー荘へ戻るまでの数メートルほどの間に、ほたるからもらった<劇団レリック>のチケットをもう一度よく見ることにする……劇のタイトルは『ゼウスとプロメテウス』。どうやらギリシャ神話をモチーフにしたものらしい。

(どうせ、大したことないに決まってるんだけどね)

あたしはそう思いながら、タンクトップにだらしなく繋ぎの作業ズボンを着ているレンが、壁をペンキでクリーム色に塗っている姿を盗み見るようにしてから、網戸を開けて中へ入ることにした。

なんでも、次の居住人があたしのような変な奴でないことを願うべく、せめて壁くらい新しく塗り替えたほうがいいと思ったんだとかなんとか.....ふんっ！本当に憎ったらしい奴！！

あれでもし奴の真っ黒に焼けた背中がさして引き締まっていなかったら、相手にさえしないんだけど.....でも困ったことには、レンが汗を流しながら無心にペンキを塗る姿には、（少し恥かしい言い方をすれば）乙女心にきゅんとくるものがあった。



自慢じゃないけど、あたしはこれまで自分でお金をだして舞台とかミュージカルとか、その手の類のものを見に行ったことが一度もない。

せいぜいあると言えば、昔の男にオペラに誘われ、なんとか我慢して三時間という退屈な時間を耐え切ったというような記憶しかない……ついでにいうと、あたしの愛読誌は『C a n C a m』や『a n a n』くらいなもので、小説なんていうお高尚なものは流行りの携帯小説ですら読んだことがない。

このことの意味するところがわかりだろうか——つまり、わたしはその種の文学的素養のない人間なので『ゼウスとプロメテウス』と聞いても、「ゼウスはわかるけど、プロメテウスってだれ？」くらいの知識しかなかったってということだ。

もちろん、携帯かパソコンで＜プロメテウス＞と入力すれば、ウィキペディアというあたしのような馬鹿にもわかりやすい解説を読むことが出来るっていうのはわかってる。でも、あたしはブランド物中古買取品店に多くの服を泣く泣く売ってしまっていたから——何も着ていくものがないと悩むあまり、そんなことはしている余裕がなかったのだ。

結局、胸の谷間がくっきり見えるDKNYの黒のワンピースを着ていくことにしたけど……これにシャネルの馬鹿でかいサングラスをした栗色の髪のでっぺんが黒くなりかけた女っていうのは、自分的にちょっとどうなんだろうと思わなくもない。

でも、どっかのスーパーモデルが言ってみたいに、一度メイクしたあとは、自分の顔が今どうなってるかなんて、いちいち考えないほうがいいのだろう。それよりもパーティを楽しむことだと、確かかつてスーパーモデルとして名を馳せたのち、女優に転向した彼女は言っていたはずだ。だからわたしも、今日の自分のファッションがどうかなんていうことは、ベルビュー荘を出てからは一切考えないことにした。

客席が五百席ほどしかない芸術文化会館の小ホールの前は、意外にも開演三十分前から長蛇の列となっていて——あたしは思わずシャネルのサングラスを外して驚いていた。たぶん、どう少なく見積もっても三十人はいるだろう。もっとも、その中であたしが目当てとしている人物、水嶋蓮の姿はそのうちのどこにも見当たらなかったけれど。

(まあ、自由席だから……もし前のほうで見たいと思ったら、最初に並ぶ必要があるってことなのかしらね)

そんなことを思いながら、新人の劇団員っぽい若い子にチケットをもぎってもらい、あたしはケリーバッグを片手に座席のなるべく後ろのほうへ座ることにした。ほたるがどんな役で出るのかは知らないけれど、舞台上上がったほると目と目が合うような距離にはいたくない気がした。なんとなく。

そしてあたしが(まだ始まんないのかしらね)と、自販で買ったカフェラテをずずっとすすっていると、背後から聞き慣れた声が振ってきたのだった。

「へえ、あんた本当に来たのか。あんたのことだからてっきり「なんであたしがこんなアマチュア劇団員による三流の演劇を見なきゃいけないのよ」とか言って、来ないと思ってたけどな……

見直したよ」

(え？それってどういう意味よ？)

セリフの前半、アマチュア劇団員による三流のなんとかっていうあたりは、まったくレンの言うとおりだ。でも、彼の最後の一言、「見直した」という言葉の意味が、あたしにはよくわからなかった。

(五百点以上あったブランド服をほとんど売ったわりには、そこそこ悪くない格好してるじゃんって意味？でも、レンはそんなのに頓着するような奴じゃないし……)

第一それは、今日着ているレンの服装からもよく見てとれた。UFOと宇宙人が描かれたTシャツに、穴のあいたジーンズ。それに足元はぼろぼろの毛羽立ったサンダルをはいてるといったような具合。髪の毛もぼさぼさで、口元には無精髭が生えているけれど、もともとの顔立ちがいせいか、そんなに不潔そうな印象は受けない。

「……向こうに、行かなくてもいいの？」

通路を挟んだ向こう側のほうで、彼の友人か知りあいと思われる一団が、レンに向かってしきりと手を振っている。

そして彼のほうでもそれに答えて、「おう」といった具合に軽く手を上げていた。

「ああ、あいつらにはさっきロビーで挨拶しといたから、何も問題ないよ」

そう言って、あたしの隣にレンが座ったのを見て――正直あたしは、物凄く驚いた。

てっきり奴のことだから、「おひとりさまのあんたと違って、俺にはこんなに友達がいるんだぜ」的に、見せつけるような態度をとるんじゃないかとばかり思ってたけど……まさか本当に、あたしの隣で二時間近くもの間、座ったまんまでいるつもりなんだろうか？

そしてあたしが、こんなことなら昔のキャバ嬢仲間に頭を下げてでも、もっといい服着てくれればよかったと後悔していると――足を組み、お腹の前あたりで手を組み合わせたレンが、突然こんなことを聞いてきた。

「それで、あんたの人生計画ってのは、今どうなってるんだ？」

何日か前、「その仕事はもうしたくない」と派遣会社の人間と電話でもめていた時、その一部始終を聞いていたレンは、どうにかこうにか自分の言い分を押し切ったあたしに対して――「そんな場当たり的な仕事ばかりしてたって、仕様がないうじゃないのか」と言ったのだ。

「あんた、接客は結構得意なんだから、それならウェイトレスでもやれば？でもまあ、そしたら今度は安い時給でこき使われたくないとかなんとか、そんなことをグダグダ言いだすんだろな」

「うるさいわねっ！あたしにだって色々、あんたにはわかんない人生計画ってもんがあるんだから、余計な口出ししないでよっ！」

(あはは……人生計画か。苦し紛れに言っただけの言葉だったけど「本当はんなものねーよ」とは、とても言えないわね)

「うん、まあ、それなりに、色々」

突然スカートの丈の短さが気になって、あたしは太腿の前で一生懸命それを伸ばした。

「時給二千円のキャンペーンガールやっててセクハラされました、だからもうその仕事はしたくないですっていうあんたの言い分は確かに正しいのかもな。確かその時のキャンギャルの制服も

、あんたが今着てる服と同じくらい、短かったんだろ？俺にはよくわかんねえな……なんで二十八にもなって、そんなパンツ見えそうな格好したがるんだか」

「年は関係ないでしょっ！第一、あたしは今貧乏のどん底で、まともに着てくるような服がなかったの！だから丈が気になったけど、仕方なくこれを着てきたっていう、それだけよっ」

「ふうん、あっそ。あ、そろそろ始まるぜ」

ブーッという開演を知らせるブザーが鳴ったので、「『ふうん、あっそ』なんて言うのが口癖の奴は、自分から運を逃すんじゃないかってけ！？」とあたしは奴に言い返してやることが出来なかった。

仕方なくぐっと言葉を喉の奥に飲みこんだまま、空になったカフェラテを一旦足元に置く。

客席の照明が落とされて暗くなると、『ゼウスとプロメテウス』の第一幕が始まった。

ゼウス：「プロメテウスよ、後悔しているか？人間どもに火を投げ与えたことを……」

プロメテウス：「後悔？それは人間という生き物を作った<神>がすべきこと……すなわち、全能神ゼウス、貴様が感じるべきことではないのか？」

ゼウス：「この期に及んで減らず口を叩くつもりか、プロメテウス。人間はわたしが作ったのではない。奴らはわしらが生まれる前からすでに存在しておったのじゃ」

プロメテウス：「減らず口を叩いているのはおまえだ、ゼウスよ。自分が今言った言葉に矛盾を感じぬのか？我々神々より以前に人間が存在していたのであれば、むしろ彼らこそが我らの神……」

ゼウス：「ええい、黙れ、黙れいっ。貴様の屁理屈はもう聞き飽きたわっ。ヘルメス、こやつ拷問刑を再び開始せよっ！！」

ヘルメス：「ははっ」

ここでナレーションが流れ、プロメテウスが人間に火を与えた罰として、カウカソス山でどんな刑罰を受けていたのかが説明される。毎日鋭い爪を持つハゲタカによって体を啄まれるのだが、彼は不死身であるため、決して死ぬことが出来ない……そして肉体の傷が癒えた頃に再びハゲタカに生きながらにして体を啄まれるという果てしない拷問刑を彼は受けていたのだった。

だが、この半球永久的に続く地獄が、罰としてあまりに過酷と感じた他の神々は、ゼウスの目と耳の届かないところで話し合いの場を持つことにする……参加したのは美の女神アフロディーテ、太陽の神アポロン、月の女神アルテミス、軍神アレス、豊穡の女神デメテル、海の神ポセイドン、火神ヘスティアなどであった。

アポロン：「全能の神、ゼウスはきまぐれ。次に僕らが罰を受けるとしたら、一体どんなことになるやら……」

ポセイドン：「わしはもう、地上に落とされ、罰として人間と同じように労働して糧を得るのは真っ平じゃ」

デメテル：「ほら、そんなあなたには、このあたしが神々の食べる果実、アンブロシアを差し上げましょう」

(ポセイドン、デメテルからざくろによく似た赤い果実を受けとる)

アレス：「こうなったら、戦いあるのみだ！ゼウスが我々他の神々を治めているのは、我ら神が食するアンブロシアの実る樹を独り占めにしているからなのだ！ゼウスに戦争をしかけて勝利し、これからはアンブロシアの樹をみなで平等に分けることにしようぞ！」

アフロディーテ：「早まってはなりません、アレス。どうもあなたは血気に逸りすぎる……仮に我々が同盟を結んでゼウスに勝利したとして、そのあとのことはどうなりますか？きっとまた、誰かがアンブロシアの樹を独り占めしようとするに決まっています。戦争を起こす前に、わたしたちはそのことについてよくよく話し合わなくては」

ヘスティア：「月の女神アルテミスよ、あなたは知恵のある女神。どうぞ、何かいいお知恵は思い浮かびませぬか？」

アルテミス：「その前にヘスティア、あなたにひとつ聞いておきたいことがあるのです。あなたは火の女神……人間どもにプロメテウスが火を与えたことについて、どう思っているのですか？」

ヘスティア：「＜火＞とは、素晴らしきもの。暗い夜を明るくしてくれます。時には、絶望に沈む暗い心だって明るくしてくれるのですよ。＜火＞とは情熱や希望の象徴……これなくしては、人間はただ肉の塊にしかすぎず、死んで大地に葬られたあと、うじにでも覆われる以外にないのです。ですから、わたしはプロメテウスが人間に火を与えたのを、良いことだと思っています。もっともこんなこと、決してゼウスの前では申し上げられませぬがね。わたしは本当は、人間という惨めな存在が以前から気の毒でならなかったのですよ」

アルテミス：「なるほど。ではわたしが門番ヘルメスをかどわかして、プロメテウスがカウカソス山に繋がれている鎖を解いてくることに致しましょう」

――わたしが驚いたことには、ほたるの役はこの、月の女神アルテミスだった。

もちろんあたしはギリシャ神話なんてきちんと読んだことはない。だからこの演劇の内容がかなりのところ実際のギリシャ神話を脚色していることも、あとからレンに聞くまでまったくわからなかった。

でも、なんとなく漠然と月の女神は美少女というイメージがあったがゆえに……（あんなおデブさんがアルテミス？）とつい笑いたくなくなってしまった。

もっとも、次の第三幕でアルテミスが門番ヘルメスを誘惑するため、その美声をふるって歌を歌いあげる段になった時には――あたしがそれまで持っていた、ほたるに対する若干下の者を見る目線は、まるでひっくり返ってしまうことになるのだけれど。

ほたるは後ろの席にいるあたしの体が、まるで超音波によって震えるくらいの声の大きさに、この劇一番の見せ場である第三幕を素晴らしい演技力によって演じきっていた。

面白いことには、この第三幕にはヘルメスとアルテミスのちょっとした濡れ場のような場面があって、そのことを通してアルテミスはヘルメスからプロメテウスを縛る鎖の鍵を奪うのだけれど……実際にはその時、ヘルメスはアルテミスに対する愛ゆえに、わざと眠ったふりをして、彼女に腰から下げた鍵束を奪わせるのだった。

そして第三幕は、ヘルメスが「ああ、わたしはなんと愚かなことをしたのだろう。ゼウスさまはわたしを幾重にも罰せられるに違いない。何故、わたしは罰を受けるとわかっていて、あの人のことを愛してしまったのか。そして愚かな人間どももまた、いつか死ぬとわかっていながら、何故人を愛することをやめないのだろう」という言葉で幕が下りることになる。

第四幕、女神ヘラとともにアンブロシアの樹の根元で、怠惰に平和な時を過ごすゼウスの元へ、鎖を解かれたプロメテウスが一騎打ちのためにやってくる。アンブロシアの樹を盾にとり、自分の思うがままに振るまっていたゼウスは、すっかり油断していた……プロメテウスはゼウスを人間の世界へ追い落とし、「貴様も汗とともに労働して糧を得る、人間どものひとりのようになるがいい！」という言葉とともに、一本の槍によってゼウスにとどめを刺す。

けれど、天上の世界から追われることになったゼウスは、最後に「もう二度と実がならぬように」とアンブロシアの樹に呪いをかける。その言葉を聞いたヘラは絶望のあまりゼウスのあとを追っていった。何故なら、アンブロシアの実が生らないということは、それはすなわち一族の滅亡を意味していたから……。

アンブロシアの実がもう二度と生らないと知った神々は、自分たち一族はやがて衰退し、神々と今呼ばれている存在はみな、ひとりの人間のように弱く儂い存在に成り果てるだろうと言って絶望する。そして誰もがプロメテウスを呪い、彼をカウカソス山の拷問刑より解放したことを、苦い思いで後悔するのだった。

そして最後、人間たちはプロメテウスから<火>を与えられたことを喜び、その火を囲んで気が狂ったように彼らが輪になって踊る場面で、『ゼウスとプロメテウス』は終幕となる。

――正直ってあたしは、まさか演劇というものから、こんなに深い何かを与えられるとは、まったく予想していなかった。

もちろん、自分の知りあいが出演していて、彼女の演技が意外にも滅法うまくて度肝を抜かれたという、そのせいもあるのかもしれない。

でも、決してそれだけではなくて……頭の悪いわたしにも、この『ゼウスとプロメテウス』という劇は、何かを考えさせた。何故かというと、この劇の中には誰にとっての<正解>もなく、劇を見た一人ひとりが自分なりの答えに近いものを見出す以外にはないように思えるからだ。

たとえば、プロメテウスに課されていた拷問刑は地獄に等しいすさまじいもので、彼ひとりに苦しみが集中することによって、他の神々はゼウスの怒りを免れていたようなところがある。そしてそのことに後ろめたさを感じる彼らは、知恵を用いてプロメテウスを救出しようとするのだ

けれど――最後、ゼウスの呪いによってアンブロシアがもう二度と生らないと知ってからは、プロメテウスなど、あのまま未来永劫苦しみ続けていけばよかったものをと罵るようになるのだ。

さらに、わたしにとって一番不気味だったのが、ラストの〈火〉を与えられた人間たちが炎を囲って気味悪く踊り狂うシーンだったかもしれない……あのシーンを見る限り、火を与えられた人間の未来は決して明るいものではなく、人間たちが〈火〉を悪用してろくでもないことをしでかすだろうことが暗示されている。

となると、そもそもプロメテウスが人間に〈火〉を与えたことは誤りであり、もしかしたらゼウスが彼に与えた刑罰は正しいものであったかもしれないのだ。

――もちろん、あたしはこうしたことを、その晩『ゼウスとプロメテウス』を見たその直後に完全にまとめて考えられたわけではなかった。ただ、レンと一緒に夜道をベルビュー荘まで歩いて帰りながら、その道々で彼と色々なことを話したあと、レンの「俺はこう思う」という考えを借用しつつ、そう思ったのだった。

「ミドリさんやミズキくんも来れば良かったのにね。まあ、斉藤さんは仕事があるから無理にしても」

友達の「飲みにいこう」という誘いを断って、一緒に帰ることにしてくれたレンを、あたしは嬉しい気持ちで振り返っていた。

「ああ、あの劇は前にミドリさんや久臣さんも見てるよ」

街灯の照らす仄かな光と、樹木の黒い陰影のコントラストの中を、あたしはレンとふたり坂道を並んで歩いていった。

そういえば、ここがあたしとレンの出会いの場所だったなあ、なんていうことをぼんやり思い返ししながら……。

「ミドリさんも見に来たい気持ちはあっただろうけど、管理人としてミズキのことをひとりにしておけないと思ったんじゃないかな。人って、まさか死ぬと思ってない瞬間を選んでそうするものらしいから」

「……ミズキくんって、もしかして自殺願望があるの？」

「さあ、どうかな」と、レンは首を傾げている。「正直、ミズキのことは俺にもよくわからん。絶対に人に心を開かないっていうのかな。年の近い俺よりむしろ、久臣さんのほうが話しやすいと思ってるらしい。サクラは知らないかもしれないけど、あのふたり、ああ見えて実は結構仲がいいんだ」

「ふう〜ん。でもそれって、なんとなくわかる気もする」

生ぬるい夜気の中を、時々心地好い風が吹き抜けていく……そしてそのたびに天に枝を伸ばした樹木が、ザアッと歌うようにしなった。

「レンってさ、たぶん同じ男からしてみたら、コンプレックス刺激されるところあるもん。だからミズキくんにしてみたら、こんなイケメンの友達いっぱいいるおに一さんに、僕の気持ちがわかってたまるもんか〜っ！みたいに思うところ、あるんじゃない？」

「……まさかあんに、何かを鋭く指摘されることがあるとはな」

レンはポケットを探って煙草を探そうとしたけど、どこにもない様子だった。彼がこれと同じ仕種をするのを、あたしは何度も見ていたけど——この時ただ黙って、マルボロとライターを差し出すことにした。

「サンキュ。時々、雨が降るたびに傘をあちこちに忘れてくる奴がいるだろ？俺、それなんだ。しかも困ったことには傘だけじゃなく、煙草もよくどこに置いたか忘れてきちまうっていう」

「ふう〜ん。その年ですでに認知症？それとも健忘症とか」

「馬鹿いえ。そんなことより、ほたるの演技、すごく良かっただろ？これでサクラのほたるを見る目が変わるだろうって、俺は開演前から確信してた」

「ああ、なるほどね。それであんなはあたしの隣に来て、舞台が終わったらあたしがどんな顔するか見てやろうって、そう思ってたってわけね？」

「まあ、それだけじゃないよ。もちろんそれも少しはあったけど……いい舞台だって何度も見

て知ってたから、ファンになる人間がまたひとり増えて嬉しいって思ったっていう、それだけだよ」

（ああ、な一るほど！）と、この時になってあたしは初めて、レンが開演前に「見直したよ」と言った言葉の意味がわかっていた。

悔しいけど、やっぱりこいつ、男としてかなりいい奴だ。

「でも、それと同時に、今かなり複雑な変な気持ちよ」

あたしは珍しく、素直な気持ちになって言った。

「ほたるって、郵便局に勤めてるじゃない？で、仕事終わったあとに稽古やったりして、なんでベルビュー荘にいるのか、よくわからない感じ。それを言ったらあんたもそうだけどね。舞台が終わったあと、楽屋へいったら一々たくさんの友達に囲まれてニコニコして、彼氏ともいちゃいちゃしたり……あのヘルメス役の東郷くんって、ほたるの恋人なんでしょ？」

「ああ、デューク東郷な」と、煙草を吸いながらレンは笑った。「もちろん、ゴルゴ13に顔が似てるっていうわけじゃないけど、あの人、「なんびとたりとも俺の後ろに立つんじゃねえ！」っていうセリフが好きでよく言うんだよ。まあ、それはどうでもいいとして、ほたるがベルビュー荘にいるのは、ベルビュー荘にある魔法の力を信じてるからなんだ」

「魔法の力？」

「そ。サクラが来る前に七号室に住んでた石川奈々美さんは、ほたるの親友だった。もちろん、今一步っていうところでミス日本にはなれなかったけど……彼女とほたるはお互いに励ましあっていい刺激を受けあっているような関係だった。まあ、彼女が夢を諦めたのは、つきあった彼氏が中国へ行くっていうんで、一緒についてくことにしたっていうそのせいなんだけど。中国にもミスコンっていうのはあるらしいから、挑戦できるようならしてみるって言ってたけどね」

「あんたってほんと、変な奴よね」

あたしは降参するように、溜息を着いて言った。ミスコンなんていう浮ついたもの、いかにも軽蔑しそうな奴なのに一々きちんとした夢（というか目標？）を持っている人間のことは、その背後で大旗を振って応援しようという奴なのだ、きっと。

「あんたがあたしのことをベルビュー荘の住人として認めないのは、そのことに原因があるわけ？あたしがなんの夢も目標も持たずに、場当たりのように生きてるように見えるから？」

「その答えは、イエスでもあり、ノーでもある」と、レンはどこか意味深な言い方をした。「まあ、そのうち教えてやるよ……あんた、ベルビュー新聞を読んだんだろ？だったらもう、半分はわかってそうな気がするけどな」

「わかんないわよ！わかんないからあんたに直接聞いてるんじゃない！」

いつも思うことだけど、ベルビュー荘のある丘の上までのぼる坂は、相当キツイ。

あたしはだんだんに息が切れてきて、後ろから見たらパンツ丸見えかもなんて考えもせず、一歩一歩かなりのところ大きな歩幅で上っていった。憎らしいことには、前をいくレンは汗ひとつかかずに涼しい顔をしたままだ。

「そうだな。じゃあひとつヒントをやろうか」

坂の途中、小さな休憩所のようにになっている場所で立ち止まり、そこから街の夜景を見下ろして、レンはそう言った。



そこにある灰皿の入れ物に、吸い終わったマルボロを投げ入れている。

「あんた、ベルビュー新聞に連載されてた、S・H氏の書いた『肉工場』っていう小説、もう読んだか？」

「『肉工場』？」

そんな小説あったっけと思い、あたしはそこにある緑色のベンチに腰かけた。

この小さな休憩所らしき場所にはベンチがひとつだけ、街の方向を見下ろすように備えつけられている。綺麗な夜景をロマンチックに見つめながら、恋人同士が肩を寄せ合うのにぴったりといった感じの場所だ。

もっとも、あたしとレンの間にはまったくなんの間違いも起きそうになかったけれど。

「聞き返したってことは、まだ読んでないってことか。連載されてたのは確か、大体25号くらいからだっただけかな。S・Hっていうのが誰かっていうのは、いくら鈍いあんたでももうわかるだろ？」

「S・H？」と、あたしはまた鸚鵡返しに聞いた。レンと話をしていると、どうもこういうことが多すぎて、時々イライラする。でも、この時はベルビュー荘の現在・過去の思い至る人物を順番に思い浮かべて――すぐにピンときた。

「まさかとは思うけど、1号室の斉藤さんってこと？あの人、その頃からずっとベルビュー荘に住んでるの！？」

「ああ。当時のことで何か知りたいと思うことがあったら、ある部分あの人に聞くのが一番だな。あんたがまだ久臣さんの書いた小説を読んでないのは残念だけど――まあ、読めばあの人のが規則正しく印刷所で働く、根暗で屁こきのハゲ親父だとは思えなくなるはずだ」

「……あんたも結構言うわね」あたしはバッグから煙草を取りだすと、一服して呼吸を整えながら言った。

「というか、たぶんあんたがそう思ってるんじゃないかと思って、俺はそう代弁しただけさ。久臣さんは天才だよ。ベルビュー新聞で連載されてた『肉工場』だけじゃなく、他のもいくつか読ませてもらったけど――それを読めば、どのくらいあの人のが思想的に深いものを持ってるか、頭の悪いあんたにもわかるだろうよ」

「ふうん。でもそんなに才能豊かだっていうんなら、とっくに文壇デビューして注目されてるんじゃないの？」

ジーンズのポケットに片手を入れ、暫く立ったまま夜景を眺めていたレンは、溜息を着いて後ろのあたしを振り返った。

そしてどさりと、まるで疲れきったようにベンチの上へ倒れこむ。

「あんたってほんと、なんもわかってねえよな。俺、だんだん説明するのに疲れてきたぜ」

レンが体を密着するように隣に座っても、今言った奴のセリフどおり――こいつはあたしの短いスカートにドキドキするような奴ではまったくくない。

でもそうとわかっていても、あたしはこの時、かなりのところ胸がドキドキと高鳴っていた。

「な、なによ。あたしもあとで読んでおくわよ、S・H氏の『肉工場』」

「ああ。たぶんあんたはああいう純文学系の堅いものを読んだりする人間じゃないんだろう

けど……あれだけは頑張っってなんとか読んでおいたほうがいい。そしたら、次に自分が何をどうすべきか、生きるヒントみたいなもんが与えられるだろうからさ」

「ふう～ん。でもこう言っちゃなんだけど、なんか少し皮肉な話じゃない？ 齊藤さんが勤めてる会社ってかなり大きなところよね。365日、24時間工場を稼働させて、色んな雑誌や本を印刷してるっていう……でもそこに長年勤めながら、自分が書いたものは決して印刷されて世に出ることはないだなんて、齊藤さんはそのこと、どう思ってるの？」

「さあね。あの人はそんなこと、べつにどうとも思っていないんじゃないかな。っていうか、久臣さんくらい才能があったら、商業的なことはもうどうでもいいんだよ、たぶん。そのこともあの人の小説を何作か読めばわかると思うけど……久臣さんは、ベルビュー荘の住人たちが自分の書いたものを面白いって言うてくれたのが嬉しくて、それでずっと小説を書き続けてるっていう人なんだ。あの人はそうだな……言うなれば、このベンチと同じような感じの人なんだと思う」

「どういうこと？」

もしレンが今、あたしの肩に手をまわして抱いてくれたらいいのにと心密かに思いながら、あたしはそう聞いた。

彼の瞳の中に夜景の放つ光が反射して宿ってるみたいに、レンから見たあたしの瞳もそうであればいいと、この時あたしは願っていた。

「この場所には本当は最初、なんにもなかったんだよ。というより、俺がミドリさんから聞いた話によると、ガードレールの側から生える雑草でボーボーの状態だった。でも例によってあの小山内氏が――坂を上ってくる途中で休憩所が欲しいと閃いたんだな。で、早速ベルビュー荘の物置からカマを持ってきて草を刈り、土を踏み固めてベンチを据えつけたんだ。そこにある灰皿は、俺が勝手に作ってここまで持ってきたんだけど」

<sup>ノーム</sup> 小人が両手で皿を持った形の灰皿を、レンが指で指し示す。

「たぶん、ここを通る人間はこのベンチとか灰皿が、自分たちの払った税金で出来てるって勘違いしてるんじゃないかな。何しろいかにも公共の場所っぽく見えるからね……でも俺、ここでおばあさんが買い物袋を置いて休んでいるのを見たり、小さいガキがアイス食ったりする姿を見るたびに、思うんだよな。ただベンチがここにあるってだけで、世界はなんて素晴らしいものになるんだろうなって」

「……………」

――あたしはこの時、ただ静かに沈黙しながら、隣のレンが真っ直ぐに前を見つめる姿を眺めていた。

もちろん、彼の目にあたしのは映っていない。レンは白いガードレールの下、なだらかに三つ葉のクローバーや雑草が生い茂る先、商業施設やビルやホテルがネオンサインを放つ遠くを見つめている。

ようするにたぶん、ベルビュー荘にとって齊藤さんという人は、「ただそこにいる」だけでいい人っていうことなんだろうと、あたしはなんとなくそう解釈した。

彼はあたしのいない時をわざと狙いすましたようにミドリさんと話をしており、そういう時にあたしがうっかり居間に入っていくと、そそくさと部屋へ戻っていくという、そんな感じの人な

のだ。その時の反応から、もしや斉藤さんはミドリさんにホの字（死語）なのだろうかとあたしは思ったりしていたけれど――あたしはそのことについても、あえてレンに聞かないでおくことにした。

「あんたってほんと、なんもわかってねえよな」ってまた言われそうだからっていうより、ただ、言葉が喉の奥から出てこなかった。こんなこと、中学か高校のティーン以来だっていう気がする……もしかしてあたしも、ベルビュー荘に住む住人の何人かがかかっていると思いき<青春病>に、感染しつつあるのだろうか？

そのあとあたしは、随分長い間（といっても実際はたぶん五分か十分）レンとその場所に佇んだあと、何気なく立ち上がった奴についていくような感じで、また大股に坂道を上っていった。でもずっと黙っているのも流石に不自然かと思い、この時の自分にとって一番不思議に思われたことについて、ベルビュー荘の明かりが見えてくる前に聞くことにした。

「あんた、なんで今日あたしのことを送ってくれたわけ？あの見るからにノリのよさそうな友達とか、ほたるの劇団仲間と一緒に飲みに行ったら良かったじゃない。べつにあたしのことなんかほっぽっておいても、そんなことを気にするほどあたしはヤワじゃないって、あんたもわかってるでしょ？」

ここでレンは振り返ると、「だからあんたはわかってないっていうんだ」という、例のあの顔をまたした。

「帰りの電車の中で、あんた気づかなかったか？自分の前の席に座るだらしなくネクタイの緩んだサラリーマンが、あんたのスカートの中を覗きこもうとしたり、大学生が数人、あれ見ろっていうふうに意味ありげに視線を飛ばしてきたり……あんたはああいうの、楽しいと思うのか？」

「べつに、どうでもいいんじゃない。くだらないことだし。あんたはパンツが見えろとか何とか言ったけど、あたしにとってはそれもどうでもいいことよ。でも流石に、わざと物を拾うふりをしてこっちを見た奴のことは、少し笑ったわ。世の中にはどうしてこういう馬鹿な男が多いんだろうと思ったし、そういうあたしはあんたの目から見れば頭の悪い馬鹿な女っていうことなんだろうなって、隣のあんたの顔を見て思ったわ」

「……あんたはさ、自分が馬鹿だってわかってることについては馬鹿じゃないんだよな。俺があんたと一緒に帰ってくることにしたのは、単にミドリさんにあとで小言を言われると思ったからだよ。「年ごろの女の子をひとりで帰すなんて、まあ！」みたいなね。あの人の頭は大体七十年代半ばくらいで止まってるからな……その頃ちょうど、この坂のあたりに痴漢がよく出没したんだってさ。だから女学生を男子学生がエスコートして帰ってくるのが暗黙のルールみたいになってたらしい」

「ふうん。古き良き時代のなんとやられてわけね。それで、本当に今もこのあたりには痴漢とかレイプ犯が出没したりするわけ？」

「さあな。でも、あんたも馬鹿じゃないんだから、流石にそろそろ考えろよ。階段を上る時にバッグで後ろを隠す仕種が似合うほど、自分も若くはないな、とかさ」

「まったく、あんたってどうしてそう一言多いんだか！」

ケリーバッグを振りまわして、あたしはレンの後頭部を思いきり殴ってやった。「いってえな」という不機嫌な声のわりには、いつもどおりあまり応えてなさそうな様子だった。

そうだ。あたしは素直に認めよう——1970年代半ばなんて、あたしがまだ生まれてもいない頃だけど、たぶんその頃の女学生が隣の男子寮の学生に恋をするみたいに……たぶんあたしはこいつ、水嶋蓮のことが好きなんだと思う。

でも、それはこっちが恋心を持っているのに、向こうは友達としか思っていないといった類の、少し切なくて、苦しい感じの恋のまま、終わりを迎えるだろう。その昔、わたしが読んだ古い少女漫画の「レモンソーダの泡が胸に広がるような恋」とかいうのに似てるかもしれない。でも、それでもいい。「ああ、まだあたしにも誰かにこういう気持ちを持つことが出来るんだ」とわかっただけでも——今のあたしには十分だったから……。

.....突然ですが、僕はベルビュー荘の3号室に住んでいる大谷瑞希という者です。

この物語は川上咲良さんが一人称で語り進めているので、突然こんなふうはこの章にだけ僕がしゃしゃりであるのは、おそらくかなり不自然なことだとは思いますが。でも、あんなガサツな、女のなりそこないみたいな人に（とは、本人を目の前には絶対言えないけど）僕の内なる繊細な心理を描写するのはまずもって不可能なんです。

だから、申し訳ありませんがこの章だけ、僕の独り言につきあっていただけたらと思います... ..それに、サクラさんの目を通して見ただけではわからない、ベルビュー荘の人間の諸事情といったものもわかるでしょうから、そういう意味でも僕がひとりでブツブツつぶやくというのも、そう悪いことではないと思うんです。

ところで、僕は今十九歳で、来年二十歳になります.....そう、成人です。もっとも、成人式に出席するつもりは、今から毛頭ないけれど。何故かといえば、昔自分をいじめた連中と鉢合わせしそうで怖いから。

それに、親からは二十歳になったら小遣いなんてものはびた一文渡さない、金が欲しかったら働けと脅かされていて――僕はもしかしたら、自分が<成人する>ということを認めたくないと思っている部分があるのかもしれませんが。

ここで、何故僕が実家を離れて叔父さんの別れた奥さんが経営する下宿へやってくることになったのか、その説明が必要でしょうか。僕はようするに十七歳で高校をドロップアウトした人間なんです。その後、いわゆる引きこもりというのをやってみました。いや、今だって人に言わせれば引きこもりなんでしょう.....父さんと母さんは大きな運送会社の下請け会社を営んでいて、ほとんど毎日休みなく働いており、学歴というものにはまったく拘りを持っていない人たちです。

でもそのかわり、人間学歴はなくとも（いや、学歴がないからこそ）汗水流してお天道さまに恥かしくないよう働く義務があるというか、そういう強い道徳観念の持ち主です。ここまで僕の話聞いて、「立派な御両親じゃないか。君も親孝行したまえ」というのが、世間一般の反応だろうというのは、僕もわかっているつもり。だけど、今の時代、物事はそう単純じゃないんです。

そう、僕だって出来ることなら、親孝行がしたい。両親が「おまえを生んで良かった」と思ってくれるような息子でいたいと思ってずっと努力してきました。小学二年生の時、「ミズキなんて女みたいな名前だ！」ということをきっかけに、いじめが始まった時も、（三年生になればクラス替えがあるから、その時までの辛抱だ）と思ってじっと耐えました。靴を隠されて雨の中、裸足で帰ったということもあったけど、僕は母さんには本当のことを言いませんでした。家の靴箱の中からその前まで履いていた古いスニーカーを出して、こっそりその靴で登校することにしたんです。

三つ年の離れた姉さんは、流石に時々、そういう僕の行動のいくつかを（おかしい）と内心思っていたようですが、両親には何も言わずにおいてくれました。でも、今はそのことを後悔して

いると、僕が実家をでてベルビュー荘へ移り住む時に言ってましたっけ。

「父さんと母さんの性格からして、もしあんたがいじめにあってるなんて言ったら……速攻学校に乗りこんでいくのは目に見えてたからね。でも、あんたのクラスの担任っていつもどっか頼りなさそうか、ちょっとおかしな感じのする先生ばっかだったし、逆に「よくもチクリやがったな！」なんてことになるかもしれないと思ったんだよね、当時は」

そう、僕はクラスメイトに恵まれないだけでなく、学校の担任の先生にもまったく恵まれてきませんでした。

小学三年生の時、クラス替えがあっていじめっ子から離れられたのはよかったのですが——でも僕は廊下とかで結構大っぴらにいじめられてたので、まわりの子たちは「その気になればいじめてもいいような、どうでもいい奴」といったような目で僕を見ていました。そして小学四年生の時、いじめではないのですが、ちょっとした問題が起きてしまい、いわゆる〈帰りの会〉でそのことが話し合われることになったんです。

僕は小さな頃から少しばかり絵がうまくて、学校の休み時間はずっとノートに絵を描いて過ごしていたものでした。他の成績は体育以外まあ普通で、唯一図工だけがずば抜けて得意という、そんな子だったんです。そしてある時、学校で図工の時間に写生にでかけるということがありました……僕は自分が唯一得意とすることだったので、とても張り切っていたのですが、あろうことか写生の時間に遊びほうけてた猿渡くんという子が、僕の描いた絵を自分のものにしてしまい、僕はとても困ったことになりました。

でも当然、そんなのは誰の目から見てもバレバレな行為だったので、その猿渡くんがとった行動をどう思うかという話し合いが、〈帰りの会〉で持たれたというわけなんです。僕は自分は一方的な犠牲者であり、どう見ても普段から大人しい僕がガキ大将タイプの猿渡くんの命令に逆らえるわけがない……そのことを先生をはじめ、みんながわかってくれるものと思っていました。そして「せっかく描いた絵を横から理不尽に奪われた可哀想な大谷くん」ということになるだろうと、信じて疑いもしなかったんです。

ところが、みんなの話しあいは僕にとって意外な結果で終わったとしか言いようがありませんでした。

「確かに、猿渡が大谷の絵を横から取ったことは悪いと思う。だけど、大谷も一言「それは僕の物だから渡せない」って言えば良かったんだ」

「そうだよな。大体大谷っていつもほとんど喋らないから、こういう時につけこまれるんだよ」

「でもやっぱり、もともとは猿渡くんが強引に大谷くんの絵を取ったのが悪いんだと思います！」

何かというときい子〉になりたがる学級委員の女子が最後にそう意見すると、それまで腕を組んでみんなの言い分を聞いていた権藤先生は、立ち上がって僕と猿渡のことを呼びました。

そして僕の頭と猿渡の頭を両方ゲンコツで殴り、「喧嘩両成敗！」と言い放ったんです。

正直いって、僕には何がなんだかよくわかりませんでした。僕は苦心して描いた絵を横から奪われた被害者なのに……喧嘩両成敗？

他のクラスメイトもたぶん、話しあいが長く続いたせいで、内心「早く帰りたい」と思っていたんだと思います。「とりあえずなんかよくわからないけど、決着がついた」という感じで、こ

の結果が公平か不公平かなんていうことに、あまり頓着してない様子でした。

でも僕はやっぱり、納得できませんでした。こんなおかしいことってないと思ったし、その日初めて両親にいつもはほとんどしない話——「今日、学校でこんなことがあった」ということを、僕は話して聞かせたくらいです。

だけど、父はトラックで長距離を走って疲れているせいか、ほとんどまともに僕の話聞いていませんでした。母も「そんな小さいことで男がクヨクヨするんじゃない！」と言ったきりで...唯一、若干話のわかる姉は「それはおかしいよ。絶対おかしいって」と味方してくれたけど、それも寝転びながら漫画を読み、ポテトチップスをぼりぼり食べながらのことでした。

たぶん、こうしたことはすべて、他の誰が聞いても「大したことない小さなこと」なんだと思います。むしろ十九歳になった今の僕が、そんな何年も昔のことを掘り返して「あの時父さんと母さんはこうだったじゃないか！」と責めること自体が、少しおかしいことなのかもしれません。

でも、僕は最後の最後に切り札をだすみたいに、それを行いました。中学生の時、万引きで補導された僕は、強制されて嫌々ながらそれを行っていたけれど、そうした弁解を両親の前では一切しませんでした。そうしないと仲間に入れてもらえないとか、いじめられるといった話をしても、父や母には到底理解できないとわかっていたからです。でもそんな小さなことが積もり積もって、結局僕は高校も中退することになり、家に引きこもって暮らすようになったのだとは——父や母にはどうしても理解困難なことらしかったです。

僕はたぶん、常に他の人から「誰も欲しくない嫌なもの」を押しつけられて生きるしかない運命なのだ、と、十七歳にして悟っていました。これから社会にでて働くことになるだろうが、大学に進学しようが、そのことは絶対に動かない運命なのだ、と確信するに至ったとっていいと思います。

だからもう、二度と自分の部屋からは出ていきたくない.....そして、そのことで父や母があれこれ文句を言う時には、「そもそもそれはてめえらがあの時こうだったからだろ！」と、自己防衛に走ることにしていました。父はもともと直情型のカッとなりやすい性質の人なので、言葉を使った理屈で勝てないとなると、当然手のほうが先にでたものでした。

「出ていけ！この親不幸もんが！」

「ああ、出て行ってやるさ、こんな家！今すぐにでも出て行ってやる！」

お互いに頭を柱に打ちつける、首根っこを引っつかむの大喧嘩になると——姉さんは父さんと僕の間になんとか割って入ろうとし、母さんは近くに住む叔父さんのいる教会へ電話していました。

そしてそんなことが五回も六回も続くようになると、教会で牧師をしている叔父さんは、自分の別れた妻の経営する下宿に僕を預けてみないかと、そう提案したのです。両親も僕も当然、叔父さんがひとり息子をたったの六歳で亡くしたことを知っています。そしてその叔父さんに「生きていてというそれだけで、何故感謝できないんだい？」と言われてしまうと、父や母も押し黙る以外にない様子でした。

たぶん父さんや母さんは知る由もなかつただろうけれど.....僕は高校を中退することを決めた

時点で、自殺することを考えていました。

今にして思えばたぶん、燃え尽き症候群というものだったのかもしれませんが。もっとも、父や母に言わせれば「こんなに一生懸命働いているこっちのほうが燃え尽き症候群だ」くらいにしか思えなかったに違いないけれど。そして僕はそうした両親の言い分を、正しいものだとして受け止めていました。父や母の、自分たちが生活のために一生懸命働く背中を見て育てば、その子供は自然にいい人間に育つだろうと期待する気持ちもよくわかっているつもりでした。

でも僕はたぶん、叔父さん言うところの「大谷家の悪い遺伝子」に捕まってしまった人間なんだと思います。

うまく言えないけれど、大谷家の中で僕の唯一の理解者といっているいい人物が、この教会で牧師をしている嵐おじさんでした。

嵐おじさんもまた、僕と同じく自分の名前にコンプレックスを持っていて、「アラシなんて、なんかいかにも凄いことを巻き起こしそうな人物の名前じゃないか。でも、実際の僕は読書が好きだけの、物静かな人間なんだからね」……ちなみに、僕の父は大谷新<sup>アラタ</sup>というのだけれど、性格は昔気質で頑固、なんらの新しいことを巻き起こしそうにない、実に頭の古い人間だったのでした。

生まれて初めて親元を離れてベルビュー荘へやって来た時、僕はふと「あ、これで死ぬ必要はないんだ」と思ったのをよく覚えています。ベルビュー荘の管理人は笹谷翠さんという人で、嵐おじさんが離婚したのが僕の生まれる前だったため、会うのはこれが初めてでした……でも、小さな頃から親戚が全員集まるたびに、彼女の名前は時々でていたので、どんな人かというのはなんとなく知っていたのですが。

そのせいかどうか、僕はミドリさんと初めて会った時、なんだか「初めて」という感じが全然しなかったのを、今もよく覚えています。嵐おじさんが甥の僕のことをどう話していたかはわからないけれど、もし仮におじさんが「高校を中退した家庭内暴力を振るう仕様の無い甥を更生してやってくれ」みたいに言っていたとしても——そんなことすらどうでもいいと、僕は彼女に会った瞬間に思いました。

それでも流石に、他の居住人とほとんど話すでもなく、3号室に閉じこもりきりになっていたら、いかに懐が深くて寛容なミドリさんでも、余計な心配をしたりお節介を焼いたりするだろうかと思っていたのですが……そんなことも一切なく、僕は毎日パソコンでオンラインゲームをして過ごしたり、名前や年齢や職業を偽って書いているブログを更新したりと、相変わらずそんなしょうもない日々を送り続けているという、そんな感じでした。

もちろん、そんなことをしながらも、頭の中ではこんな生活をいつまでも続けることは出来ないとわかっていたし、タイムリミットが来る前になんとかしなくてはと、ずっと考え続けていたんです。

そして僕がベルビュー荘へやって来て三か月が過ぎた頃（今から約一年前）、表にある物干しから下着が盗まれるという事件が起きたのでした……この時、また僕の悪い被害妄想の癖がでて、ミドリさん以外の居住人がみんな、実は心の中では僕が犯人だと疑っているのではないかという気がしてきました。こうなると、オンラインゲームをしていてもブログを更新していても、何



かがまったく楽しくありません。そのことをきっかけに、小学生時代にまで遡る嫌な事柄が次々と思いだされ、今度もまたきっとみんな僕に〈嫌な役〉を押しつけてくるに違いないと思ったんです。

まったく馬鹿な子だと、ここを読んでいる人は思うかもしれませんが、その日の夕食の席で、僕は思いきってみんなに「自分は犯人じゃない」というようなことを打ち明けていました。でもそのことを告白したあとで、僕は激しく後悔しました……何故といって、実は僕を犯人と疑っているような人はその場に誰もおらず、むしろ自分がそんなことを口走ってしまったがゆえに――むしろ墓穴を掘ったというような雰囲気食卓には漂っていたからです。

「そんなこと、誰も思ってねえって」と2号室の住人、水嶋蓮さんは言い、6号室の住人である二階堂ほたるさんは「それに、盗まれたのってあたしの下着だったのよ」と笑ってフォローしてくれました。「たぶん、下着ドロは奈々美のを狙ってたんでしょうけど、まったく生憎だったわねえ」と。

でも、みんなが和やかに大笑いする中で、唯一7号室の石川奈々美さんだけは――少しだけ怖い顔をしていました。それで僕は、彼女だけは今の告白で僕のことをむしろ疑うことになったのではと、なんとなく心配になりました。

事実、この近辺に出没していた下着泥棒が捕まるまで、奈々美さんは時々疑わしい目で僕のことを見ていたし、このことをきっかけにレンさんやほたるさんが少しずつ僕に話しかけてくれるようになって、彼女だけはずっと、冷やかな態度を崩さないままでした。

話は変わりますが、ベルビュー荘の住人たちはみな自由人であることを誇りにしているという感じの人ばかりです。

1号室の斉藤久臣さんは、印刷会社で夜勤業務をしているけれど、それは昼間小説を書くという芸術活動に勤しむためらしく、2号室の水嶋さんは、内装美術の仕事がない時は、自室で油彩画を描いて過ごしているそうです（部屋へ入れてくれた時、本人がそう言っていました）。そして6号室のほたるさんは平日郵便局に勤務しつつ、それ以外の時間は舞台への情熱に身を燃やしているという、そんな感じの人です。それから7号室の奈々美さんは、普段モデルとして仕事をしつつ、今はミス日本を目指しているとかで……こんなオンボロ下宿には似つかわしくないマドンナといった感じの人でした。

だから僕も、ベルビュー荘の他の住人たちが何がしかの〈夢〉を追いかけているみたいに、将来自分になりたいものをだんだん心の中で思い描くようになっていきました。僕がその夢を叶えようとするのを怖がったのは何より、夢を追いかけても報われなかったらどうするのか、そのリスクを怖れているためだったとっていいと思います。

「漫画家になりたい」――その夢を僕が実際に口にだして言うことが出来たのは今のところ、久臣さんだけです。

レンさんは僕が出来れば自分もこうなりたいと思うような、雲の上の遠い存在で……彼の部屋の壁に描かれた、レンさん自身の描いた絵を見た瞬間、僕は彼に自分の描いている漫画絵を見てほしいとは、とても言い出せなくなりました。あまりにも才能の差に違いがありすぎて、恥かしいと思ったんです。それでレンさんに「ミズキは将来、何かになりたいものってあるか？」って聞かれても、僕は「そのことで迷って悩んでいる」というように答えていました。

もちろん、レンさんはとてもいい人です。でもベルビュー荘で僕が心を開くことが出来たのは、ミドリさんの次に久臣さん、その次がほたるさんといった感じでした。心を開いたなんて言っても、それはほんの数センチ部屋のドアを開けたくらいのもものかもしれないけれど……それでも僕にとってそれは、大きな進歩と呼べることでした。

何より、その場所においても自分が邪魔者じゃないと感じられたり、話を振られる以外一切口を開かなくても居心地が悪くなることもなく、さらにはちょっとした誤解があった相手——奈々美さんとのちには普通に話を出来るようになったことも、僕には嬉しいことでした。

何故とって、僕はそれまで誤解があった相手と和解したことが一度もなかったもので……下着泥棒が捕まったあと、奈々美さんが色々気を遣って話しかけてくれるようになったことが、僕にはすごく嬉しかったというか、人間不信の負の壁が一部分崩れて瓦礫になったようにさえ感じたものでした。

だから、奈々美さんが婚約者と結婚して中国へ行くという話を聞いた時は、少なからずショックを受けました。もっとも僕は彼女に恋をしていたわけではないのですが、突然時間はやはり生きて動いているんだという、例のタイムリミットのことが気になりだして——ベルビュー荘をでていく奈々美さんのことをみんなで見送ると、僕はまたひとり3号室で机に向かい、ガリガリと原稿を描くことに集中しはじめました。

奈々美さんがミス日本の最終選考に残ったところで終わったみたいに、僕もまたどんなに一生懸命漫画を描いても、選外に洩れたり一番いい成績が最終選考で終わりってということになるかもしれないけど……（それでもいいんだ）と僕は思って漫画に打ち込みました。

朝起きてごはんを食べて漫画、昼ごはんを食べて漫画、三時におやつを食べて漫画、夕食を食べてからまた漫画……僕の毎日はその繰り返しでした。背景も効果も何もかも、自分ひとりですべて描かなくてはならないので、漫画ってというのは1ページ描くにも、相当な時間と労力がかかります。

正直、食堂にごはんを取りに行く僕の姿というのはやつれた幽霊のように見えていたに違いないのですが、僕の心は夢に向かってこれまでになく燃えていました。そして今描いている漫画（自信作）を完成まで仕上げる事が出来たら——久臣さんだけでなく、ミドリさんやレンさんやほたるさんにも読んでもらおうと思っていました。

そんな矢先にまさか、その後の僕の人生を変えることになる人物がベルビュー荘へ引越してくる事になるろうとは……僕は川上サクラさんに会った瞬間、彼女のことを第一印象で（友達になれそうもない）と感じただけに、その関わりあいには不思議な展開でした。

サクラさんは奈々美さんとは百八十度まったく別の意味で美人でしたが、奈々美さんとは違って近づきにくいタイプの美人というのか、僕とはまた別の意味で自分の周囲にバリアーを張って生きているように見える人でした。

レンさんではないのですが、たぶん彼女の頭の中はこんなふうになっているのではないかと僕は想像しています。

ミドリさん（5号室の住人）→三食ごはんを作ってくれる、利用価値のある人。

1号室の住人・久臣さん→無口なハゲ親父、2号室の住人・レンさん→ちょっとイケメン（はあとまーく）

3号室の住人・僕→救いようのない根暗、6号室の住人・ほたるさん→女優を目指しているとかいうデブ……

こんなふうにごく、サクラさんは白黒はっきりしているように見える人で、僕はある意味（この人は自分に正直な人なんだろう）となるべく彼女のいい面を見るよう努めることにしました。

とはいえ、それまであったベルビュー荘のどこか朗らかでのどかな日々というのは、サクラさんの登場で破壊されてしまったような側面があり、レンさんなどはそのことを苦々しく思っている様子……一度など「金がない、貧乏だって言ってる奴を、まさか無理に追いだすってわけにもいかねえし」などと彼が呟いているのを聞いて、僕は（サクラさんの思惑に反して、レンさんは彼女のことが本当に嫌いなんだ）と思ったものでした。

でもその後、ほたるさんが所属する劇団の定期公演を見にいった以来、何があったのかはわかりませんが、ベルビュー荘に流れる風向きが若干変わったような感触がありました。もちろんこれは、レンさんとサクラさんの関係のことじゃありません。このふたりは顔を合わせれば相変わらず夫婦漫才のような喧嘩ばかりしてますから……そうではなくて、意外なことにほたるさんとサクラさんの関係が思った以上に親密なものに変化したんです。

これは僕にとっても驚きでした。ほたるさんと7号室の前住人・奈々美さんが親友同士だったのは僕も知っていますが、あの人当たりが良くて優しいほたるさんを持ってしても、サクラさんと友達になるのは困難だろう……僕はそう信じて疑いもしませんでしたから。

でもある日、トイレへ行って廊下を自分の部屋まで戻る途中、居間から彼女たちふたりの楽しそうな笑い声が聞こえてきたんです。

「タイトルは、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』で決まり！それで、主人公はやっぱり小山内氏よね。でもこのオサナイっていう苗字、あたしみたいな馬鹿は読めなくてコヤマウチって読んじゃいそうだし、やっぱり劇の登場人物としてもっと親しみやすい感じの名前がいいと思うの」

「確かにそうよね。大体、実在の人物の名前を使うとしたら、本人にきちんと断っておかなくちゃならないだろうし……でも大谷さんの嵐っていうのは、いかにも劇とかドラマの登場人物っぽくて良くない？」

僕はそんなサクラさんとほたるさんの会話を盗み聞き、廊下を3号室へ戻るまでの間に――あるストーリーが閃いていました。

あの温厚そうな叔父と心優しきあったかあさんのミドリさんが、何故離婚することになったのか、僕はその理由を知りたいように思い、レンさんの薦めもあってベルビュー新聞ならすべて読んでいましたから……もちろん結局、叔父とミドリさんが離婚に至った理由はわからなかったけれど、読んでいた途中で「この古き良き青春のお話を漫画として描けたらなあ」とは、その時から思っていたんです。

「『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』か」

僕が窓の外の夕陽に向かってそうつぶやいた時、廊下の壁を通り抜けるようにして、何か幽霊のような存在が向こうから歩いてくるのが見えました。

「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！！」

白黒の写真から抜けだしてきたような男は、白いマントを翻しながらくると踊るように廊下を歩き、そして消えていきました……僕は久臣さんが「いやあ、小山内は本当に変な奴だったよ」と言っていたことを、自分が今見た幻に目をこすりながら、ふと思いだしていました。「何しろ毎日、起きてくるたんびに——『ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！！』って、絶対言いながら廊下を歩くんだから。俺の記憶にある限り、あいつが朝起きてそう言わなかったことは一度もない。しかも前の日何時まで起きてようと、絶対七時きっかりにごはんを食べるために起きてくるんだ。天才となんとかは紙一重って言うけど、たぶんあいつもそうだったんだろう」

それから、嵐おじさんが言っていたことも僕は思いました。

「小山内？ああ、あいつは天才と馬鹿は紙一重というより……当時はわからなかったけど、たぶん今でいうADHDか何かだったんじゃないかな。画家のダ・ヴィンチもそうだったんじゃないかっていう説があるらしいけど、次から次へと素晴らしいアイデアが思い浮かぶあまり——なかなかひとつのことを完成まで導けないんだな。でもそんなあいつも今じゃ、ノーベル物理学賞に一番近い男って言われてるくらいだから、世の中わからんよ」

ベルビュー新聞を全部読んでいて思うに、小山内氏とミドリさんは実は両思いだったのではないかと思われる節があります（あくまでもそこはかとなく、だけれど）。でも嵐おじさんにズバリそう聞くのは流石に気が引けたので、僕は久臣さんに遠まわしに「実は女子寮に恋人のいる羽柴氏を含め、男子寮に住む学生は全員、ミドリさんのことが好きだったのではないかと聞いてみることにしました。

「まあ、そりゃそうさ。毎日絶品の美味しい玉子焼きとかベーコンエッグ、肉じゃがなんかを作ってくれるんだから、もしあれでミドリさんがそれほど可愛い容姿の女性じゃなかったとしても、それなりにモテたんじゃないかって俺は思うよ」

「じゃあ、久臣さんもミドリさんのことが好きだったんですか？」と、僕は思いきって突っこんでみました。

「うん、だから男子寮の男どもはみんな、あるひとつの協定を結んでいたんだ。抜けがけは絶対に許さないっていうね」

「それで小山内氏も久臣さんもミドリさんには告白せず、いつの間にやら時間が過ぎて嵐おじさんがミドリさんと結婚したってということだったんでしょうか？」

「そうだなあ……羽柴の奴がちょうどそうだったみたいに、ミドリさんには野郎どもの間で協定があって手出しできないとなると、まあ健康な男子は他の女子と仲良くしようとしたってというような話の流れだな。その中で大谷と小山内だけが彼女を作るでもなくミドリさんに片想いしてたっていうかさ」

久臣さんは今でこそ頭髪が退化しているものの——昔の写真の髪がたっぷりあった頃の久臣さんというのは、今とは別人としか見えないくらい、なかなか男ぶりがいい。ということはた

ぶん、彼にも青春時代、恋人のひとりやふたりいたってということなんだろうと、僕はそう推察しました。

「つまりじゃあ、小山内氏は自分の胸の内を告白するでもなく、親友でもあった叔父に遠慮して、アメリカへ旅立っていったってということなんですか？」

「まあ、羽柴の奴が最後の最後にあいつの背中を押して、「アメリカについて来いって言え！」ってアドバイスしたらしいよ。だけどミドリさんはその申し出を断ったって話。大体小山内ってのは、おつむのほうはべらぼうにいいんだが、そもそも人に対する共感性に乏しい奴でね。自閉症ってわけじゃないんだが、サヴァンっていうのによく似てた。いわゆる天才馬鹿って奴さ。大谷が小山内の作った強化洗濯紐で「アーアアアッ」なんて叫びつつ女子寮へ渡って以来——暗かった性格が百八十度変わったなんて聞くと、「なんて美しい男の友情」って思う人がいるかもしれないな。でもあいつはさ、実際そんなことは全然考えてないんだよ。小山内にとって大切だったのは、自分の物理学的計算が立証されるかどうかってということと、あとは二階の6号室に住む、どこか自惚れた態度のいけ好かない野郎を打ち負かすことだけだった。結局、あのおかしな実験で怪我をしたのは大谷じゃなくて小山内だったけど、でもあれで仮に片足を骨折したのが大谷だったとしても——小山内は「骨折ってどのくらい痛いのか、僕は骨折したことがないからわかんないな」とか、相手の前で平気な顔で言ったと思う。つまり、あいつはミドリさんのことが好きって言っても、三食ごはんを作ってくれる便利なお姉さんだから好きって思ってたんじゃないかって、俺はそんな気がするな」

「えっと、じゃあ……ミドリさんが小山内氏を振って嵐おじさんを選んだのは、小山内さんの感情が本当は恋じゃないって思ったからなんですか？」

「さあ。そこのところはミドリさんに聞いてみないことにはなんとも言えないな。でもまあ、ただひとつ言えるのは、小山内の女房になってもいいってような物好きな女性が仮にいたしたら——その女性は相当苦勞をするだろうなって、俺はそう思うよ。何故といえばあんな、七時には何があろうと必ず起きるとか、横断歩道を歩く時には絶対に白い部分しか踏まないとか、自分のお気に入りのステッキを肌身離さず身につけているとか——小山内には他人に理解できない<絶対の法則>がたくさんあったからな。そんなものをひとつひとつ理解して、受け止めることが出来たのはたぶん、あいつの母親以外ではミドリさんだけだったんじゃないかって気がするよ」

「……もしかして、小山内氏って今も独身なんですか？」

「ああ、そうだよ。でもまあ、あいつはアメリカへ渡って正解だったんだろうな。あんな変な奴、日本の物理学界では持て余されて、研究費なんて誰も援助してくれなかつたらうからな。けどあいつは不思議と、昔から人望だけはあったんだ。俺はあいつのことを共感性に乏しいって言ったけど、それでいて時々、人の心の機微についてハッとするようなことを言う奴でもあった。だから小山内のことを知ってる奴はみんな、天才となんとかは紙一重だって、好意をこめてあいつのことを言うんだよ」

——僕は、久臣さんから聞いた小山内氏の話の色々思いだし、サクラさんやほたるさんがこうしたことをどこまで知っているのだろうと思いました。もし、ベルビュー荘の古き良き時代のことを演劇にするのなら、<ベルビュー新聞>を読んだだけではわからない、こうした細かいこと

も知っておいたほうがいいんじゃないかなって思ったんです。

(久臣さんは、ほたるさんとサクラさんが居間でどんなにわあわあきゃあきゃあやってようと、横から口をだすような人じゃないし……かといって、僕がそんなことを言うっていうのもちょっとなんだし……)

僕は廊下をうろうろ行ったり来たりした揚げ句、結局自分の部屋である3号室に閉じこもることにしました。

今物凄く話の盛り上がってるあのふたりに「あのう」などと話しかける勇氣は僕にはないし、仮に話しかけることが出来たところで、いつもみたいにしどろもどろになって言いたいことをうまく説明できないに決まってるから。

それだったら、まずは漫画のネームのような、絵コンテ風のものを書いて説明したほうがいいって、僕はそう思い、机に向かうと真っ白な原稿に何人かの人物画をせっせと描いていきました……『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』というタイトルで僕も漫画を描きたいと思ったから、まずは僕なら漫画としてこう描くっていうことを提示したあと、サクラさんやほたるさん、また久臣さんやミドリさんにも、これを投稿してもいいかどうかと打診してみるつもりでした。

ほたるの所属する劇団レリックの『ゼウスとプロメテウス』を見た次の日から、あたしはレンの言っていた斉藤さんの処女小説、『肉工場』を少しずつ読んでみることにした。

正直、文章のほうがやや難解なので、頭の悪いわたしには理解できない単語が途中いくつも出てきたけれど――それらの意味についてはすっ飛ばしつつ、あたしは25号から178号まで連載の続いた、斉藤さんの小説を読んでいった。

ストーリーの内容は大体、以下のとおりといったところ。

<主人公の常盤大地は、屠殺場で働いている。来る日も来る日も牛や豚の肉を解体することに疑問を感じた大地は、ある日ジョーン・バエズの「ドナドナ」を聴いたのをきっかけに、職場をやめることにするが……結局、普通のサラリーマンになってみたところで、それは実質的に『肉工場』となんら変わりがないということに彼は気づくのだった。

そして彼は色々な職業を転々としたあとで、最後は兼業農家となり、畑を耕し、またかつて自分が勤めていた屠殺場へ飼っている牛や豚などを涙とともに送り出すことになるのであった……>

まあ、あらすじを簡単に紹介するとしたら、大体こんなところかも。

でも冒頭の牛や豚を解体する作業のあまりにリアルな描写や、その他サラリーマンとして苦勞して働く主人公の姿、結局この世の全体が『肉工場』のシステムによって動いているに過ぎないと大地が悟るシーンなど、正直、わたしは書いた本人を知っているだけに、あのハゲ親父……もとい、斉藤さんは一体どこでこうした知識や経験を得たのだろうと、不思議で仕方なかった。

というか、ほたるに続いて、ベルビュー荘1号室の住人までもが、ただの凡人でなく隠れた才能を秘めた人間であると知るに至り、あたしは携帯をいつも肌身離さず持って、派遣会社から電話が来るのを待っているだけの我が身が、すごく哀れなものに思えてきた。

わたしが今登録してる派遣会社は全部で七社だ。そのうちの四社とはすでにトラブルとなり、よほど人の頭数が足りないか何かしない限り、電話がかかってくることは絶対ないだろう……そして残りの三社が配信しているメールを見ては、あたしはその仕事に応募しようかどうかと悩む日々を送っていた。

「そういうあたしも結局、肉工場のトリックに引っかかっているだけってことになるのかしらね、斉藤先生の小説によると」

確かにレンの言ったとおり、斉藤さんの『肉工場』を読んだことは、ちょっとした生きるヒントみたいなものにはなったと思う。

もっとも肉工場のトリックに気づいたところで、人間は結局大地を耕して働く以外にない脆弱な存在らしく、あたしもまた<大量募集!!!コールセンター勤務、時給千円!!!>と書かれたメールをスクロールし、最後のほうに記された電話番号を人差し指で押すしかなかったというわけだけだ。

研修を一日受けたあと、世論調査の電話をするという仕事で、期間はたったの二日間だけだった。

とりあえず月に最低二万は稼がなくてはいけないから、あたしは間に一時間休憩を挟んで七時間働くというシフトを選び、その仕事にエントリーすることにした。1,000円×7×2+4,000円（研修時間の4時間）といったところ。

あたしは普段読み慣れない小説などというお高尚なものを読んだせいで、目がやたらシバシバするものを感じつつ、夕ごはんを食べるために階段を下りていくことにした。最初の頃はレンと鉢合わせるかもしれないと思い、メイクのほうもばっちり決めていたけれど、最近ではベルビュー荘にいる間はずっとスツピンのままだ。

何故といってそもそも、次に新しく化粧品を買うとしたら薬局で安物のコスメを買う以外にはなく……大体、レンの好み自体がナチュラルメイクかすっぴんの女子といったところなのだ。それであたしは「おまえ誰だよ」と言われるのを承知の上で、まったく化粧をしなくなっていた。

「久臣さん、S・H氏の書いた『肉工場』、読んだわよ」

食堂の椅子に座って夕刊を読んでいた斉藤さんが、あたしの姿を見るなりそそくさと席を立つのを見て――あたしは彼の背中に向かってそう声をかけた。

斉藤さんのことはみんな久臣さんと呼んでいるので、あたしももう久臣さんでいいだろう、うん。

「なんか、いつも使っていない脳の筋肉を使ったみたいで、すごく疲れちゃった。でも、結構面白かったと思う……主人公の常盤大地って、久臣さんがモデルか何かなの？」

「いや、べつにそういうわけじゃないけどな」久臣さんはまた元の座席に腰を落ち着けて言った。「そもそも作家っていうのは、基本的にそういう書き方をしないもんだよ」

（なんだ、この人結構普通にしゃべれるんじゃない）

そう思ったあたしは、彼の作品を読んだひとりの読者として、久臣さんに色々質問してみることにした。

今食堂にいるのはあたしと久臣さんと夕食の仕度をしているミドリさんだけだ。あと十分もすれば六時なので、3号室の根暗青年もそろそろお盆をとりにくるだろう。

「ふうん。でもなんかよくわかんないけど、日本には＜私小説＞っていうのがあるでしょ？わたし、ああいうの大っ嫌い。「俺はこの世に生を受けるべきじゃなかった」的な、世界の不幸をひとりで抱えこんでるみたいな男、あたしだったら蹴り飛ばして滝にでも突き落としてやるわ」

久臣さんがブツと吹きだしたのを見て、意外なところで受けたと思ったあたしは、盛りつけの終わった皿をお盆に並べつつ、久臣さんの笑いがおさまるのを待った。

「わたしは結構、太宰治って好きだったけど」と、ミドリさんがお玉で八宝菜をすくい、それをごはんの上にかけていく。今日の夕ごはんのメニューは八宝菜と中華スープ、それにサラダとヨーグルトだった。

「でもああいう人と関わりあった女の人は大変ね。彼には奥さんと子供を大切に、作家としてもまあそれなりに成功するっていう道もあったように思うけど……そんなんじゃない真の芸術作品は生まれないと考えて、わざと苦しみとか死に自分のことを追いやっていたような気もするし」

「まあ、『人間失格』みたいな作品を書いているながら、妻や子供を大切に家庭でぬくぬく暮



らすってことに、太宰は矛盾を感じてたんじゃないかな。大体、女の人っていうのは影のある顔のいい奴に弱いんだから、太宰はあれで良かったんだよ」

「そういえば太宰で思いだしたけど」ミドリさんと久臣さんの関係というのはこんな感じなのかと思いつつ、あたしはふたりの間に割って入った。「前に勤めてた店で、なんとかいう作家の先生がやって来て一抱かたたい作家ナンバーワンは誰かっていう話になったんだけど、一位が太宰治だったと思う、そういえば」

「夏目漱石はそのランキングに入ってないのかい？」

「昔、千円札に顔がのってた人？あの人はいあんまりこう……セクシャルなイメージじゃないから」

久臣さんがまた軽く受けていると、のそのそとミズキくんが入ってきて、ミドリさんの手からお盆を受けとり、そして去っていった。

彼の幽霊のように蒼白な顔を見ていると、レンじゃないけど、そのうち部屋で首を吊ってるのが見つかったらどうしようって、あたしでさえそんな気持ちになる。

「久臣さん、ミズキくと実は水面下で仲がいいんでしょ？あの子って一日中部屋に閉じこもって何してるのかしら。これって、好奇心旺盛なあたしの、余計な詮索？」

「そうだね。余計な詮索だ」と、珍しくあたしがいても部屋へお盆ごと持ちこむでもなく、久臣さんは八宝菜に手をつけ始めている。「べつに心配しなくても、ミズキくんは大丈夫だよ。あの子が一日中部屋に閉じこもって何をしてるかっていうのは、そのうちわかるさ。まあ、ミドリさんもそういうことで……」

(ふう〜ん。このおっさん、言うなと言われたことは、たとえ管理人のミドリさんが相手でも言わないのね)

トイレでオナラをよくしている1号室の住人に対して、この時あたしの中で若干好感度が上がった。レンの言っていた「あの方は本当はすげえ人なんだよ」という言葉が脳裏をよぎる。

「久臣さんって、さっきもそうだけど、わたしのこと、避けてませんか？」

中華スープをすすってそう聞くと、ミドリさんの向かいに腰かけている久臣さんは、何度かむせ込んでいた。

「……まあ、それはね。親父と呼ばれる年代の男は、基本的に若い子に嫌われる運命にあるって、わかってるからだよ。俺の顔がリチャード・ギアにでも似てない限りはね」

「それと、久臣さんにはトラウマがあるのよ。昔、ホステスをやってた女性に相当入れこんで一ここの部屋にもほとんど帰って来なかったこともあるの。で、その人の顔がなんとなく、サクラちゃんに似てるのよね」

久臣さんのむせ込みがさらにひどくなった。

どうやら、あたしが勝手にひとりで思いこんでいたこと……久臣さんはミドリさんに純愛を捧げているのではないかという説は、ないものと見ていいようだった。

(なんだ、そうだったのか)

「それで、そのあたしに似てるとかいう女性とは、一体どうなったんですか？」

「俺の貯金口座が四桁になったあたりで、サヨナラってことになったよ。一種の結婚詐欺だな。

まあ、女性についてまたひとつ勉強になって良かったといえよよかったけどね」

「へえ……でもまあ、そういう経験も小説の肥やしとして生かして、あとになってみればそんなに悪い話でもなかったんじゃないかしら。久臣さんはなんとか文学大賞とか、そういうのに作品を送ったりはしないの？」

「ああ、若い頃はそんなこともしてたよ。同じ文学部の先輩に「君には素晴らしい才能がある！」とかおだてられてさ。でも、出版社に直接持ちこんだら、その編集者に「君の書いたものは鼻紙ほどの値打ちもない」って言われて終わりだった。まあ、現実なんてそんなものだってことだな」

「その編集者の頭のほうが、たぶんちょっとおかしかったんですよ」

外から帰ってきたレンが、腰を屈めるようにしてのれんをくぐり、あたしと久臣さんの間の座った。まるで、馬鹿女の雑菌から頭のいい久臣さんのことを盾として守るみたいだ。

「なんでしたっけ？『肉工場』を読んだその編集者に、「君はアカ（共産主義者）なのか？」って聞かれたんですよ」

「まあ、あの頃はそういう時代だったから……実際俺も、あの話を思いついたのは、マルクスの資本論を読んだからなんだ。それでうまく言い返せなくて、「鼻紙が駄目なら、ケツ拭きにでも使ってください」って言って、とぼとぼ帰ることにしたんだよ」

「ニーチェだって、書いたものがすぐ売れたってわけじゃないし。久臣さんの書いたものは、いつか必ず陽の目を見ると俺は信じてます。そしたら俺に本の挿絵を描かせてくれるって話、絶対忘れないでくださいよ」

温め直した八宝菜や中華スープを、いつものようにニコニコしながらミドリさんが差し出す。レンは「どうも」と言って早速箸を手にすると、よほどお腹がすいていたのか、ほとんどかきこむように八宝菜を食べていた。

「ねえ、ちょっとおに一さん」と、あたしはそんなレンの肘をつつくことにする。「あたしも読んだのよ、久臣さんの『肉工場』。あんたが読め読めってうるさいから」

「それで、あんたの頭で久臣さんの書いた高尚な小説の世界観が理解できたのか？」

「理解できたかどうかはイマイチ自信ないけど、とりあえず面白かったわよ。それで、あたしも結局『肉工場』で働くしかないんだと思ったから、来週の火曜から木曜日まで、労働に勤しむことにしたわ。短期のコールセンターの世論調査の仕事なんだけど」

「ふう〜ん。これまでデリバリーヘルスを利用したことがありますかとか、そんな変な世論調査じゃないだろうな？」

「違うわよっ。もっとちゃんとしたお堅い企業だってばっ。どうしてそう、あんたはいちいちあたしに突っかかってくるわけ！？」

久臣さんは壁の時計を見ると、そろそろ電車に乗り遅れると思ったのだろう、「ごちそうさま」と言って席を立つと、ブルーグレイの作業着を手にとり、玄関を出ていった。

「ねえ、ミドリさん。今だって結構あたし、久臣さんやミドリさんと楽しくお話してましたよね！？」

その話の腰を折ったのはあんたよ、というように、あたしは隣のレンのことを睨みつけてやった。

「え、ええ。そうよね……久臣さんがサクラちゃんのことを避けてるように見えたのは、久臣さんが昔、サクラちゃんに似た感じの女性にお金を騙しとられたからだって、そんな話をしてたの」

「ミドリさん、無理しなくていいですよ」と、ニュースでサッカーの試合結果を見ながらレンが言った。「こいつにとって楽しい話が、みんなにとっても楽しいとは限らないんですから」  
「わかったわよ、もうっ！！」

あたしはだんだん、悔し涙が盛り上がってきたので、大きな音をさせて階段を上がると、自分の部屋へ戻ることにした。

ほたるは今日も演劇の練習か彼氏とのデートのどちらかで、帰りが遅くなるだろう……何故あんなデブにたくさんの友達や彼氏がいて、あたしにはいないのだろう？とは言えない。

レンに言わせればそれはたぶん、あたしが「性格ブス」だからなのだという事はよくわかっている。

つきのうのことになるけれど、居間であたしがほたると何気なく並んでTVを見てると、ほたるの携帯が鳴った。

その時の会話で、ほたるが恋人の東郷氏をデュークと呼び、彼がほたるのことをニッキーと呼んでいるらしいことがわかるなり――あたしは思わずブツと吹きだしていた。

(デュークとニッキー？めっちゃ受けるんだけど！！)

でもその時、みんなより遅れて夕食を食べていたレンと目があい、あたしは一瞬凍りついた。

救いようのない、哀れな人間を軽蔑するような眼差し……口にだして言わなくても、何故あたしはその時笑ったのか、レンにはよくわかっていたのだ。

まあ、その時から今の夕食の時間になるまで、レンとは顔を合わせなかったから、奴は彼流にベルビュー荘の大切な住人を守るべく、あたしに報復したに違いない。その事はよくわかっている。

(ふんっ！！あんな奴、あたしだって大っ嫌い！！)

ベッドの上に突っ伏すと、絨毯の上に散らばるベルビュー新聞のいくつかが目に入ってくる……久臣さんの書いた『肉工場』がそうであったように、ベルビュー新聞の記事の中には、あたしがまだ読んでないものがたくさんある。

その中に、例の＜男と女の恋愛相談室＞の記事の残りもあり、あたしは法学部の学生であるR嬢が同じ女子寮のJ嬢にこんな相談事をしている回を見つけた。

### 『男と女の相談室～第76回～』

R嬢：「ねえ、Jちゃん。あたし、昔から何故かある特定の男子に嫌われる傾向にあるの……どうしてだと思う？」

J嬢：「あら、特定の男子ってどんな男の子？」

R嬢：「ようするに、スポーツは出来るんだけど、頭カラッポっていうタイプの筋肉男子。でもあたし、何故か昔からそういうスポーツマンタイプの男の人が好みなの。今片思いしてるのも

、そういうタイプの筋肉質の人で……でも、向こうはあたしのこと、「どうせ心の中では俺みたいな男のこと、馬鹿にしてるんだろ」っていうような態度なの。どうしたらいいと思う？」

J嬢：「そうねえ。ところでその人、何かの部に所属してたのするの？」

R嬢：「ラグビー部よ」

J嬢：「ラグビー部！！いざゆかん、愛の花園へってわけね」

R嬢：「茶化さないで、ちゃんと相談にのってよお」

J嬢：「ごめん、ごめん。そのラガーマンを落とすのは、実際そんなに難しくないわよ。たぶん向こうは硬派を気どってるか、ようするに女に免疫がないかのどっちかだから、積極的にセックスアピールを用いるべし！！」

R嬢：「セックスアピールって……そんなことして、尻軽の売多だと思われて、嫌われたらどうするの？」

J嬢：「大丈夫よ、あんた見た目、堅そうに見えるから、そのくらいで実はちょうどいいのよ」

セックスアピールという言葉のところで軽く受けると、あたしは少し元気が出てきた。

そうだ、よく考えてみたら、あたしがデュークとニッキーという名前のことで笑ったのも、そんなに罪深いことではない。

むしろ、たったそれだけのことで、何故レンに軽蔑の冷たい眼差しで見られなければならないというのか？

(あんなの、つい思わずちょっと笑っちゃったっていうだけじゃないの)

ほたるの恋人の東郷さんは、どう見てもルックスのほうは三枚目だった。でも天真爛漫として明るく、ほたるのことをお姫さまのように扱ってくれるという、そんな感じの人らしい。

そしてあたしは――R嬢じゃないけれど、自分の好きなタイプの男子には何故か嫌われる傾向にあるということを、今更ながら思いだしていた。

そう。あたしが昔から好きなのは、サワヤカ系のどこか清潔感のある男の子だった。スポーツが出来るとか勉強が出来るとか、そんなことはどうでもいい。むしろ、スポーツも勉強もどちらも出来なくていいくらいだ。さらには、夏の夜祭で柄の悪い連中に絡まれるも、喧嘩のほうも弱っちいため、速攻ボカスカやられるタイプであって構わない……ただ、そんな連中に立ち向かっていく僅かばかりの勇気と、サワヤカな清潔感さえあったら、あとのことはほとんどどうでもいい。

うまく説明できないけれど、レンはあたしの求めるこうした〈清潔なサワヤカ感〉を持っている男だった。

もちろんあたしの言っている清潔感というのは、毎日お風呂に入っているとか、食後に必ず歯を磨くとか、そういう意味の清潔感のことではない。なんて言ったらいいのだろう……肉体的には(何かの事情で)十日も風呂に入らず、衣服も下着も取り替えていないというのに――それでも心が清潔なため、その精神性が体からしみだしてしまうような感じ、とでも言えばいいだろうか。

まあ、男友達にそんな話をしたら「そんな男、この世に実在するか？」と笑われてしまいそうだけど、そんな男、実際にこの世に存在するのだ。とりあえず、わたし自身が認定する限りにおいては。

あたしはいつも、その手のタイプの男に出会うと、自分のような女が近づいてはいけないと思ひ、遠くからそっと見つめるだけになる……もちろん、ちょっとした偶然というか運命の悪戯(?)から、おつきあいしたということも、何度かある。

でもその場合は残念なことに、向こうは絶対にあたしのことを<結婚の対象>としては見なかった。

そして、今度はレンだ。もちろんあたしは奴と、ここベルビュー荘をでて「ふたりで暮らしたいな、うふっ」なんていうことを思っているわけではまったくない。でも、体の関係はないのに自分が好みだと思う男と、ひとつ屋根の下で暮らすことになったのなんて、これが生まれて初めての経験だった。

「あいつ、口にだしては言ってないけど、もしかしてすごく可愛い彼女がいたりするんじゃないでしょうね？」

『ゼウスとプロメテウス』を見にいった時、彼が劇団レリックのチケットを売ったという連中の中には――当然女性もいて、そのうちの何人かは、レンがほんの少し指を動かしただけで、速攻彼に張りついてきそうなタイプの女性がいたのを、あたしは思いだしていた。

「あ～あ。あいつの彼女がもし、テニスコートでパンチラタイプだったとしたら、ほんと、あたしとしてはがっかりだわ」

(いや、もしかしたらそのほうが、所詮あいつもただの男だったと思って、諦めがつくだろうか?)……あたしがベッドの上に寝転んで、足をぶらぶらさせながらベルビュー新聞の続きを読んでいると、強い風の音で誰かが帰ってきたのがわかった。

何分古い家屋なので、今日みたいな風の強い日には、玄関が少し開いただけでも、結構な風の力が二階の壁や廊下を走っていく。

「ただいま～っ!!」と明るい声が聞こえたところを見ると、どうやら帰ってきたのはほたるらしい。

時刻がまだ八時にもならないのを見ると、今日は劇の稽古はなかったようだ。でも、朝に「夕ごはんはいいですよん」とほたるは言っていたから、デューク東郷氏とデートして夕食だけ食べてきたのだろうか？

ドタドタというほたる特有の足音を響かせながら、彼女が階段を上がってくる……(あんなおデブちゃんが誰とどこで何を食べてようとあたしには関係ないんだけど)と、あたしはあらためて思った。それでも、隣に住む人間の動向というのは、自然どうしても気になってしまうものらしい。

いつものように、自分の部屋に荷物を置いてから、またドタドタと階段を下りていくかと思いきや――彼女は意外にも、その前にあたしの部屋のドアをノックしていた。

「ねえ、サクラさん。ちょっとお話があるんだけど」

「あら、何かしら？」と、あたしは意味もなく気どった声で応じていた。それというのも時々、

(本人は無意識なんだろうけど) ほたるが舞台上で喋っているような話し方をすることがよくあるからだ。

「あのね、最近サクラさん、ベルビュー新聞を読んでるでしょ。それで……」

そ〜っとドアを開きながら、あたしの機嫌が悪くないのを確認すると、ほたるはほっとしたように遠慮なく部屋へ足を踏み入れた。最初からあった備えつけの家具以外、自分のものはほとんどないあたしの7号室。まあ、掃除するのは楽でいいけど。

「うちの劇団の脚本書いてた人が、もう二足のわらじは履けないってことで、近々退団するんだ。それで、サクラさんに昔のベルビュー荘のことを劇として書いてもらえないかな〜なんて……」

「脚本！？あたしが！？」

驚きのあまり、あたしは足の裏でせんべいを潰してしまった。あたしは食堂にあるせんべいや他のお菓子なんかを、トイレへ行った帰りなんかにくすねることにしている。でも、最近ちょっとリスの頬袋みたいに溜めこみすぎていたようだ。

「こう言っちゃなんだけど、ほたる。あんた、頼む相手を間違ってるんじゃない？そういうことは、文才豊かな久臣さんにでも頼みなさいよ」

「久臣さんはダメよ」と、ほたるはベッドに座るあたしの隣に腰かけながら言った。ギシリ、と彼女の重い体重が片側にのしかかって軋る。「前にも同じこと、頼んだことあるんだ。でも久臣さんにはどんなに頼んでもオッケーしてもらえなかったの。本当は、久臣さんの書いた小説の中で舞台化したいものもあるんだけど……まあ、そんなわけでサクラさんに頼もうかなって思ったの」

「あのさ、ほたる」あたしはぼりぼりと髪の毛をかくと、ベッドの上で女らしくあぐらをかきながら言った。「そういう気持ち悪い友情ごっこみたいの、やめてもらえる？あんただって本当は心の中で、レンみたいにあたしのこと、いけ好かない女だって思ってるんでしょ？だったらいい子ぶらないで、それに相応しい態度をとったらいいのよ。それとも何？ろくに仕事もなくてごろごろしてるし、外で一緒に遊ぶような友達も彼氏もお金もないみたいだから、同情してくれてるってこと？」

いかにも傷ついたといったような、被害者ぶった顔をするかと思ったけれど、そこは女優というべきか、ほたるは意外にも毅然とした顔つきをしていた。

「うん、そうだね。でもあたし、直感的にこれはサクラさんにしか出来ないことだと思ったんだ。サクラさん、あんまり普段から小説とか、読んだりしないほうなんでしょ？脚本って、実はそんなに文学的な素養っていうか、難しいものは必要ないんだよね。もちろん、そういう手合いのものっていうか、そういう系統のものは世の中にたくさん存在してるけど……なんていうかなあ、うちくらいの弱小劇団にはむしろ変に知識のある脚本家とか演出家は必要ないわけ。ようするに、あたしがっていうか、あたしたちが欲しいのは、サクラさんみたいにまっさらな状態の人だったりするのよ」

「まっさらっていうことなら、うちの3号室に住んでる、ミズキくんでもいいんじゃない？あの子、将来何をしたらいいかわからなくて、さ迷いの日々を送ってるみたいだし」

「シーッ」と、ほたるはまた、どこか演劇調に口元に人差し指を立てている。「ベルビュー荘は

壁が薄いから、隣で話してることや上や下で会話してることは、意外と筒抜けなのよ。特にミズキくんは繊細だから……ええとね、サクラさん」ここでまた普通の音量に戻ってほたるは言った。「あたし、サクラさんとレンさんが普段食堂とか居間でしてる会話を聞いてて、思ったんだ。この人、面白いことを言う人だなあっていうか、会話にセンスのある人だなあって。脚本っていうのはようするに、小説みたいに細かい状況説明なんてチンタラする必要はなくて、なんといつてもこの登場人物の会話が命だとあたしは思ってるの。だから是非、この脚本にサクラさんに挑戦してもらえたらと思って！」

(――この子、マジで正気なんだろうか?)

あたしはそう思いつつも、何故か突然ちょっとだけまんざらでもない気持ちがこみ上げて、自分でも顔が赤くなるのがわかった。

実をいうと、あたしはTVでやってる全十回前後のドラマを批評するのが大好きだ。いつも、自分が脚本家ならそんな書き方はしないと、この男女関係にはリアリティがないとか、そんな批判ばかりしてドラマを見ている。そして実はずっと、行間の説明はどうでもいいんなら、セリフだけでもっと視聴率のとれるマシな物語を自分になら書けそうだと自惚れていたのである。

「ねえ、ほたる。あんたまさか、本当に冗談抜きに本気で、同情でもなんでもなく、その脚本をあたしに書いて欲しいって、あたしに書けるって、芯から思ってるの？」

「うん、もちろん!!」と、ほたるは即答した。「たぶんこんなことを言ったら、サクラさんは気分を害するだろうけど……あたし、サクラさんを見てると、もうひとりの自分を見てるような気持ちになるんだ。こんなデブと似てるところなんか、自分にはひとつもないってサクラさんは思うかもしれないけど……」

(なんだ、ちゃんとわかってるじゃないの)

あたしがそう思いながら頷いていると、ほたるは赤いリュック型の鞆の中から、札入れを取りだしている。そしてその中から写真を一枚抜いて、それをあたしに見せた。

「あら、可愛い子ね。もしかしてあんたの隠し子かなんか？」

「まさか。これはあたしが十歳頃の写真。この頃子役で午後からやってるTVドラマに出演してたんだ。腹違いの美しい姉妹が、やがてひとりの男を巡って憎みあうっていう陳腐なメロドラマだったんだけど……その意地悪な妹の子供時代の役。でもその後、だんだんぶくぶく太ってきて、今みたいな状態になったの。ただぼーっと突っ立ってるだけで、「どけ!このデブ!」って言われたりしたことは、これまで数えきれないくらいたくさんあるよ。でもあたし、痩せる努力をしないことの言い訳じゃないけど、ありのままの自分に十分満足してるんだ。それでも、たま〜にこう思ったりすることがあるのよね。あのまま突然太りだすことなく、美少女路線で成長してたら、あたしもサクラさんみたいに性格の悪い嫌な人になってたのかなあって……」

「あんたもなかなか、言うようになってきたじゃないの」

あたしは同情ではなく、ほたるとの間に対等な友情が芽生えつつあるのを感じて、彼女のボンレスハムのような肩を、思いきり叩いてやった。

「たぶん、レンさんとサクラさんが毎日やりあってるのを聞いてて、口の悪いのが移ってきたのかもね。もちろん、一から百まで完璧に脚本を書いてっていうんじゃないって、基本的な設定とか

アウトライン、登場人物とかは、あたしも一緒に考えて決めたいと思うんだ。あとはミドリさんや久臣さんの許可なんかも得て、仕上げられたらいいなって思うんだけど、どう？」

「うん、わかった。そういうことなら乗ってもいい……それにしてもほたる、あんたもったいないわね。デブの中には痩せることさえ出来たら美人になれるって勘違いしてるのが多いけど、あんたの小さい頃の写真を見る限り、ほたるって痩せたら美人になるっていうタイプのデブなんじゃないの？」

「やだあ～。そんなに褒められても……」

両頬を両手で挟むと、ほたるはもじもじと照れた振りをしている。

「その仕種、やめなさいってば。マジきもいから。それより、そうと決まったらあたし、ベルビュー新聞の読んでない記事のところに全部目を通しておかなきゃ。主人公は小山内氏かミドリさんあたりで、脇役が大谷嵐氏とか羽柴亮太郎氏っていったところでいいのよね？古き良き時代の青春ものっていう路線と、彼らの時代にあったことを完全に現代風にアレンジするっていうパターンと二通りあると思うけど、ほたるはどうするのがいいと思う？」

「そうね。まあ、最初はどちらとは決めずに、主要登場人物のキャラクターと起承転結で大体どういう事件が順に起きるかを決めていったほうがいいと思うの。一応あたしが思ったのは、これは恋愛の絡んだ青春コメディ。そこだけは譲れないって思ってる」

「オッケ。了解。実際、あたしも同意見よ」

まるで、初めて意見があったとでもいうように――あたしはほたると顔と顔を見合わせて笑った。

そしてこのあと、夜明け近くまで「あーでもないこーでもない」という脚本に関する案が練られたあと、あたしはほたると自分の部屋のベッドで、気づいたら一緒に寝ていた。

こんなデブとシングルベッドで一緒に眠れるだなんて、それだけあたしが痩せてるって証拠ね！と起き抜けに言った時、ほたるは容赦なく象のようなお尻であたしを床に突き飛ばしていた……なんにしてもこれが、あたしに生まれて初めて女友達の出来た瞬間だったかもしれない。



ほたと共同作業する予定だった『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』という舞台の脚本は、いまや信じられないことに、あの超根暗と思われていた3号室の大谷瑞希くんをも巻きこんで、順調に進められていった。

あたしはほたるがいない昼間でも、脚本を書く作業は大体、リビングで行うことにしている。

ミドリさんに「このセリフどう思う？」とか、「小山内氏はこういう行動をとると思う？」とか、細かいことをいちいち聞いて確認をとるためだ。時々、久臣さんがいる時には、彼にも似たような質問をする。

でも彼らは不思議と、実際に当時を体験した人たちだというのに――あたしやほたるの意見に対して、「流石にそれはないんじゃないかしら」といったように反論することはほとんどなかった。むしろ久臣さんなどは、ミドリさんも知らない隠れた裏話をこっそり教えてくれて、彼の話してくれたことは脚本を書く上でおおいに参考になったといっってよい。

そしてあたしとほたるがプロローグからエピローグまで、大体のところ起きる事件を時系列順に並べ終わり、舞台の出だしをどうするかとソファの上で悩んでいると、ミズキくんがのれんの向こう側で、うろうろしている姿があたしの目に留まった。

「ちょっと、そこのボク。うろうろしてないで、こっちに来たら？ミドリさんがキミの好きな抹茶のあんみつパフェを作ってくれたから――おやつにそれを部屋まで持って行って食べたらいいんじゃないかしらね」

抹茶のあんみつパフェの誘惑に負けたのかどうか、ミズキくんは藍染めののれんをくぐって、居間に入ってきた。

何か分厚い原稿のようなものを、震える両手に握りしめている。

「……これ、見てもらってもいいですか？」

嫌だと言われたら、もう二度と立ち直れないといったような気迫を漲らせて、ミズキくんはそれをあたしとほたるに差し出した。

1ページ目の表紙の下のほうに、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』というタイトルが手書きで描かれている。

「ねえ、ちょっとそれって……！！」

続く五分くらいの間、あたしとほたるは息をするのも忘れたような感じで、夢中になってミズキくんが途中まで描いた漫画のネームを読んでいった。

「おもしろい！！っていうか、サクラ。ミズキくんの考えた、この最初のシーンすごくよくない？「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！！」っていうの」

「まあ、舞台でやったら、受けるかシーンとなるかはわからないけど、あたしも賛成よ。っていうか、ミズキくんってもしかしてずっと、部屋に閉じこもって漫画描いてたの？だったらそういうことはもっと早くに言いなさいよね！！レンなんかミズキくんが自殺するんじゃないかって勘違いしてたくらいなんだから」

「す、すみません。ご心配おかけして……」 ずり落ちた眼鏡を直すと、ミズキくんはどこか落ち

着かなげにもじもじしている。「その、決して盗み聞きするつもりじゃなかったんですけど、サクラさんとほたるさんの話を聞いていたら――なんかこう、僕もそのお話を漫画にしてみたいなと思って。でも流石に途中でネームに詰まっちゃったから、サクラさんとほたるさんの仲間に入れてもらえたらな、なんて……」

あたしはほたるとほぼ同時に顔を見合わせた。ミズキくんはびっくりするくらい絵がうまい。この才能を活かそうとしない愚かな人間など、この世に存在するものだろうか？

答えは断じて否だ。

「モチのロンよ！！」

あたしは強引にミズキくんの手を引っ張ると、彼のことを自分とほたるの間に座らせた。

たぶん、内気な彼としては居づらいポジションだろうけど、我慢してもらうしかない。何しろ、もっと早くにミズキくんが仲間になってくれていたら――あたしとほたるは出だしにこんなに悩まなくてもすんだのだから。

「じゃあ次、「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！！」のあと、そんな小山内氏……もとい、そんなデューク・サイトウのことを、2号室の住人、羽柴リョウが嘲笑うわけね。「なーにが「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！！」だ」っていう感じで……そして1号室の住人、＜ベルビュー荘＞唯一の常識人を自負する大谷アラシも、彼が自分のことを「僕のことにはデューク・サイトウと呼びたまえ！」と言ったのを聞いて呆気にとられる。「何がデューク、あなたの一体どこが公爵様だっていうんですか」……うんうん、それでそれで？」

デューク・サイトウというのは、あたしとほたるが苦心して考えだした名前だ。小山内氏の名前は出来る限りインパクトのあるものにしたい。でも流石にデューク東郷というのでは、ゴルゴ13のパクリになる。そこであたしが「デュークってそもそも、どういう意味？ゴルゴって日本人じゃないの？」と聞いてみたところ、ほたるは「よくわかんないけど、デュークって公爵っていう意味なんじゃない？もっともゴルゴはそういう意味で名乗ってるんじゃないと思うけど」……といったような会話の流れから、デュークなんとかという名前にしようということになり、デューク・コンドウ（なんか間抜けな感じ）、デューク・エンドウ（売れないコメディアンみたい）、デューク・ナイトウ（ドサまわりをしてる歌手？）と悩んだ末に、デューク・サイトウになったのだった。

ちなみに、この会話の流れを聞いていた斉藤さんは、「まあ、いいんじゃないか？」とゲラゲラ笑っていた。久臣さんはああ見えて、結構受け上戸らしい。

なんにしても、こうした一連の会話をミズキくんが実はこっそり聞いていたとは驚きだった。「次にベルビュー荘のマドンナであるミドリさんが登場して、と……やった、ミドリさん可愛い～。もしかしてこれ、今流行りのメイドキャラってやつ？」

「その、僕が描いてるのはやっぱり、現実の舞台ってわけじゃないので……多少はその、僕の好みも反映されると言いますか……」

隣のミズキくんが「そこだけは絶対譲れません」というようにキリッとした顔で眼鏡を上げたので、あたしは思わず笑ってしまった。

ミドリさんが普段、何かと甲斐甲斐しく面倒を見てくれることに対して、彼の反応というのは

実に乏しいものだったけれど——そのことに対して、何も感じていないわけじゃないっていうことが、今のミズキくんの表情であたしにもよくわかったから。

「ふう～ん。なるほど！今ミズキくんが言ったみたいに、確かに舞台と漫画じゃ表現の形態が違うと思うから、ミズキくんはミズキくんが自由に描いてもらうのが一番だって、そう思わない、ほたる？」

「そうよね。一応これから三人で話を詰めて行って……で、ミズキくんは漫画的に「そこはオイシイ！」っていうところをぎゅっと凝縮したものをアレンジするのがいいっていうのかな。かわりにあたしたちもミズキくんからアイデアをもらって、「そこいただき！」ってところを脚本に反映させてもらうから。もちろん、面白くなかったら面白くないって、駄目だしもさせてもらうけどね」

「そうよ～。あたしよりも意外にほたるのが、そこらへんの鑑識眼が厳しいんだから！でも逆に、ほたるがオッケーを出したとしたら、ミズキくんも漫画をすごく面白いものに出来ると思うわよ。そしたら、プロとして漫画家デビュー出来ちゃうかも！」

「そんな……僕はまだ、絵とか表現方法も、全然未熟だし……」

一応そう謙遜しつつも、彼が実は自分の絵の技量に並々ならぬ自信を持っているらしいことは、あたしにもほたるにもよくわかっていた。また逆にそうでなければ、絶対に自分の描いたものを人に見せようなんて思わなかったに違いない。

「まったく、謙遜しちゃって！まあ、それはそれとして、なんにしても話の続きを考えなきゃね。ちょっとおやつでも食べて、リフレッシュしながら第一幕から順に考えていきましょうよ」

あたしが上機嫌に鼻歌を歌いながら、三時のおやつを三人分、冷蔵庫から取りだしているところ——ミドリさんとふたりで買いだしに出ていたレンが戻ってきた。

大袈裟に驚くようなことはしないけれど、それでもミドリさんとレンは、居間のソファにミズキくんがちんまり座っているのを見て、びっくりしたような顔をしていた。

テーブルの上の漫画原稿をレンが目敏く見やると、ミズキくんは慌てたようにそれを両手でかき集めている。

「こ、こんなのは別に、ちょっと落書きしてみただけのものっていうか……」

「いや、凄いよ。ミズキ」テーブルから一枚こぼれ落ちた原稿を拾い上げて、レンが言った。「おまえはおまえで、とっくに自分のしたいことってのがあったんだな。それならそうと、もっと早くに言ってくれたら良かったのに」

「す、すみません……」

「いや、べつに俺にあやまるような必要はないけどさ」

原稿を手渡すのと同時に、まるで「がんばれよ」って言うみたいにレンがミズキくんの肩に手を置いた。

そしてお盆に抹茶あんみつパフェを三つのせたあたしと目があうところ——レンは買い物袋を食堂のテーブルまで運んでいき、そのまま特に何も言わず、またすぐに玄関を出ていった。

最近のレンは、何故なのかよくわからないけれど、元気がない。

奴と最後に喧嘩らしきものをしたのは、もう何日も前のことだった。もしかしたらミドリさんに何か言われたのだろうか、とも思う。

何しろミドリさんという人は、実は物凄いフェミニストで、仮にわたしのようなビッチでも、女性は女性であるというだけで素晴らしいと考えているような人だった。どうもこの思想を彼女に植えつけたのは、＜ベルビュー新聞＞にも名前のでてくるJ嬢こと須藤潤子嬢で、彼女は女性解放運動のリーダー、グロリア・スタイネムに憧れているといったタイプの女性であつたらしい。

この日、あたしとほたとミズキくんは、夜の十一時半頃までかかって、第二幕の途中までストーリーの流れと劇中の人物のセリフを考えると――ミドリさんが夜食として作ってくれた梅と昆布を散らしたおにぎりを食べて、それぞれの部屋へ戻ることにした。何しろ日曜のことだったので、あたしとミズキくんはともかく、ほたるには明日からまた郵便局での通常業務があつたためだ。

それに、ベルビュー荘の舞台のシナリオを書いているわたしたちが、ベルビュー荘での暗黙のルール――居住人は二十三時三十分くらいには眠るべしとの規則を破るのはどうかという気がしたせいでもある。

といっても多分、夢に燃えてるミズキくんは部屋に戻ってから漫画の続きを描くのだろうし、それはあたしにしても同じだった。エピローグの、小山内氏ことデューク・サイトウがベルビュー荘を去っていくシーンに至るまで、あたしの頭の中では数えきれほどたくさんのセリフが渦を巻いていて、その勢いと興奮がまったく収まりそうになかったからだ。

ベッドに横になってからも、第三幕のあの場面はこうしようとか、第四幕の「女子寮とターゲット」では、舞台のセットにかかる費用をなるべく低く抑えるためにどうしたらいいだろうとか、そんなことばかりが頭をよぎって離れない。

何よりもまさか、演劇の脚本を書くということが、こんなにも面白くて刺激のことだったなんて、あたしは考えてみたこともなかった。男とデートしてただダラダラと過ごし、してもしなくてもいいようなセックスをして不満足な気持ちで眠りに着くより――よっぽと有意義な休日だったと、あたしは本当にそう思っていた。

そして、あたしが物語のクライマックスでデューク・サイトウがこう言うのはどうだろうとか、まるで過去のベルビュー荘の住人と友達になったみたいに、ああでもなこうでもないと考えていた時……ふと、人の話声が階下から聞こえてきたのだった。

久臣さんは例によって印刷所で夜勤だし、レンは出かけてからまだ帰ってきていないはずだ。

もしかして、ミドリさんが電話で誰かと話しているのだろうかと思ったあたしは、なんとなく下におりてみようという気になった。何しろ、目がギンギンに冴え渡っていて眠れない。その事情を説明して、あたしは寝酒に一杯だけ久臣さんのウィスキーを飲ませてほしいとミドリさんにせがもうと思った。

(久臣さんは器が大きいというか、ケツの穴の大きな人だから、サントリーの角瓶が少しくらい減ってても、なんとも思わないわよね、たぶん)

そんなことを思いつつ、あたしが階段を下りていった時、ミドリさんが電話で話している相手が誰なのか、その話の内容ですぐにわかった。自然、途中で足がとまり、その場に座りこむよう

な格好になる。

「だって、あなたから預かった大切な甥御さんなのよ。それなのに、もしものことでもあったら……ええ、もちろん久臣さんからそのことは聞いてたけど。でもミズキくんがあんなに絵がうまいだなんて、嵐さん、言わなかったじゃないの」

ミドリさんは何故か泣いているらしく、時々鼻をすするような音が聞こえる。

「うん、そうなの。舞台のタイトルが『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』ってあって、あなたやわたしも登場人物として出てくるのよ」泣いていながらも、ここでミドリさんは明るく笑った。「まさか、ミズキくんまであんなにあたしたちの若い頃のことに興味を持ってくれるとは、知らなかったわ。なんにしても、あの子はもう大丈夫。新さんや礼子さんにはまだ、話すのは早すぎると思うけど……でも、どうしてるかって聞かれたら、一緒に住んでる他の人たちと協調して元気にやってるって言うておいて。それじゃあ、また」

ミドリさんが携帯を切り、椅子から立ち上がったらしい気配を感じると、あたしは足音を忍ばせつつ、急いで階段を駆け上がっていった。

どうしてなのかはわからないけれど、胸がものすごくドキドキする。

ようするに電話で話している時のミドリさんの声というのは、普段あたしやほたるやレン、久臣さんを相手にしている時とは、まるで違っていた。お母さんとしての声ではなく、女の人としての声、というか。

(嵐さん、か)

あんなふうに、かつて夫だった人の名前を呼べるのなら、今からでも夫婦としてやり直せるのではないかと、あたしはそんな気がしていた。もちろん、そんなのはただの赤の他人の詮索だっているのは、わかっているつもりだけれど……そして、ミドリさんが何故泣いていたのかも、あたしはなんとなくわかるような気がした。

あたしはまだベルビュー荘へきて日が浅いから（まだ二か月にもならない）、一年以上もの間部屋からでてこないミズキくんのことをただ見守り続けるっていうのがどんなことかっていうのは、正直よくわからない。でも、そんな彼が部屋から出てきて自己主張をし、あたしやほたるを相手に熱弁を振るうことさえある姿というのは――あたしには想像できないくらい、ミドリさんにとっては嬉しいことだったのだろう。

(この舞台は、絶対に成功させてみせる……)

あたしは、最初から部屋に備えつけの机に向かうと、ほたるからもらった原稿用紙をとりだして、第三幕から第六幕まで大まかなシーンのセリフを何かに憑かれたように一気に書きだしていった。

もしあたしの書く脚本のアイデアがつまらないものなら――自然、ミズキくんの漫画も途中までは面白いのに、最後のほうは尻すぼみになって終わってしまうかもしれない。それより、わたしが先に「これでもか！」というくらい完璧なものを提供して、さらにミズキくんが自分でアレンジを加え、より面白いものにしていくっていうくらいのほうが、絶対にいい。

こうしてあたしはこの夜、その後一度も経験したことのない神がかった集中力を発揮して、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』の舞台脚本を、大筋の部分だけではあるけれど、夜明け

までかかって大体のところ仕上げていた。

たぶん、あれを書いたのは決してあたし本人ではなくて、＜ベルビュー荘自身＞があたしという人間を通して書かせてくれた物語なんじゃないかと、今もあたしはそんな気がしてならない。

『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』の脚本が完成すると、ほたるは早速とばかり、あたしを演出家と呼ばれる人に会わせた。

一応、舞台監督らしき人も存在するらしいのだが、その人はいわゆる<名誉>監督という人で、過去の功績からそう呼ばれているものの、今は社会人としての生活のほうの方が忙しく、劇の全体をとり仕切っているのは、演出家の荒川雅矢という人だった。

初めての打ち合わせの場所が焼き鳥屋で、あたしは何故かその後、この焼き鳥屋で四か月くらいバイトをするはめになった……この荒川氏、いわゆる「ユー、やっちゃいなよ！」タイプというのか、あたしが今働いてない・金に困っていると知って、「ここの焼き鳥屋で働いちゃいなよ！」とばかり、勝手に知りあいらしい店主と話をまとめてしまったのだ。

ちなみに、荒川氏のこのスタイルは舞台の稽古でも存分に発揮されており、彼は基本的に人の話をあまり聞いていない。

そして劇団の人たちには存分に機会を与えることで知られているらしい。ちなみに舞台稽古での彼の口癖は「ユーたち素晴らしいよ！」とか「ユーたちにはまったく失望させられたよ！」とか、そんな感じ……もじゃもじゃの髪に口ひげを蓄えた彼は、とてもあたしと同じ二十八歳には見えない。ウェブデザイナーとして勤務する会社が彼にはあるらしいけど、正直、よくクビにならないなど不思議な気さえする。

「これを書いたのが初めての脚本だってほたるから聞いたわよ！ユー、実は天才なんじゃない？」

しかも、話し方がどことなくカマッぽいため、褒められても馬鹿にされてるように感じるというか、全然嬉しい気持ちがこみ上げてこない。

「それで、どうでしょう？直しを入れたり、現場の判断で多少変更があるのは仕方ないと思うんですけど……やっぱり、わたしにも譲れない一線があるので……」

「ノープロブレム！ノープロブレム！ユーの脚本はパーペキよ。全然問題ナッシングー！」

しきりに親指を突き出す荒川氏に向かって、（むしろ問題なのは、おまえの髪型と話し方のほうだ）と言ってやりたい気もしたけど、隣でほたるが「落ち着いて」というように何度も目配せしてきたので、ぐっと堪えた。

何しろ、あたしの心に舞台への関心というか、いわゆる芸術への情熱のともるきっかけとなったのが、『ゼウスとプロメテウス』という作品だったといっている。あの作品のラスト、人間たちがキャンプファイヤーのような炎を囲って不気味に踊り狂って終わるというシーンは、荒川氏の考えだしたものだという。最初、脚本を書いた渡邊怜治さんは（二足のわらじを履けないので退団する予定というのが彼）、人間たちが希望という名の明るい炎を囲うイメージを想定していたらしい。そして、劇団員のほぼ全員が彼の案に賛同していたのだけれど——唯一、演出家である荒川氏が「ユーたちはなんにもわかっちゃいないわ！」と言って大反対したのだという。

その他、ポスターやチケットのデザインを手がけているのも荒川氏ということで、あたしは赤と黒の二色刷りで描かれた、インパクトのあるポスターに感服していたので——正直、ほたる

が「ちょっと変わった人だけど、大目に見てね」と言っているのを聞いた時も、まさかこんな「かなりの」変人を紹介されることになるとは、まったく想像していなかった。

なんにしても、つくねや手羽先をくちやくちや食べながらビールを飲む荒川氏は、「脚本のほうはパーペキだから、何も話すことなんてないわ」と言い、その日の打ち合わせらしきものはもっぱら、彼の芸術論を一方的に聞く会といったような感じで終了した。

そして帰る間際、レジのところに「アルバイト募集！」の張り紙があるのを見て一一何を思ったのか突然「店長を呼んでちょうだい」などと言いだしたのだ。ここの焼鳥店は昔から劇団員たちが常連として通っているらしく、店長とも顔なじみなのだという。でもまさか一言の相談もなしに、「この子、生活に困ってるから明日から雇ったげて！」などと言い出されるとは、思ってもみなかった。

「え、ちょっと、荒川さん……っ！！」

「あ、でも時給八百五十円っていうのは、ちょっと安いわね。百円アップして、九百五十円ってのはどう？この子、ビッチな見かけのわりに、案外一生懸命働くわよ」

「九百五十円かあ。まあ、今うちも不景気だからな。九百円なら手を打ってもいいよ」と、人の良さが顔に滲みでている感じの後藤店長。

「いいわ、わかったわ、この交渉上手さん！じゃあ、明日からよろしくね！」

店長の後藤さんもたぶん、ただの酔っ払ったオカマの戯言としか思っていないだろうとあたりは思ったのだけれど一一残念ながらそうではなく、彼はその場で＜アルバイト募集＞の張り紙をはがすと、「明日、夕方の五時前には来てくれ」と真顔で言った。

よくわからないけれど、何か断れない雰囲気だと思ったあたりは、次の日から紺色の作務衣みたいな制服を着て、「いらっしゃいませー！」と元気に明るく『肉工場』の片棒を担ぐことになったというわけだ。

ところで、劇団レリックに所属している団員たちは、大道具や小道具、音響の係なども含めて、総勢約四十五名ほどといったところ。

『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』のオーディションには、＜名誉＞監督の霧島幸太郎さんと演出家の荒川雅矢氏、そしてあたしの三人で当たることになったのだけれど一一正直いってあたりは、男性18名、女性21名全員の演技を見ていて、荒川氏ではないけれど「ユーたちにはまったく失望させられたよ！」とでも叫びたい気持ちだった。

もちろん、決して下手というわけではない。でもなんて言ったらいいのか……いわゆるスター性のある人物が、劇団レリックにはほとんどいないのだ。いるとしたらたぶん、女性の中ではほたるが唯一光るものというか、特別な存在感を放っていたといっているかもしれない。

（あれで太ってさえいなければ）と、あたりはメモ帳にそれぞれの演技の点数や役への適性について書きこみながら思った。（ヒロインのミドリこと、ユリの役を十分やれると思うんだけど）

やっぱり、演劇の世界ではどうしても容姿というものが一番大切になってくる。男性キャストも、主役のデューク・サイトウの役を任せられそうな人物がひとりとして存在しない。ギリで容認できるのは演技力と総合してやはり東郷氏だったけれど、あたりの中の小山内氏のイメージ



とは、彼はまったく合っていなかった。

(まあ結局、これが弱小劇団の実力ってということなのよね)

劇団レリック内の雰囲気というのは、言ってみればまあ、高校か大学の演劇サークルの延長線上にあるものといった感じだった。みな和気あいあいとして仲が良く、誰かを蹴落としてでも上へ行こうとか、そうした野心とはまったく無縁だったとっていい。強みは団結力があることもかもしれないけれど、そのかわり飛び抜けた才能を持った人材に乏しいのが欠点だ。

演出家の荒川氏はよく「ユーたち、お互いにライバル心ってものをもっと持ちなさいよ！」と発破をかけてるらしいけど、団員たちの間にあるぬるま湯関係にさして変化は見られていないらしい。

(演技力をもし抜きにしてただ容姿で選ぶとしたら)と、あたしは考えた。(ヒロインのユリ役は三枝友紀さんかしらね。あと、デューク・サイトウは鈴木一明くん.....羽柴リョウは一応二枚目っていう設定だけど、三枚目の東郷氏がやっても違和感はない。でもこの場合、演技力的に東郷氏が鈴木くんを食っちゃう感じになるっていうのが、なんとも.....)

劇団レリック内では、オーディションのあとで配役が決まると、更衣室に荒川氏が顔をだし「ユーとユーとユー、こっちへ来て！」というように呼ぶらしいが、この日のオーディションのあと、彼に名前を呼ばれた人物はとりあえず、三枝友紀とほたるのふたりだけだけだった。

もちろんこれは、霧島監督と荒川氏、それからあたしの三人で話し合っただけのことだ。

「ハッキリ言って、ユキ、あんたは容姿は可愛いけど、舞台では存在感や華やかさに欠けるの。そしてほたる、あんたはでかい図体と声量のお陰で、存在感だけはあるわ.....あんたたちを足して二で割ったらちょうどヒロインのユリになれるっていうのが、監督と脚本家の川上さん、そしてあたしの結論なわけ。それで、ほたる」

ぴっちぴちのレオタード姿のほたるは、正直いって笑わないでいるのが困難としか言いようがないけれど、本人がそれをネタにしているので、まあ問題は無いだろう。逆に小柄なユキさんは、リスのような可愛らしい顔をして、隣の大きな<sup>ほたる</sup>熊を気遣うような目で見ている。たぶん、仲良しこよしの熊に、何か残酷な決定が告げられなければいいけれどと、そんなふうに思っていたのかもしれない。

「あんた、今体重いくつよ？女小錦みたいに、ブリブリ太っちゃって！あたし、いつもあんたに言ってるわよね？痩せればプロの女優にだってなれるかもしれないのに、あんたは自分から機会を逃してるんだって.....そこで、監督と川上さんと話しあって決めたんだけど、ヒロインの笹谷ユリ役は、ユキとほたるのダブルキャストでいくわ。ほたるがもし、開演予定の四か月後までに痩せられればよし、もし痩せられなければ、主役はユキにやってもらう。いいわね？」

「そんな.....」

ほたるが何に抗議したいのかは、彼女の性格を知っているあたしにも霧島監督にも荒川氏にも、よくわかってた。

それはもし仮に自分が痩せられたとしたら、必死に主役のセリフを覚えたユキは一体どうなるのかということだ。

「あんだ、人の心配なんかしてる暇ないわよ、ほたる。ユキには主役のユリとユリに同性愛的な気持ちを持って、藤堂ジュンの役をふたつ同時にやってもらうわ。万一、あんだが痩せられた場合、ジュンの役はユキに任せる。そしてほたるが痩せられなかった場合のことを考えて、ジュンの役は薫にも稽古でやってもらうことにするわ。つまり、最終的に誰かが役からあぶれるっていうことね……わかった？」

はい、という暗い返事がふたつ返ってくるのを見て、霧島監督の顔が明るく輝くのを、あたしは見逃さなかった。

大手の会社に勤めているという彼と、あたしが会うのは今日が初めてだったけれど——ほたるから聞いた話によれば、彼は人の不幸が大好きなスパルタ・サドだという話だった。

いつでも、誰かが幸せな結婚をしたとかいう話より、女に騙されて三十万損をしたとか、そういう話に喜びを感じるタイプの人らしい。本人は当時劇団で一番の美人と評判だった女性とちゃっかり結婚したらしいけど、そんな自分のことはともかくとして、人の不幸話にはよだれを垂らして飛びつく人だという話だった。

「さてと、ヒロインのユリはこれでいいとして」

カルティエの時計に目をやりながら、霧島さんは言った。

彼はおしゃれというものに相当気を使う人らしく、わたしの見たところ、ネイビーブルーのシャツと黒のズボンはそれぞれ、カルバン・クラインだった。あと、ベルトと靴のブランドはグッチだ。

「他に一番重要なのはデューク・サイトウの役を誰にするかっていうことだな。うちの劇団の中じゃあ、一番適任なのは I t ' s m e、オ・レといったところだが、残念ながら俺は仕事を休んでまで演劇には打ちこめない。でもまあ、他の劇団の知ってる連中の中に、心当たりの奴がいるよ。べつに性格が劇中のサイトウに似てるってわけじゃないんだが、ルックスがある程度イケてて役のイメージにもあっており、演技力もズバ抜けているっていったら、俺の中ではあいつしかいない。だから、デューク・サイトウについては任せておいてくれ」

じゃあ、そろそろ娘が眠る時間だからと言い残し、霧島さんはスーツの上着とカバンを手にして去っていった。

ちなみに、劇団レリックは今は使われなくなった小学校の体育館を借りて、いつも舞台の稽古をしている。他にもこの体育館は、社会人のアマチュアサークルがそれぞれ曜日を決めて利用しており、レリックが使用できるのは火曜と木曜と土曜日の週三回となっている。

まあ、そんなわけでデューク・サイトウの配役については霧島監督に一任することにし——あたしは他の劇団員と話をしがてら、モップで体育館を掃除してからほたると一緒に帰ってきたというわけだ。

ほたるが痩せるために、あたしは特別なダイエット・メニューを組むことにした。

現在の体重が八十七キロで、そこから三十キロ以上も瘠せるだなんて――わたしにしても、夢のような話だとしか思えない。

あたしは彼女ひとりにダイエットの苦しみを押しつけるのもどうかという気がしたので、朝は早起きしてランニングにつきあい、また時間のある時にはスポーツクラブで一緒に泳ぐことにした。他にベルビュー荘の居間でDVDを見ながらのエクササイズにもつきあったし、食事のほうも、彼女の前では絶対に甘いものを食べるのを避けることにした。

その甲斐あってか、徐々にほたるの体重は落ちはじめていたけれど……どうしてもある時点で戻ってしまう。あたしは毎日つけているほたるの体重管理表のグラフを見て、たぶん彼女がどこかでストレスからやけ食いをしていると確信していた。

でも、そのことでほたるを責めるつもりにもなれない。たぶん、劇団員たちに影でスパルタ・サドと呼ばれる霧島さんか、荒川氏のどちらかだったらこんな時、彼女に厳しくこう言ったかもしれない。「主役のユリの役をトンビに油揚げよろしく、誰かにとられてもいいの（か）！？」とでも。

もちろん、ほたるは仮に仲のいい友達のユキさんにでも、今回の笹谷ユリ役を譲るつもりはないのだ。

『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』は、あたしだけでなくほたるのアイディアもたくさん詰まった、彼女にとってもとても思い入れのある作品だった。その劇でヒロインをやれる、そのためならなんだってやってみせる、そう言ってほたるは燃えていた。でも人間、長い間慣れ親しんだ贅肉と、そう簡単に縁を切れたりはしないものらしい。

ダイエットをはじめてから一ヶ月後、ほたるは罪悪感の極みからか、とうとうあたしに自分から懺悔していた。

本当は職場の休み時間にこれでもかというくらい買い食いしていること、でもそうでもしないと働いている最中に時々、気が遠くなって計算を間違ってしまうのではないかと怖れていること……。

「自分がこんなに浅ましい、体だけじゃなく心にも醜い脂肪のついた人間だなんて、思ってもみなかった。ほんと、恥かしい」

ほたるが泣きながらそう告白するのを聞くと、わたし自身は何かもう、ほたるはそのままで十分素晴らしいのだから、ありのままで体当たりにユリの役をやったら？と、喉まで言葉が出掛かってしまうほどだった。

そのことを焼き鳥屋に客としてやってきた荒川氏に相談してみると、彼は「心を鬼にしなきゃダメなのよ、サクラちゃん！」と言って、顔を真っ赤にして怒りだした。

「あんた、ビッチな見かけのわりに、随分余計な仏心を持ってるのね。一応言っておくけど、あたしもコウちゃんも、ほたるが痩せない限りは絶対ヒロインとして認めないわよ。もしあんたが下手な同情心でなしに、芯からほたるのことを思うなら、崖から子を追い落とす親熊の如く、ほ

たるを突き落とすのよ！そうすればほたるは、今は泣いても、あとから絶対ユーに感謝するようになるはずよ！」

（そんなものかしらねえ）……深夜の二時に店ののれんを下ろし、同じアルバイト二名と手早く掃除を済ませると、あたしは店長から初めてのお給料を受けとった。@900×8h×14日=100,800円。それが週三回<ピヨっと鶏まる！>で働いている、あたしの一月分のお給料だった。

もちろん、キャバ嬢で働いていた頃の給料に比べたら、スズメの涙とは言わないけれど、ニワトリの涙と言いたいところかもしれない。しかも、髪の毛まで毎回焼鳥くさくなり、足を棒にして働いた結果がたったのこれだけ？と思わなくもない。

でも、これが『肉工場』のトリックの実態なのだと、あたしは勝手にひとりで納得していた。

ようするに、久臣さんの論理としては――鶏が<商品>として人の口元へ運ばれるまでに、人間よりもニワトリのほうが、非人間的（非ニワトリ的？）な扱いを受けて血の犠牲を払った以上は、人間も同じように生命に敬意を払い、労働という代価と犠牲を支払うことから、免れることは決して出来ないということなのだろう。

まあ、正直わたし自身はそんな小難しい哲学的なことはどうでもよく、この日もまた清々しい爽快感とともに、<ピヨっと鶏まる！>の勝手口から外へ出ていた。自転車を三十分ほど漕ぎ、あのキツイ坂道をのぼりきる頃には、夜明けの光が街を照らしはじめている……なんていうことも、珍しくない。

そしてあたしはベルビュー荘へ戻り、ミドリさんが用意しておいてくれた食事を食べ、それから四時頃にほたるを起こしに階段を上っていった。

例によって彼女の寝覚めは悪かったけれど、荒川氏の「心を鬼にするのよ、サクラちゃん！」という言葉を思いだし、あたしはほたるの象のようなお尻を蹴飛ばすことにした。

「ほら、こちとら仕事明けで疲れてるけど、心優しくあんたにつきあってランニングしてやろうとしてるんでしょーが！まったくもう、あんたじゃなくてあたしのほうが体重落ちてるっていうのは、一体どういうことよ！？」

――それは本当のことだった。ほたるにつきあってランニングしたりエクササイズをしているうちに、あたしのほうがウエストが引き締まり、ますますスタイルのほうが良くなってきているのだ。

「うん、今起きるよお。サクラにはほんと、感謝かんしゃ……でもあと五分だけ……」

あと五分と言いつつ、ぐーっとよだれを垂らして眠りに落ちたほたるのことを、あたしは諦め顔で見下ろした。

確かに、毎朝四時に起きてランニングをし、カロリー計算されたほんのぽっちりの食事を食べて出勤――なんていうことを一か月もやっていたら、たぶんあたしもとっくに挫折していただろう。

それでも、ほたるはとりあえず一か月で四キロ痩せることに成功していた。舞台の初演は三か月後の12月23日。そして現在の体重が八十三キロ。そう計算した場合、痩せなければいけないのは残り約三十キロだ。一か月で十キロずつ痩せることさえ出来れば……決して不可能な数字ではない。

「ほら、五分たったわよ、ほたる！」

両目とも3の字にしたまま、眠ってるほたるのことを叩き起こすと、あたしは彼女がのろのろとランニングスーツに着替える様子を見守った。まるで太った泥人形が機械じかけで動いているような、鈍い動作だった。

なんにしてもこのまま、催眠術にかかっているような寝ぼけた泥人形を連れて、近くの桜の木公園まで走りこむしかない。

「ほらー、ファイト！！ほたるーっ！！」

時々、豹柄のスパッツにTシャツという格好のあたしを、同じく早朝からランニングをしているか、ウォーキングをしている中・高年のおじさん・おばさんが、変なものを見たという顔をして通り過ぎていく……。

（ふんっ。なんとでも思いなさいよ、この健康フェチどもが！）と、あたしは思った。何故といって、これもまたほたるを奮起させるための秘策なのだ。ピンク色の豹柄のスパッツ。これを履いていると、ほたるがあたしの払っている犠牲のことを思い、どうやらだんだん目の覚める頃には、死ぬ気で頑張ろうという気になるらしいから。

この日も三キロのランニングを終えて戻ってくると、ほたるは体中汗だくだった。ミネラルウォーターを飲み、それからシャワーを浴びる……この頃になると、久臣さんも夜勤から戻ってきており、ほたるやミドリさん、そしてあたしの四人で朝食の食卓を囲むことも珍しくない。

そしてあたしは郵便局へ出勤するほたるのことは見送ったあとで――シャワーを浴びてようやく眠りにつくのだった。

レンはこここのところ、毎日午前さまだった。居間のカレンダーにあたしは<ピヨッと鶏まる！>に出勤する日や時間を書きこんでいるので、どうも奴はわざとあたしとすれ違うようにスケジュールを組んでいるような節がある……（ま、嫌いたければ嫌いなさいよ！）と、あたしは今ではかなりのところ開き直っていた。

考えてみれば、あたしが茶色い髪をしているとか、顔立ちがお水系だからとか、ピンクの豹柄スパッツを履いてるからというような理由で人から嫌われたことなんか、これまで数えきれないくらいある。

正直、あたしは劇団レリックの団員たちにも、似たような理由から毛嫌いされたらどうしようと思っていたけれど――とりあえずこれまでのところ、そういう気配はないと感じている。もちろん、あたしが劇団員の誰かに色目を使ったとか、そんな話の流れにでもなればまた別なのだろうけど、今あたしが恋をしているというか、（やっぱりあたし、こいつのことが好きだ）と思っているのは、レンのことだけだった。

でも、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』の舞台に夢中になるあまり、あたしには今、恋愛にまで幅広く力を傾注するような力が残っていない。今のあたしの願いはただ、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』の舞台が完成し、レンがその舞台を見て褒めてくれたらいいと思う、そのことだけだった。



それは、十月半ばの月曜日の午後のことだった。

「あんた、今少し時間あるか？」と、珍しくレンのほうがあたしに声をかけてきたのだ。

ミズキくんは両親と話し合うことがあるとかで、片手に原稿を握りしめ、ミドリさんと一緒に大谷氏が迎えにきた車で、一度実家へ帰っていた。夜には戻れると思うけれど、はっきりしたことはわからないから、帰ってこなかったら店屋物をとって食べてね、とミドリさんは言い残していた。

ほたるは当然郵便局で仕事、久臣さんは休日で、今は図書館に新しく小説を書くための資料調べをしにいている。

つまり今、ベルビュー荘にいるのは――あたしとレンのふたりだけだった。

「べ、べつにっ。時間ならあり余るくらいあるけど？」

まさかベルビュー荘で、レンとふたりきりになれる機会があるだなんて、あたしは今の今まで考えてみたこともなかった。

それに、もしそうなれたとしても、レンはさっさと出かけるなりなんなりして、あたしをひとりぽっちにするだろうと信じて疑いもしなかった。

これは一体、どういう風の吹きまわしなんだろう？

「サクラは、俺の部屋って見たことなかったよな」

(ええっ！？しかもなんなの、この急展開は！？)

あたしは驚きながらも、藍染めののれんの向こうで「ついてこい」というように部屋の方向を指差したレンの後ろについていった。

まさかとは思うけど、これは何かの罠なのだろうか……とさえ、つい疑ってしまう。

ねずみがチーズにつられてうっかり手を伸ばしたら、バネに手が挟まっちゃった、くっすん☆というような事態を想定しつつ、あたしはおそろおそろ、ベルビュー荘の2号室のドアから中を覗きこんだ。

「……すごい……」

あたしはそう一言いったきり、馬鹿みたいにぼかんと口を開けたまま、その場に立ち尽くしていたと思う。

ドアから入って左の壁には、輪があるからたぶん、土星だろうか？土星から見た他の木星や地球、金星や太陽などが並んだ宇宙世界が、緻密な点描画のように壁にそのまま描かれている。正面の、窓がある壁は趣きが違って、少しメルヘンチックな感じだ。まるで本物にしか見えない美しい樹木が、枝を伸ばして窓全体を囲っている……そして右の壁には、虹のかかった青空が描かれ、その虹を裸の男女が背中を向けて見上げていた。

あたしはこの時、無意識に一歩あるいてレンの部屋の中へ足を踏み入れて――正直ぎょっとした。

最後に残った壁には、一面に悪霊のような手が赤い画面いっぱい、黒や青や緑、紫によって生々しく刻印されていたからだ。

床には安物のカーペットが敷いてあって、片隅にはベッドとソファがある。でもそれ以外には、胸元から上の女性を彫った大理石の彫刻が一体と、まだ何も描かれてないキャンバスがイーゼルにかかっているという、他には何もない部屋だった。

「ねえ、あんたってもしかして、本当にどっか病んでるの？」

あたしは少しの間呆然としたあと、ようやくいつもの自分を取り戻して、さり気なくレンにそう聞いた。

「あたし、芸術家って呼ばれる人には二種類いると思うんだけど……ひとつは、本当にまるっきり病んでいて、そのことが表現をする上で役に立ってる人間。そしてもうひとつは、病んだ振りをした偽の芸術家。この二つ目のほうはね、ある意味最初の本物の芸術家よりも重症よ。だって、自分の体を椅子に縛りつけて、ナイフで死なない程度に手足を傷つけながら——「自分はこんなに病んでる。だから本物の芸術家だ」って口走ったりするんだもの」

「ほたるじゃないけど、あんたって時々、本当に面白いことを言うよな」

そのことにもっと早く気づけばよかった、とでもいうように、どこか後悔した眼差しで、レンがあたしのことを見返してくる。

「ねえ、レン。あんたもしかして、本当にどっか体の調子が悪かったりするんじゃない？最近じゃさっぱりあたしにも突っ掛かって来なくなったし、あたしも張りあいがなくつまらないんだけど」

「それは悪かったな」

今度はどこか自嘲的な笑みを浮かべて、レンはベッドのヘッドボード側に腰掛けると、そこから煙草と灰皿をだし、セブンスターを吸いはじめた。

実をいうと、あたしは少し前から禁煙をはじめている。だから、なるべく煙の届かない位置——悪霊の手形の前に置かれた革のソファに座ることにした。

「俺、たぶん近いうちにネパールへ行くことになると思う。そしたら、あんたに色々言って悪かったってあとになって後悔しそうだから、今のうちにあやまっておこうかと思ってさ」

「ネパール！？何よ、レン。観光にいくんだったら、もうちょっと気の利いたところにしたら？」

悪かった、という言葉聞いて、嬉しくなるあまり、あたしの声は少し金属的な響きを持つものになってしまった。

本当はあたしとしても、せめてもう少し落ち着いた振りをしたいのだけれど。あるいはもう少し、大人の女っぽい振りを。

「観光っていうかな、井戸を掘りにいくんだよ。大学時代からの友達が向こうで病気になったらしい。で、帰国する奴の代わりに行くことになったのが、俺ってわけ」

「ふう～ん。井戸ねえ……なんか大変そうね。あたしもTVで見たことあるけど、濁った汚い水を向こうの人は飲んでたりするんでしょ？」

「そうだな。俺が前に行ったところじゃあ、その水を飲んだ日本人全員が下痢になった。まあ、普段それだけ日本は水資源に恵まれてるってことなんだろうな。でも、あんたはこんな話、興味ないだろ？」

本当は（あんたの話すことなら、なんでも興味あるわよ）というのが、あたしの心の中の正



解だ。

でもあたしはわざと、レンの中にあるであろう“川上サクラ像”を演じることにしてしまった。

「まあ、正直いってあんまり興味ないわね。もし、あんたの言ってるのが、地球の環境問題とか、そういうことについてならよ？あたしはアフリカの難民が餓死してようと、自分に明日食べるものがあったら、それでいいわ。テレビでその手の番組を見て五分くらい「可哀そう」って思ったあと、すぐにチャンネルを変えて笑ってるタイプ」

「なんか俺、生まれて初めて今、あんたを好きになった気がするな」

本気なのか茶化されてるのかわからなくて、あたしはレンに向かって軽く肩を竦めた。

そんなあたしでも、男次第で百八十度変わるかもしれないなんてことは――レンはたぶん、考えてみたこともないだろう。

「まあ、なんにしてもその話はとりあえず、今の俺とあんたの間ではどうでもいい。俺がなんであんたのことを最初から嫌ってたのか、あんたはわからなくてももしかしたら困惑したかもしれない。でも、ベルビュー荘が選んだのはたぶん俺じゃなくて、他でもないあんたなんだ」

「……えっと、それ、どういう意味？」

首をひねっているあたしに対して、レンは初めてシニカルにではなく、優しく微笑みかけた。

「気がつかないか？あんたがここへ来てから二か月もしないで、ミズキは自分の部屋から進んで出てきた。それも誰に強制されるでもなく……それにあんたはほたるとも仲良くやってるし、実際感心するよ。ほたるはこの一か月で十キロとは言わないまでも、七キロか八キロは痩せただろ？」

「うん、まあね。本人も二重アゴじゃなくなっちゃって、すごく感動してるみたいよ」

実際、ほたるはアゴのラインがすっきりして以来――ますます熱心にダイエットに励むようになっていた。

それはあたしにとっても、嬉しい限りのことだった。

「俺はさ、あんたのことを最初から、自分のことしか頭がない自己中女だと決めてかかってた。それというの、昔あんたによく似た女に夢中になって、捨てられたことがあったからだ。でも俺のそういう過去と、あんた自身は本当はなんの関係もないんだよな……だから、悪かったと思う」

「や、やだ。何よ、急にしおらしくなっちゃって！久臣さんもそうだけど、なんか世の中にはあたしの顔によく似た悪女が三人くらいいるのかしらね」

あたしは自分でも、顔が熱くほてってくるのがわかった。あたしに似た女に夢中になったことがあるっていうことは、可能性がまるでないわけじゃないって、ついそんな気がしてしまっただけ。

「久臣さんが言ってるのはたぶん……容姿が似てるってことじゃないと思うな。俺の言ってるのも、あんたに顔がよく似てたっていう意味じゃない。むしろ顔なら全然似てないな。彼女のほうが清楚で、いかにも上品で洗練されてるような感じだったから」

「何よ！あんた、さっきからあたしを上を持ち上げたり下にどすんと落っこしたり、どっちにするのかはっきりしてくれない！？」

「ああ、悪い。べつにあんたが見るからに下品で洗練されてなくて、おしとやかじゃないって言

いたいわけじゃないんだ。ようするに、久臣さんの場合は、あんたみたいないかにもお水系の顔立ちの女性にトラウマがあるってことさ。仮に顔が似てなくても、いかにもそういう系統の女を見ると、久臣さんは避けて歩きたいって思ってるってということなんだと思う。それと、俺の場合は――もっと質が悪いんだよな。見た目、いかにも清楚で綺麗な女が、もし実際は自分のことしか頭にない自己中女だったとしたら、大抵の男は騙されるって、そう思わないか？」

「わかったわ。あんたが言ってるのはようするに、テニスコートでパンチラタイプの女よ！絶対そう！」

レンは煙草の煙にむせると、少しの間笑いをかみ殺したような顔をしている。

べつに、笑いたければ思いきり笑ったっていいのに。

「テニスコートでパンチラって、どういうタイプの女だよ？まあ、聞かなくてもなんとなくわかる気はするけどな」

「テニスコートでパンチラするタイプの女には、二種類いるってことよ！ひとつ目はね」と、何故かあたしは熱心に言った。「べつにそんなつもりもないのに、真面目にテニスっていう競技に熱中するあまり、パンチラしちゃってるっていう女。もうひとつ目はね、男が見てるってわかって、計算してパンチラするって女よ」

「パンチラパンチラって言うけど、たぶんテニスの選手はスコートってやつを穿いてるんじゃないのか？」

「スコートもパンツも似たようなもんじゃないの。とにかくパンチラはパンチラよ。それで、あんたはその後者の質の悪い女に引っかかったってわけ？」

あんたもたぶん、そのタイプに属するんじゃないか、とは言わず、珍しくレンはあたしの言い分を素直に認めた。

「そうだな。確かに俺はあんたの言うとおりに、あの人……七津美さんっていうんだけど、彼女が計算してパンチラしてるとは気づかず、その網に引っかかった馬鹿男だったんだろうよ。それに、当時は俺もまだ二十一だったから、綺麗な女性が微笑んで手招きしてたら、フラフラっとなついていくしか能がなかったんだと思う。なんでこんな個人的な話を俺がするのか、もしかしたらサクラにはわからないかもしれない。でも最近のあんたを見てて……あんたにならたぶん、わかるだろうっていう気がしたから、俺は今まで誰にも話したことの無い話を、あんたにしてみようと思ったわけだ」

「ふう～ん。それは光栄ね」内心では、レンがこれまでどんな女性とどんな恋愛をしてきたのか、好奇心で胸がはちきれそうだった。でもあたしはそういう安っぽい感情を見せないよう、一生懸命努力した。「で、もしかしてそのナツミさんっていう人が、あんたの初めての相手だったりしたわけ？」

「いや、それまでに絵のモデルになってくれた子と、そういう関係には何回かなってた」

(でしょうね)と、あたしはイーゼルにかかった真っ白なキャンバスを見つめて、溜息を着く。

レンのこの、妙にどっしりとした落ち着きは――多分そういうところから来ているのだろうと、あたしは前からなんとなく感じていたのだ。

「七津美さんは、ちょうど俺が大学三年の時、イタリア料理店でウェイター兼皿洗いのバイトをしてた時に知り合った。店の常連客で、イタリア人の店長と時々、イタリア語で話してるってい

うような女性で……まあ、いわゆるセレブなマダムっていうか、何かそんな感じだった。ようするに、貧乏な画学生とはなんの縁もゆかりもなさそうにしか見えない感じの人。でもそんな彼女がある時、うちに来ないかって誘ったんだ。自宅に御主人が個人所蔵してる絵がたくさんあるから、絵を描いてるなら絶対勉強になると思うって言って……」

「ご主人ってことは、そのテニスコートでパンチラ女は年上の既婚者だったってことね？」

そういう種類の男と愛人契約を結んでいたことがあるので、あたしは大して驚きもしなかった。

ついでにいうと、この時点でレンの話もある程度先が読めていたとっていい。

「そうだな。正直、俺は今も七津美さんの正確な年齢についてはよく知らない。たぶん当時で三十五、六歳くらいだったんじゃないかな。旦那はIT企業の社長で、年収が数億円クラスっていう人。彼女とは確か年齢が二十歳は違ってたと思うけど……こういう話って俺は、昼下がりのくだらないメロドラマにしか存在しないと思ってた。ようするに七津美さんは金目当てで二十年の違う男と二十代で結婚して、その後は御主人との間にある退屈な性生活に満足してなかったわけだ。で、時々俺みたいにちょっと気に入った男を見つけると、一流の服や作法や食事のマナー、ワインの選び方を伝授するってわけ」

「だけどレン、そういうのって別に「誰でもいい」ってわけじゃないのよ」

ナツミとかいう女の肩を持ちたいわけではないけれど、正直、彼女はかつてのわたしによく似ている。

正妻か愛人かの違いっていうだけで、男に金で囲われている籠の鳥という意味では。

「らしいね。俺みたいな男がこれまで何人いたのかって聞いたら、彼女も同じことを言ってた。「誰でもいいっていうわけじゃないのよ」って。で、俺は七津美さんに買い与えてもらったアトリエで、彼女の絵を描きながらペットの犬か何かみたいに七津美さんが来るのを待つっていう生活を送るようになったわけだ。当時描いてた彼女の絵は何枚になるかわからないくらいだけど、そこを出る時にそれは全部燃やした。旦那さんが七津美さんの絵を一億で買おうって言ったけど、俺はそれを断ったから」

「……一億ね。でもそれってたぶん、ほとんどがヌードだったんじゃないの？」

「まあ、そうだな。あの男が俺の絵を買おうとしたのは、不倫した罰として彼女のことを苦しめるためだった。そのためなら一億も安いってわけだ。俺にしても、今なら七津美さんに旦那と別れて俺と結婚する意志なんかさっぱりなかったんだってわかるけど……まあ、何分当時は今より若かったんでね。ああいう見た目清楚な女性が本当はどのくらい淫乱なのかとか、そんなことも全然見抜けなくてすっかり夢中になってたってわけだ」

「ようするに、熟女の熟練の手管にすっかり参ってたってこと？」

禁煙して十日にもならないのに、あたしは無言で手を伸ばし、レンに煙草を要求した。

何しろこいつにはマルボロを数本貸してやった恩があるにも関わらず、そのうちの一本も返してもらった記憶がない。

「俺はそれまで、セックスする時にどうしたら女が感じるのかとか、そんなことを相手に聞いたことは一度もなかった。でも彼女は――七津美さんは違うんだ。そんなやり方じゃあ、本当は女

は感じないとか、随分色んなことを指図されたな。胸や足の間のなめ方にはじまって、性感帯がどこに走ってるのかを探すやり方まで……体位の違いによって、女のほうでは感じ方がどう変わるかとか、そんなこと、俺はアダルトビデオを見る意外ではほとんど考えたことがなかった。ああいう世界と現実とは別だと思ってたからね。でも本当は男は、AVの中にしかないようなファンタジーって奴に弱い。正直、七津美さんが俺に与えてくれたのがそれだった。俺の体のうちのどこまでが彼女で、彼女の体のうちのどこまでが俺なのかわからないくらい愛しあったけど——でもああいう関係ってというのは結局、長続きしないもんなんだよな。俺はファンタジーが現実になって、七津美さんとも結婚できると思いきや、最後はそううまくいかなかったってわけだ」

「……あんたがそういう話をあたしにするってことは」

泣きそうになるのをなんとか堪えながら、あたしはクールなビッチを装って、うまく煙草の煙を吐きだそうとした。

でも、実際には涙が盛り上がってくるのを、止められそうにない。

「あたしがそういう経験を結構してきたら、それで話しても問題はないって思ったってことよね？」

「そうだな。たぶんこんな話、俺はもう二度と誰にもすることはないだろう。ただ、あんたは容姿がっていうんじゃなくて、本質的な中身が七津美さんと瓜二つだって、俺はそう思った。うまく説明できないけど、彼女と別れて以来、似たようなタイプを見るとすぐにピンとくるんだ。でもまあ、サクラは七津美さんに比べたら、悪女としてはまだまだだってとこだな。あんたはようするに、男の気を引くためにパンチラして何が悪いって公明正大に言うタイプだけど、「そんなふうに見られるだなんて心外」って振りをして男を引っかける女はもっと質が悪いからな」

「それで、その人……ナツミさんと別れてからは、どうなの？」

レンに泣いていることを気づかれないために、あたしは足を組むと、横向きになって煙草を吸った。

幸い、レンも視線を正面にある絵——土星のある宇宙の彼方あたりを見つめて話をしたから、うまくいけば何も気づかれずに済むかもしれない。

そう思ってあたしは手の甲で、頬に流れ落ちた涙をぬぐった。

「どうってというのは？」

「だから、彼女と別れてからは誰か真剣におつきあいした人はいるのかってことっ！」

ああ、もう駄目だ。マジでやばい。

流石にこれでレンも、あたしが泣いていることに気づいてしまったらどう……。

「あんた、まさかとは思うけど、泣いてるのか？」

「そうよっ。あんたがそんな当時十歳以上も年増の淫乱女に入れあげて、身も心もボロボロになって捨てられたなんて聞いて——あんまり哀れで可哀そうになるあまり、涙がでてきたわよっ！大体、そのIT企業の社長とかいう男からも、一億くらい金を巻き上げてやれば良かったじゃないのっ。そしたらあんた今ごろ、ネパールで井戸なんか掘らなくても、もっと世界のために貢献できたんじゃないの!？」

「確かに、言われてみれば本当にそうだな。あんたに指摘されるまで、そんなことは考えてみた

こともなかったけど」

レンはベッドから立ち上がると、ホストが客に灰皿を差しだすみたいにして、あたしの隣に座った。

あたしは年上の蓮っ葉な女を気どって、モアイ像の灰皿にセブンスターの灰を落としたけど...  
...あたしが泣いているのは本当は、他でもない自分のためだった。

「あんたって本当は、すごくいい奴だったんだな」

ここまで、まさかここまで、相手の男から恋愛対象として見られてないだなんて、そんな目で見ることすら<論外>だって思われてるだなんて——あたしの人生史上、一度としてない、生まれて初めての屈辱だった。

「七津美さんと別れてからは、まあ、暫く女はこりごりって感じだったけど、その、ネパールで井戸掘ってる途中で病気になったって奴がさ。すっかり腑抜けになってる俺の面倒を色々見てくれて、ここベルビュー荘を紹介してくれたんだ。自分を出ていくけど、その代わりにおまえが住めよって言うてくれて.....小山内氏とか<ベルビュー新聞>のことを教えてくれたのもそいつなんだ。俺はここに来たお陰で本当に心が救われたから、今度は俺自身がベルビュー荘のために何かしたいって思ったけど、どうやら俺もそろそろ、ここを出ていく潮時ってやつが来たみたいだ」

「レンっ！！あんたここを出ていくっていの！？ネパールで井戸掘って、まさか現地の女性と結婚して骨までうずめるつもり！？」

「んなわけねーだろう.....」

そう言って本当に何気なく、レンはあたしの髪を撫でた。

これまで行ってた美容室ヘカラーリングしにいくお金がなくて、今やすっかり栗色から黒くなったあたしの髪。

ううん、もちろん今はバイト料も入ったし、なんなら自分で染めるっていう手もあったけど...  
...このほうがレンの気に入るかもと思って、あたしはそのまましておいたのだ。

「とにかく、海外にいつてるのは長くて半年くらいだよ、たぶん。ミドリさんにはその間に2号室に住みたいっていう人間が現れたら——壁に直接描いてる絵は俺が帰ってきたら全部塗り直すってことで、交渉してもらおうと思ってる。まあ、帰ってきてからもここに住むかもしれないけど.....流石に俺もそろそろ、青春ってやつにしがみついてられない年になってきたからな。本当は、あんたがここにやって来る前までは、久臣さんみたいにずっとベルビュー荘に住み続けるっていうのが、俺の夢だったんだけど」

「じゃあ、なによ！？あんたはあたしのせいでベルビュー荘を出ていくっていの！？」

「違うよ」レンからティッシュペーパーを差しだされて、あたしはそれで思いきり鼻をかんだ。

「ただ、あんたのことを見てて、思ったんだよな。そろそろ俺も前に進む時期が来てるんだなって.....ミズキもいずれ、プロの漫画家か何かになって、ベルビュー荘をでていけよう。いつまでも俺が2号室を塞いでたんじゃ、次にここへやって来るはずの夢追い人が、住めないままで終わっちゃうかもしれないだろ。本当は俺も——あんたが脚本を書いて、ほたるがミドリさんの役を演じる舞台、すごく見たいと思ってるよ。でも、ネパールで井戸掘ってるって奴に、俺は物

凄い恩義があるからな。あいつが世界のどっかで倒れたり、困ったことに巻きこまれたりした時は……何があっても絶対に助けるって約束してるんだ。もちろんあいつはそんな約束、俺が守らなくてもどうとも思いはしない奴なんだけど」

——レンが本当に、あたしの手の届かないところに行ってしまう。

そう思うと、あたしはまた泣けてきて仕方なかった。あたしが今まで、色々なことを頑張っただけなのは全部、レンのお陰だ。

そもそも、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』という言葉を教えてくれたのもレンだし、<ベルビュー新聞>を読むよう薦めてくれたのだからってそう。一応、脚本を書いたりアイデアを出したのはあたしやほたるやミズキくんでも……もしレンがいなければ、ほたるだってあたしに脚本を書いてみない？と薦めたりはしなかったに違いない。

それに、前までのあたしならとても、焼き鳥屋でビールのジョッキを一度に六個も持ったり、馬鹿みたいにうちわで鶏肉をあおぐなんて仕事、一週間と続かなかったはずだ。でもレンが「本当に大丈夫なのか、おまえ。店の連中が迷惑しなきゃいいがな」なんて言ったから——「今に見てる！」とばかり、せっかくの脚線美がむくむのも構わず、頑張ることが出来たのだ。

そんな色々なことを思いだしてるうちに、あたしは馬鹿みたいにぼろぼろ泣いた。

スピンだったから、マスカラがとけて顔がお化けのようになるっていう心配だけはなかったけど……それでもあたしはやっぱり、（こんなどうしようもなかったあたしのことを変えたのは、他にもないあんたなのよ、レン！）と言って奴の胸に飛びこむことは出来なかった。

もちろんまだ、チャンスがないわけではないのかもしれない。

でもあたしはこれまで——生まれてから一度も、男と女の間にも本物の友情が育ちうるだなんて信じてみたことはなかったけれど、たった今、レンとならそれが可能かもしれないと思っていた。

そしてそのほうが、いわゆる男女の仲なんていうものになって、桜の花がパッと舞い散るように互いの関係がなくなってしまうより、遥かに貴重で大切なことなのかもしれない。

「……あんたはきっと、あたしがここで裸になっても、ただ淡々とキャンバスに絵が描けるんでしょうね」

「さあ、どうだろうな」レンは何も描かれてないキャンバスのほうを見ながら煙草を消している。「と言ってもまあ、あんたは俺にとってそういう意味でそそられないタイプだっていうのは確かだ。さっき、あんたが言ったみたいに——俺も、裸にさえなってくれるなら、誰でもいいってわけじゃないんだ。たぶん、人生の中でミューズって呼べるくらいの女に会える可能性は、そう滅多にない。これは美人かブスかとか、あまり関係ないんだ。ただ、俺が最初に会った時、あんたのことを表面はどうあれ七津美さんと同じタイプだと直感したみたいに……見た瞬間にわかるんだよ。そういう女になら俺は、ストーカーと思われるくらいしつこくつきまとうかもしれない。それで、最初は服を着たまの姿を絵に描いて、次期に向こうがその気になるのを待つと思う」

「やれやれ」と、あたしは呆れたように肩を竦めた。「あんたってそういう方面にはてっきり淡泊なのかと思ってたけど——案外粘着質な上級スケベって奴なんじゃないの？なんにしてもまあ、次にあんたのいうミューズとやらを発掘したら、いの一番であたしに知らせなさいよ。あんた

がまた変な女に引っかかって泣きを見ないかどうか、鑑識眼のあるあたしの目でじっくり観察してやるから」

「それで、あれは間違いなく計算するパンチラ女だからやめとけとかって、助言するんだな？」

「そうよ。男なんてみんな馬鹿だから、レン、あんたもたぶん、今度はスペイン語を話せるクォーターの美女なんていうのが現れたら——その女がどんなビッチでも、誘われたらやっちゃうと思うわよ。で、「君こそ我がミューズ！」とか昼間から寝言いっちゃって、ろくにお金にもならない絵を描きまくるんじゃない？」

「まあ、そうだろうな」

レンがそんなことはありえないという顔をして、また煙草に火をつけながら笑った。

あたしはレンの、そのどこか余裕綽々たる顔の表情が癪だったので、奴の手からそれを奪って自分で吸うことにした。

「ねえ、ネパールってインドの上あたりにある国だっけ？」

「ああ。向こうの子供っていうのは日本のガキみたいにすれてなくていいよ。もし現地の女性と結婚したら、ベルビュー荘宛てに絵葉書でも送るかな。運命のミューズとの出会いについて、長々と書いた手紙と一緒に」

「.....ちゃんと、帰ってくるのよね？」

今もし、この確かに心は繋がっているという感覚を手放してしまったら、レンとは二度と会えない気がしていた。

何故かはわからないけれど、なんとなく直感的に。

「ああ。なるべくだったらあんたが脚本を書いた舞台を見るために、十二月には一度帰ってこようと思ってる。向こうであるのは何も、井戸を掘るっていう仕事だけじゃないから、どうなるのかは実際行ってみないことには今の段階ではなんとも言えないんだ」

「そう。あたしももしこっちで何かつらいことがあったら——レンがネパールくんだりで汗水流して井戸掘って、まずい食事をしながら汚水をすすってるところでも想像して耐えるわね。日本は水資源に恵まれてて良かった、飽食時代で良かったなんて、泣きながら喜ぶことにするわ」

「.....あんたって、もしかしたらほんとに脚本家向きなのかもしれないよな。時々、よくそういう言葉をべらべらすぐに思いつくなって、つくづく感心するよ」

あたしとレンはこのあと、相変わらずの憎まれ口を互いに叩きつつ、色々なことを話しあった。

『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』の舞台の進行状況、ほたるが日に日に痩せていくにしたがい、綺麗になっていくのを見て——東郷氏が嫉妬していること、実際舞台上だけでなく舞台裏でもその種の火花が散っており、三角関係どころかややこしい五角関係が築かれつつあることなど.....あたしはずっとレンに話したいと思っていたことがたくさんあった。

そしてレンはこの翌週、ネパールへ旅立っていき、あたしにとってベルビュー荘の空気はなんとなく、炭酸の抜けたシャンパンのような、少し張りあいのないものを感じられて仕方なかった。せっかくお互いの関係が一段階進んで「友達」っていうところまで来たのに.....舞台のことをあれこれレンに相談できないのが、あたしは本当に残念でたまらなかった。

それというのも、トップというものは常に孤独というべきか、今やあたしは劇団レリックの団員たちが影で＜スパルタ・ビッチ＞と呼ぶくらい、彼らのことを厳しく鍛えるようになっていたので――元祖スパルタ・サドの霧島さんですら、その様子をただ黙って眺め、今ではニヤニヤするようになっていたくらいだ。

「ああ、ほんと、俺に代わって歯に衣着せず物を言える人が監督になってくれて、本当によかったよ」

そうなのだ。今やあたしは演出家の荒川氏とふたりで最強のタッグを組み、団員の全員からも劇団レリックの＜舞台監督＞であるというように、実質的に見なされつつあったのだった。



確かに、焼き鳥屋のアルバイトとアマチュア劇団の舞台監督という二束のわらじは、わたしにとって決して簡単なものではなかった。

でも劇団レリックでは、むしろそれが当たり前だったとっていい。ほたとダブルキャストの三枝友紀さんは、普段はOLをしているし、藤堂ジュン役の神崎薫さんもそうだった。霧島さんが別のアマチュア劇団から引き抜いてきたデューク・サイトウ役の上月数馬くんは、引越し屋でバイトをしながらプロの俳優を目指しているしー羽柴リョウ役の東郷氏は、ほたと同じ郵便局で郵便配達員をしているのだった。

まあ、そう考えたらあたしなどは、週に三回以外は時間に空きがあるというものの、それでもやはり煙草の量は自然増えたし（結局、レンの部屋でセブンスターを吸って以来、禁煙は中止した）、ベルビュー荘内にレンの視線をまったく感じなくなったせい、どこか不機嫌に眉間にしわを寄せている……なんていうことも多くなったと思う。

それというのも、あたしは舞台開演の一か月前には、順調に痩せているほたをヒロインのユリに確定することを、みんなの前で発表しなくてはならなかったからだ。もちろん、このことに異論を挟む団員は誰ひとりいないことはわかっている。むしろ、ユキと交互にユリ役を代えて練習するだけ時間の無駄だと他のみんなが感じはじめていることも、よくわかっているつもりだ。

正直、最初に「ダブルキャストでいく」と決めた時のあたしの立場というのは、ただの脚本家というものだったから、まさかそのあとで、こんな苦しい宣告を自分が直接しなければならなくなるとは、考えてもみなかったのだ。

もちろんあたしは結局、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』という、自分にとって初めての舞台を成功させるため、荒川氏のアドバイスどおりー「鬼になりきる」というか、芸術のために「ビッチになりきる」ことを決めたのだけれど。

「開演一か月前になったので、ここであらためてはっきりとしたキャストの発表を行いたいと思います。もちろん、デューク・サイトウ役は上月くん、羽柴リョウ役は東郷くん、大谷アラシ役は遠藤くんで、男性キャストは他に変更ありません。ヒロイン役の笹谷ユリは、順調に痩せている二階堂ほたるさんにお願ひしますが、彼女がもし病気になるとか怪我をするといった不測の事態が起きた場合に備え、代役として三枝友紀さんを立てます。あとは、当初の約束としてユリ役が二階堂さんになった場合、彼女の親友役の藤堂ジュンを三枝さんにお願ひする予定でしたがー藤堂ジュン役はそのまま神崎さんにお願ひしたいと思います。他の女性キャストに変更はありませんが、もし異議のある方は稽古が終わったあと、わたしかマッサー・アラカワの元まで来てください。以上です」

マッサー・アラカワというのは、演出家としての荒川氏の名前だった。すでに出来上がっているポスターやチケットのクレジットには、監督・脚本／川上サクラ、演出／マッサー・アラカワと書かれている……正直あたしはそれを見た時、少しぎょっとした。実際にはほとんど何もしないで見ているだけとはいえ、監督のところには霧島さんの名前を、脚本のところにはあたしの名前だけでなく、ほたやミズキくんの名前も一緒に入れて欲しいくらいだった。

でも、そのことについてはほたるやミズキくんからも了承を得ているので、とりあえず問題はないにしても――あたしはまたも肩にずっしりと重い何かのしかかるのを感じて、目に見えない霊を神社で除霊してもらいたいような気持ちになっていた。

『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』のキャストを正式発表した時、ある程度予測はしていたけれど、三枝さんが涙をこらえきれず、体育館脇にある女子更衣室へと一目散に走っていった。そのあとを追いかける、アラシ役の遠藤くん……（やれやれ。高校生じゃないんだから）と、あたしは彼らを見ていつもそう思うてしまう。

藤堂ジュン役の神崎さんは明らかにほっとした表情をしており、必死でがんばった甲斐があったというように、どこか清々しい顔をしていた。彼女はジュン役をもしかしたら三枝さんに奪われる可能性があったため、かなりのところ藤堂ジュンという役を自分なりに研究して演じていたようだ。あたしにも、稽古のあとで実際のモデルになった人はどんな感じの人だったのかと聞いてきたことがある。

その点、ある意味崖っぷちだった薫は役に集中できてよかったのかもしれない。けれどもユキのほうはほたるが痩せられるとはとても思えず、また仮に痩せられたとしても自分にはジュンの役があると思ってしまったのだろう、結局どちらの演技にも集中できず、両方の役を逃してしまったというのは――あたしや荒川氏や霧島さんにも責任のあることなのかもしれない。

もっとも、そのことでなんとなく罪悪感を感じるあたしが<ピヨっと鶏まる！>で霧島さんにそのことを相談したところ、彼曰く「ヒロインに代役がいるっていうのは、むしろ普通のことなんじゃないのか」とのことだった。「うちは団員同士の関係がヌルいから、今度のことは刺激薬になってちょうどいいくらいだよ」……サドの彼は、良心などこれっぽかりも痛まないとばかり、ビールをぐびぐび飲みながらそう言い切った。

まあ、なんにしてもこれで、稽古のほうは集中できる環境がかなりのところ整ったといっいいい。

あたしはキャスト発表の時のように、みんなの前であらたまって何かを正式に告げなければならない時には、団員のことを君づけやさんづけで呼ぶけれど――稽古中には誰のことも下の名前で呼び捨てにするか、あるいはあだ名で呼ぶことにしていた。

といっても、そのくらい親密な何かがあたしと彼らの間には育まれつつあった……などというわけではまったくない。むしろあたしは稽古の時以外はあえて団員とは距離を置くことにしていたし、立場もあくまで<こっちが上>で<あんたたちは下>という見下した態度を絶対に崩さなかった。

結果として、彼らが影であたしを「スパルタ・ビッチ」と呼んでようが、演技指導がなくて不満をこぼしてようが、そんなことはあたしにとってどうでもいいことだった。ただ、この時のあたしが少し気になっていたのは、団員たちが更衣室で囁きかわす自分の悪口などではなく――デューク・サイトウ役の上月数馬くんがどうも、ほたるの魅力の虜になりつつあるということだったかもしれない。確かに、ほたるの現在の体重は六十五キロで、舞台開演の一か月後までにはまだまだ体を絞る必要がある。でも、もともとほたるは身長が172センチあるせいか、今のままだもそれほど太っているという印象を見る人に与えないのだ。むしろ、彼女はダイエットに成功して、短期間で本当に綺麗になったと思う。そしてこの、ほたるが必死でしている「瘦

せる努力」を、自分のためと数馬はどうも誤解している節があるのだ。

正直、初めて上月くんがほたと顔を合わせた時、「えっ！？この人がほんとにヒロインなんですか！？」というような、鳩が豆鉄砲を食らったような顔を彼はしていた。でもセリフ合わせをした時には、すぐにほたるの才能を見抜いて、ダイエットが条件というのが何故なのか、よく理解していたらしい。

稽古の最初の頃、数馬はほたとよりもむしろ、ユキとの稽古のほうが息があっていたと思うけれど、ほたるが日一日と痩せてくるにしたがって、ほたとの舞台稽古のほうがよりしっくりくるようになっていた……ここで、まだ二十三歳と若い上月くんが、ほたるが痩せようと頑張っている努力を自分のためだと錯覚しても、もしかしたら仕方ないことなのかもしれない。

数馬は演技力と舞台を支配する存在感という意味で群を抜いていたけれど、それでいて初々しくて純粋なところが、確かにデューク・サイトウ役に合っていた。しかしながら、劇団レリックには今の今まで、彼のようなイケメンがいた試しが一度としてなかったのだ。いたとすればそれは唯一、「It's me、オ・レ」だと霧島さんが言っていたとおりの——その次がかなり離されて三枚目の東郷氏といったところだったのである。

しかも数馬は当然、東郷氏が太ってようが痩せてようが関係なく、彼がほたるのことを好きでい続けたという、彼らの愛の歴史を知らない。ゆえに、ほたと東郷氏がつきあっていると知っても、彼女さえその気ならいつでも乗り換えてくれてオッケーというような態度を、彼はいつもほたるに見せていた。

さらに、今まで劇団にいた試しのないイケメンが登場したということで、当然女性陣は色めきたった。

友達以上恋人未満といった関係だった三枝友紀と大谷アラシ役の遠藤広夢は、「やっぱりあたしたち、友達でいましょう！」といったプレッシャーをユキから強く受けたせいかどうか、ヒロムのほうは大谷アラシという役柄と同じように、近ごろどうもウジウジ悩んでいることが多いようだ。

正式なキャスト発表があった日、稽古が終わったあとで——彼はあたしのところまでやってくると、こんな異議申し立てをしていた。

「川上さんは、ほたと同じ下宿で暮らしてるんですね？だから仲がよくてダイエットにも協力してるほたるのことを、正式にヒロインに決定したんじゃないですか？最初、僕たちが聞かされたのは、ほたるの体重が最低でも五十五キロまで落ちるのが絶対条件だっていうことでした。それなのにこんなの……ユキが可哀想ですよ」

ちなみにこの日、ユキは「いてもみんなの邪魔になるから」と言って稽古がはじまる前に帰っていた。

まあ確かに、役を外されただけでなく、気持ちが悪く傾きかけている数馬がやたらとほたるに密着する姿というのは——今の彼女にとって一番見たくないものだろうというのは、よく理解できる。

「遠藤くん、物事にはなんでも、予想外の因子っていうのがあるものなのよ」と、稽古中はヒロムと呼び捨てにしている彼に対して、あたしは突き放すように言った。「正直、あたしも荒川さ

んも、ここまでほたるの体重が短期間で落ちて、しかも痩せたことと合わせてヒロインにぴったりとっていいくらい、綺麗になるとは思ってなかったの。もしここに三枝さんがいたとしても、まったく同じことを言わせてもらうけど、彼女にははっきり言ってヒロインとしてのオーラがない。それに＜スパルタ・ビッチ＞のこのあたしが、同じ下宿に住んでるからってというような甘っちょろい理由で、鼻根なんかすると本気で思ってるわけ？」

稽古が終わり、掃除当番に当たっている団員たちはモップで床を磨きはじめていたけれど――彼らはみな、しーんとなってあたしと遠藤くんのやりとりを見守っていた。また、隅のほうで体育座りをしておしゃべりをしていた団員や、帰り仕度をしていた団員たちも、それぞれ固まったようになってこちらを見ている。

「ぼ、僕はべつに……」

彼は完璧に覚えたセリフをしゃべるのは得意だったけれど、もともと性格が内傾向にあるせいもあって、アドリブのきくタイプではないと、あたしにはよくわかっていた。そこで、畳みかけるように言わせてもらう。

「遠藤くんは三枝さんのことが好きなんでしょう？公私混同してるのはあたしじゃなくて、あなたのほうなんじゃない？上月くんが来て以来、彼女の心がどうもそちらになびいているような気がする……それで焦る気持ちはわかるけど、たぶん三枝さんはあなたがあたしに抗議してくれたって聞いても、大して喜ばないんじゃないかしらね。それより、あたしとしては万が一のことを考えた場合、ヒロインの代役がないと困るの。だからユキにアンダースタディーも十分重要的な役割なんだって、あなたから伝えてもらえると、あたしとしても助かるんだけど」

「わかりました……」

ユキにはたぶん、ヒロムのどこか影のある暗い性格というのは、ストーカーと紙一重であるように見えるかもしれない。

でも個人的には結構、ヒロムには役者として大成しそうな可能性があるように、あたしは感じていた。

普段内気な分、舞台上で弾ける時の瞬発力がすごいというか一日ごろ鬱屈したものを抱えている分、それをいざ放出する段になると、彼はかなりのところいい物をだしてくれる。

「そうよ。うちは弱小のアマチュア劇団だけど、プロの劇団じゃあ、主役級の役にアンダーがいるのは当たり前なんだからっ」と、荒川氏もあたしの味方をしてくれた。「もし仮にほたるが舞台開演直前で、スパルタ式ダイエットが裏目にでて倒れた……なんていうことがあったら、ユキにはすぐ舞台に立ってもらいたいわ。逆にそういう意気ごみがないんなら、もう稽古には来なくていいってあたしが言ってたって言うておいて」

ヒロムが顔を赤くしたまま、コートを着て外へ出ていくと、突然凍った氷がとけたみたいに、他の団員たちも再び動きはじめた。あたしはこの時まったく知らなかったけれど、以前レリックでも実際に開演する直前、主役が盲腸で入院したということがあったらしい。そこで中止が検討されたものの、主役のセリフや動きをすべて覚えて密かに練習していた団員が、急遽舞台の中央へ踊りでることになったのだとか。

「いやはや、青春だね」

ずっと座って稽古を見ていた霧島さんが、パイプ椅子を片付けながらそう言った。

彼はあたしや荒川氏が団員たちに駄目だしするのを、いつも楽しげに目を細めながら見ている。あたしや荒川氏のやり方に対して、口出しは一切してこないけれど、それはかつての自分以上に新監督が超のつくサドだと認定しているかららしかった。

「仕事のほうも忙しいのに、火曜と木曜と土曜によく来る気になりますよね、霧島さんも」

稽古が終わったあと、例によって<ピヨッと鶏まる！>で飲みながら、あたしは霧島さんにそう聞いた。

あたしが稽古が引けたあとに愚痴をこぼせるのは今、このふたり——荒川氏と霧島さんの他には、ほたるがひとりいるきりだった。

「だって、こんなに面白い見世物が他にあるかい？」

自分でも認めているとおり、霧島さんはSのナルシストではあるけれど、まあ生まれつき顔がよくて（本人談）三十六歳で大手商社の金融開発責任者になれるくらいだから、人や物事を見抜く才覚のある人なんだろうとは思う。

「別に今の俺には舞台に対してなんの責任もないわけだし——それでいて、自分より若い連中が本気で舞台に熱中したり、恋をしたりするのをただ黙って眺めていることほど面白いことはないよ。もちろん、サクラはそういうわけにもいかないだろうけど、まあヒロムのことは心配しなくていいと思うな。あいつは普段自信なさそうに見せかけてる割に本当は自信家だし、もし今回の舞台が成功したら、ユキともうまくいくだろうよ。いや、仮にうまくいかなかったとしても、そんなのは小さなことだと思って、あまり気にしなくなってるだろう」

「……じゃあ、もし失敗したら？」

さあて、というように、霧島さんは肩を竦めて、ホルモン串にかじりついている。

「失敗だなんてサクラちゃん！縁起でもないこと言わないの！」

荒川氏は鉄板の上でお好み焼きをうまくクルッとひっくり返している。

これは本来は店員の仕事なのだが、彼は自分のほうがあんたみたいな若造よりもうまく焼けるといって、バイトの白石くんのことを追っ払っていた。

「誰がなんと言おうと『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』は、劇団レリックはじまって以来のスーパーヒット作になるに違いないわ！これはあたしのオカマとしてのじゃなくて、芸術家としての直感よ！」

だからユーももっと自信持ちなさいよ！と、荒川氏はあたしの背中を叩いたけれど——最初に脚本を何かに憑かれたように書いて以来、あたしはだんだん自分の書いたものがそんなに面白いのかどうか、自信がなくなってきた。

というより、ミズキくんの書いた漫画のほうがずっと面白いとさえ、最近では思うようになっている。問題はまあ、ミズキくんの場合は漫画という二次元での表現形態なので、それを舞台でそのまま再現するのは不可能だという点にあるかもしれない。

大道具や小道具の係をほとんどボランティアでやってくれてる団員たちは、脚本を読んで以来本当にいいセットを作ろうと努力してくれてるけれど……そうした縁の下の力持ちとっていい、美術の裏方たちの労力にも報いるため、あたしはどんなことをしても『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』という舞台を成功させたかった。

「まあ、なるようになるさ」と、霧島さんがいつもの無責任な口調で言う。「それに、今回の舞台の稽古では明らかに違う空気を感じるんだよな。前の定期公演の『ゼウスとプロメテウス』の時は、俺は稽古を見にきたのなんか、たったの二回か三回だった。というのも、もう何度もやってる舞台だから、これ以上うるさく言ったって出来がよくなるわけじゃないしと思って諦めてたんだ。でも、サクラは本当によくやってくれたよ。いい脚本をほたると一緒に書いてくれたっていうのもそうだけど――それだけじゃなくて、新しい風をレリックに吹きこんでくれたっていうかさ」

「そうかしら？ 団員たちは影じゃどうも、そう思ってないみたいよ。あたしよりも霧島さんが監督として稽古してくれたらもっといい舞台になるのになって、そんなふうに思ってるみたい」

「本当にか？」ブツとビールを吹きだしそうになりながら、霧島さんは笑っている。「信じられん。あいつら、俺が昔どのくらいのサド・スパルタクスだったか、すでに忘れつつあるんじゃないのか？ だが、保証してやってもいいが――もし俺が監督として復帰したりしたら、あいつらは三日後には絶対サクラに電話して泣きついてるぞ。ようするに、演劇なんてものに何人もの人間がかかずにあって熱中すると、必ずどっかに不満がでるっていうことだな。そしてあいつらは今はわかりやすくあんにその不満をぶつけてるかもしれないけど、まあ舞台が跳ねたらわかるよ。あいつらみんな、金八の教え子が卒業式で泣くみたいにしてあんに寄ってくるだろうからな」

「金八って、武田鉄矢？」

あたしがそう聞き返すと、荒川氏が例の髪の毛を耳にかける仕種をしたので、あたしは爆笑した。

「人という字は、互いに互いを支えあって出来ているものなのですよ」

「やだもう、あたしをあんな油ぎった汚い親父と一緒にしないでくれる？」

荒川氏が絶妙のタイミングで引っくり返した豚玉を食べながら、あたしはグレープフルーツサワーを飲んだ。

「まあ、そう言わないの。実際あたしもまさか脚本家としてだけでなく、あんに舞台監督としての才能まであるとは思わなかったもの。サクラって団員と変にベタベタしようとしたりしないでしょ？ これって結構大切なことなのよ。なあなあでやってると、ただ時間だけが過ぎてなんとなく稽古が終わったりするのよね。今の若い子はみんな人から嫌われることを怖がってて、才能がどんぐりの背比べみたいになってるんじゃないかしら？」

「言えてるな。そういう意味でまあ、東郷も数馬っていういいライバルが現れてよかったんじゃないか？ それ単に役者としてだけでなく、私的にもライバルだっていうのが、なんとも言えないが」

「そーお？」

豚玉を切り分けると、荒川氏はそれを霧島さんに渡した。彼はわたしには絶対こんなことをしてくれない。

「あたしは結構、ああいう恋愛の火花バチバチっていうの、好きよ。舞台にもいい意味で緊張感が走ってると思うし、ほたるが意外に男にモテるってわかって、翼にもよかったんじゃない？ 前までは「つきあってやってる」みたいなの、翼にはちょっとあったから。まあ、あたしはてっ

きりコウちゃんがそこまで計算した上で数馬のことをわざわざ他の劇団から引っ張ってきたのかと思ったけど？」

翼というのは東郷氏の下の名前で、コウちゃんというのは霧島さんのことだ。一応念のため。「まさか。確かに数馬は東郷のいいライバルになるとは思ったよ。けどまあ、まさか数馬がほたるのことを女として好きになるなんて、誰が思う？確かにほたるはいい女だよ。でも隣に連れて歩くには、ちょっと勇気がいるっていう意味でのいい女だってことだ。まあ、これはあくまで前まではっていうことだけだな」

あたしはすぐそばを通りかかった白石くんに、グレープフルーツサワーをもう一杯注文した。前までのあたしだったら、自分よりも容姿的に劣っていると感じる女がモテるということに対して、どう思っていただろうと軽く酔った頭でぼんやり考える。それに、他人の恋愛話なんて、基本的に真面目に聞いていた試しがない。いつでも「自分が」とか「あたしは」って、そっちに話を持っていくことしか興味がなかった。

でも今のあたしが思うのはただ――レンのことだけだった。

あいつはミドリさんや久臣さんにだけ日本を発つ日を伝えて、あたしには何も言わずに荷物をまとめて突然いなくなった。

それなのに、2号室の何も描かれていなかったキャンバスには、あたしの横顔を描いた絵が飾ってあって……たぶんあいつにはわかっていたんだと思う。あたしがレンの部屋にこっそり入って、その絵を見るだろうっていうことくらい。

「ま、コウちゃんは来る者拒まずで遊び歩いたあと、隣に連れて歩くのに最高にいい女と結婚したのよね。まったく、あたしの操はコウちゃんに捧げてもいいと思ってたのに、悔しいたらっ」

「ああ、俺は世界一の幸せ者だよ。美しい妻に可愛い娘……おまけにゲイの愛人までいるんだから。この世で一番の果報者は誰かって言ったら、それはI t's me、オ・レといったところだ」

「もう、コウちゃんたらっ！」

酔ってグダグダな会話をしている霧島さんと荒川氏のことは放っておいて、あたしはふたりよりも一足先に<ピヨッと鶏まる！>を出ることにした。一万円均一バーゲンで買った白いコートの襟を合わせ、駅まで歩く……流石に十一月も下旬になると、自転車で走るのは寒すぎた。

四つ駅を通り越して降りると、そこからベルビュー荘のある丘の上までいってくれるバスが一応出ている。

でもあたしはいつも、駅から十五分もかけて歩くことにしていた。これもまた、昔のあたしからは考えられない習慣だったとっていい。前までのあたしならたぶん、バスに乗るところかすぐにタクシーを呼んでいただろうから。

しかも、最後には厄介な坂道を上っていかなくてはならないというのに――あたしはむしろ、この坂道のためにこそ、歩いているようなものだった。例の小人の灰皿の置物と、緑色のベンチのある場所、そこから街の灯りを見下ろしていると、遠くネパールの空の下にいるであろうレンのことを、身近に感じる事が出来たから……。

でも、この翌日、あたしがとうとう我慢できなくなってレンの所属するNGOの日本事務局に問い合わせてみると（もし緊急の場合、レンと連絡を取りあうことが出来るかどうかと思って）、想像してもみない返答が向こうからは返ってきたのだった。

「ネパールへ井戸掘りですか？確か水嶋さんはアフガニスタンへ行かれていますはずですが……」

驚きのあまり、あたしは聞きたいことを矢継ぎ早に聞くだけ聞くと、すぐに電話を切っていた。

よくわからないけれど、たぶんあいつは——「そんな危険な場所へ行くなんて、あんた頭おかしいんじゃないの!？」とか、あたしが色々うるさく言うに違いないと思ったのだろう。だからわざと、ネパールへ井戸を掘りに行くなんていう話をしたのだ。

実際、あいつが前にもネパールへ行ったことがあるというのは本当らしいし、どうやって井戸を掘るのかと聞いたら、随分詳しくノウハウを説明してくれたことから見ても、その点については嘘をついていないと見ていい。

あたしは嫌な予感がするあまり、一度はニュースで毎日のように取り上げられ、今では再びメディアから捨てられたように見える国について、ネットで色々調べることにした。「一度は安定したように思われたアフガニスタンだが、オバマ米大統領が軍備を増強したことから見てもわかるように——治安はイラクよりも今ではむしろ悪くなっている」とかなんとか……。

「水嶋さんは、孤児院の運営スタッフとして派遣されたんです。ええ、そうですよ。うちの紺野がタリバンに拘束されて、その後無事釈放されたんですが、体調のほうを崩しまして。その、こう言うてはなんですが、本当に水嶋さんと同じ下宿の方なんですよね？時々、雑誌記者の方などが紛らわしく身分を偽って色々聞こうとされる場合があるものですから……」

紺野、という名前を聞いて、あたしもようやく少しピンときた。確か、もう一か月以上も前になると思うけれど——何日間かTVのニュースで彼の顔写真をよく見た記憶がある。でもこの時あたしは心の中で、（いくら立派な志を持っていても、首を切られて死んだりしたら、目も当てられないわね）というくらいにしか思っていなかった。

やっぱりレンの奴はあたしにとって、日本からネパール……ううん、アフガニスタンという国くらいに遠い、そんな場所にいる相手なのだと思って、あたしは胸が切なくなった。それは苦しいのか恋しいのかよくわからない、あたしが今まで一度として経験したことの無い、つらい恋の味だった。



十二月二十三日の開演まで、残り一週間あまりとなったある日のこと、あたしはデューク・サイトウのモデルとなった人物、原子物理学者の小山内克英氏がわざわざ帰国してまで舞台を見にくると知り一嬉しい反面、内心ではかなりのところビビっていた。

小山内氏の他に、アメリカからは藤堂ジュン役のモデルになったジュンコ・ストウ・マッキンリーも来ることになっている……潤子さんはアメリカで雑誌のエディターとして働いており、旦那さんのレイ・マッキンリーは同じくマンハッタンでコラムニストとして著名な人らしい。

羽柴夫妻と大谷氏には、すでに舞台の脚本を読んでもらっているので、何も問題はないにしても……なんといっても主役のデューク・サイトウのモデルである小山内氏が『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』を見てどう思うのか、またニューヨークのブロードウェイで多くの芝居を見慣れているであろう潤子さんが失笑しないかどうか、あたしはそのことが心配でならなかった。

「あいたたた。なんだか、いつにも増して胃が痛くなってきちゃった」

ほたるの体重はさらに落ちて五十八キロになったし一舞台の仕上がりは上場というところではあった。

ユキは代役としてだけでなく、今では進んでプロンプターの役まで買ってくれていたけれど、主要登場人物を演じる出演者の中には、自分のセリフをすっかり忘れてたり、次に何をすべきなのか失念する人物などは、まずもって出てきそうになかったといっている。

「サクラって、ビッチな見た目のわりに意外と完璧主義で心配性だよな」

ローカロリーのダイエットフードを食べながら、ほたるが笑った。普段の食事については、ミドリさんがカロリー計算してくれたものを食べているけれど、それ以外で小腹が空いた時に、彼女はネット通販で買った色々なダイエットフードを試しているらしい。

「まあ、克英さんのことなら心配ないわよ。あの人は基本的になんでも面白いタイプの人だから……むしろ、若干KY気味な人だから、誰も笑ってないところでひとり大声で笑ったりとか、そんな感じの人よ。潤子にはもう何年も会ってないからなんとも言えないけど一彼女も事前に脚本なんて送っても、たぶん読まないんじゃないかしら。先に舞台のあらすじが全部わかってしまったら、これから見る楽しみがなくなるって思うタイプの人だから」

「……見てから、自分たちが舞台上の人物としてどれだけデフォルメされてるかを知って、驚かないといいんだけど」

ところで、ミドリさんが小山内氏と潤子さんに連絡をとろうとしたのは、何も舞台に招待するためだけではなく。ミズキくんの描いた（『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』とはまた別の）漫画が、某少年誌に掲載されることになり、それからトントン拍子に同じ雑誌で連載させてもらえることが決まったので一あらためて、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』に登場するモデルとなった人たちに了承を得る必要性が出てきたためだ。

今では、3号室でミズキくんが漫画を描き、2号室にはアシスタントさんがふたり詰めて、噂に聞く＜修羅場＞な日々を送っている。

「びっくりしたでしょうね、ミズキくんの親御さん」

ミドリさんがミズキくとアシスタントふたり分の昼食を作っているのを見ながら、ほたるが言った。

「うちもそうだったからわかるけど、あたしが女優になりたいって言ったら、「気でも狂ったのかね、この子は」みたいな顔、両親はふたりともしてましたもん。アマチュアの劇団に所属しているのを容認してるのは、郵便局で一応＜普通に真面目に＞働いてるからなんですよ。これであたしがバイトでもしながら女優を目指すなんて言ったら、えらい剣幕で反対しただろうなって思います」

「そうねえ。でも、わたしと嵐さんが会いにいったら、意外に新さんと礼子さんは、わかってらっしゃるような態度だったわよ。ふたりとも、「漫画なんて」って馬鹿にするどころか、ほとんど読んだことないっていう人たちだったから、そのせいもあるのかもしれないけど……本当にそれがミズキくんのやりたいことだっていうんなら、二十歳を過ぎて三十になろうが四十になろうががんばって言うてくれたんだもの。これがプロデビューしたあとの話だったら、そんなに凄いことでもないかもしれないけど、その前にあったことだから、余計にいい話に思えるのよね」

「ああ、それで、だったんですね」

ぶどう味のこんにゃくゼリーを食べるほたるを見て、あたしも彼女から桃味のゼリーをひとつ、もらうことにした。

「あたしも、ミドリさんがなんで投稿前の原稿をミズキくに持たせて御両親に会いにいったのかなって思ってたの。だって、ミズキくん本人もプロになれることが決まったら報告に行きたいって言うてたでしょ？やっぱり、そういうところがミドリさんは流石なのよね。やっぱり、敵わないなあ」

親子丼を三つ大きなお盆にのせて運ぶミドリさんは、どこかうきうきとしてとても嬉しそうだった。

これは何も、ミズキくんの読み切り漫画が好評だったことを一緒に喜んでいうだけでなく、小山内氏が帰国するというのも関係しているのではないかとあたしは睨んでいる。

ほたるもそうだけれど、恋をしている女はどうも恋をしていない女に比べてホルモンの分泌量が最低1.5倍は増えるものらしい。

「ねえ、ほたる。あんた、数馬のことどう思ってるの？」

あたしが今度はマスカット味のこんにゃくゼリーを食べていると、ほたるは突然、ゼリーを喉に詰まらせていた。

「……ゴッホっ。ごほごほっ」

「あたし、あんたのそんな喉詰まりの演技なんかに興味ないんだけど？」

「ごっほっ、ゴホゴホッ！！」

どうやら演技ではなかったらしく、ほたるは体を折り曲げて、ようやくのことでこんにゃくゼリーを吐きだしていた。

あたしもほたるの背中を叩いて援助してやったけど、ほたるは目尻に涙をにじませており、本当に九死に一生を得たといったような顔つきだった。

「あ～あ、本気で死ぬかと思った……ほんと、おそろべし、こんにゃくゼリーの威力！！ってい

う感じね」

「そんなことで誤魔化されないわよ、あたし」と、危うく大切な舞台のヒロインを失うところだったにも関わらず、あたしは追求の手を緩めずに言った。「大体、ほたるが数馬のことを好きなら好きで、全然いいと思ってるしね。東郷さんとどっちを選んだらいいか迷ってるんなら迷ってるで、それでいいのよ。ただ、あたしには嘘をつかないでくれると嬉しいっていう、それだけ。これは舞台監督としてじゃなく、友達としてね」

「やっぱり、サクラには恋愛のことは隠せないなあ」

冷蔵庫からミネラルウォーターをだしてくると、ほたるはそれを飲みながら話を続けた。

「最初はね、数馬くんが気のあるようなところを見せても、たぶん何かの勘違いか役に入りこみすぎてそのせいかなって思ってたの。大体、あたしが翼とつきあってるのは、彼も一応知ってるわけだし……でも、この間偶然ユキが数馬くんにご告白してるのを聞きちゃったんだよね。そして彼、自分はほたるさんのことが好きだからってはっきり言ったの。それであたし、本当にびっくりしちゃって……」

「そりゃびっくりよね。一応数馬が最初に会ったのは、今の五十八キロになった体重のあんたじゃなく、八十三キロくらいある頃のおんなだったんだから」

「うん……でね、あたしもその時にちょっと気づいたことがあって。あたし、もし数馬くんがデューク・サイトウの役じゃなかったら、本当にこんなに痩せられたかなって」

はああ〜っと、あたしは思わず声にならない溜息を着いた。実をいうと最近、舞台裏の様子がなんとなくおかしいと思っただけだけれど、まさかこんなところにその原因があったなんて。

「でも、こんなこと言うからって誤解しないでね。別に数馬くんとどうこうなりたいて思ってるわけじゃないし、彼にしてもたぶん、舞台が終わったら「こんなデブ、なんで一瞬でも好きだと思ったんだか」っていう、そんな感じだと思うの。だから……」

「Dr. 羽柴じゃないけど、まさに＜二兎を追う者は一兎をも得ず＞っていう図式ね、それは。ある意味、ほたるは心の中で二股かけてる分、羽柴氏より始末悪いかもよ？ようするに、東郷氏とはもう長いつきあいになるし、彼とは別れられないって思ってるんでしょ。でも数馬は結構……あいつは顔がいいってだけじゃなく、浮ついたところがなくて結構真摯なタイプの奴だから、あんたの気持ちが動くのもよくわかる。で、数馬がほたるのことを好きってのはっきりわかって以来、それまで仲良しこよしだった女子団員たちが、波が引いていくようにあんたのまわりからいなくなったってわけね」

「それでね、あたし……気づいたの」じんわりとまた瞳に涙を滲ませて、ほたるは続けた。「あたしがまわりのみんなとこれまで仲良くやってこれたのって、たぶんあたしが太ってて、演技の才能はともかく、他の面では抜かれる心配がないっていう見下し感がもともとあったからなんだなあって。でも、その部分でも対等かそれ以上になったりしたら、それまで内心では馬鹿にした分、今度はつきあいづらくなるんだなって。ユキだけは相変わらず仲良くしてくれるけど……正直、あたしには彼女の気持ちもよくわからない。無理してそうしようとしてくれるのか、それとも、他の女子団員たちが離れていったから、あたしのことを可哀想だと思ってくれるのか……なんにしても、ユキはあたしが翼と別れることだけは絶対ないって思ってるんだよね。」

これでもしそんなことになったら、あたしもう、レリックにはいられないと思う」

「なるほどね」

ずば抜けた演技力とスター性、その上美貌まで手に入れつつある女が身近にいたら、同じメスとして目障りだという、早い話がそういうことなんだろうとあたしは思った。

キャバ嬢をしている頃は、そういうライバル心のあるのが普通だったので、あたしにとってはむしろ、なんだか懐かしい話を聞いたような、そんな気さえした。

「で、結局あんたはどうしたいの？別に劇団なんて、レリックしかないっていうわけでもないでしょ。痩せた今のあんたが次にどこかのオーディションを受けたとしたら……あたし、かなりいい線いくと思う。だからこの際レリックを切って、数馬と全然別の世界へ逃避行っていう手もあるような気がするけどね」

「できないよ、そんなこと」と、ほたるは声を震わせた。「だってあたし、みんながいたからこれまでずっと頑張っただけなんだもん。翼だって、あたしが太ってようがなんだろうが、あたしがあたしだから好きなんだって、生まれて初めて言ってくれた人なんだよ？それなのに、ちょっと横からいい男の子が現れたからって、そのあとについていったりしたら、ろくなことにならないのは目に見えてるもん」

「う～ん。そっか。そのろくなことにならないってわかってて、フラフラとついて行っちゃうのが若さっていう奴なんだけどねえ。ほたるはすでにちゃんと分別があるから、わざわざあたしみたいに痛い目見なくても、そのことが先にわかっちゃうわけね。でもあたし……あんたのことをそそのかすわけじゃないけど、東郷氏を振って数馬とつきあうっていうのも、ほたるにとって悪い選択じゃないと思うのよね。なんていうか、そのほうがこう……ほたるにとってもっと<上>に行けるきっかけになるんじゃないかっていうか」

「<上>って？」

「まあ、上は上よ。で、下にいるのが東郷氏とか、他の一般大衆なわけ。俗にいう凡人。あるいは凡人に毛が生えた程度の才能しかない人たち。それで彼らはほたるが自分たちを置いて<上>にひとりで行ってしまうのが、無意識のうちにも嫉ましいわけよ。つまり、それが女子団員たちがあんたから一時的に離れた原因なんだと思うわよ。数馬があんたを好きって言ったっていうのもあるかもしれないけど、むしろそれはわかりやすい口実にすぎないんじゃないかっていう気がするな。なんにしても、スターっていうのはもともとそういう孤独に耐えなきゃいけないものじゃない？よくわかんないけどね」

「……ほんと、サクラってあたしにとっては女神さまだよ！」

そう言ってほたるは隣の椅子に座るあたしに抱きついてきた。

親子丼を届けて戻ってきたミドリさんが、その光景を見てくすくすと笑う。

「ほたるちゃんは奈々美ちゃんとすごく仲が良かったから——サクラちゃんとはそこまで仲良くなれないんじゃないかなって思ってたけど、全然そんなことなかったわね」

「ミドリさん！実はあたしも最初はそう思ってたの！何しろこの人、口は悪いし顔はお水系だし、あたしと共通点なんてひとつもなさそうに見えたから……でも最近、実はサクラみたいに「デブ！」とか「ブス！」って面と向かってはっきり言ってくれる人のほうが——そうは言わないけど、内心では哀れんでるみたいな人より、ずっといいんじゃないかっていう気がしてきたの。

なんか、自分でも不思議なんだけど」

「そうね。サクラちゃんはほんと、白黒はっきりしてるものね。いわゆる竹を割ったような性格っていうか、男前ならぬ女前っていうか。ようするに、姉御肌？」

「.....もう、ミドリさんまで！最近、＜ピヨッと鶏まる！＞でも店長にそう言われたし、最初は人のことビッチ呼ばわりしてた団員が、なんかやたら「姉御は～」とかって言うんだもん。あたし流石に極道の人とはつきあったことないから、そんなふうに言われても嬉しくもなんともないんだけど」

そうなのだ。なんかあたしは最近、背中に桜吹雪の刺青があるような人として、周囲から扱われつつあるような気がしている。

まあ、それがいいことなのか悪いことなのかっていうのは、あたし自身にもよくわからないのだけれど。

さて、色々な意味で待望の十二月二十三日、記念すべきあたしにとっての初舞台監督作品、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』が開幕となった。

千五百人が入る芸術文化センターの大ホール、真紅に金の縁取りが施されたベルベットの緞帳の前には、この舞台の登場人物のモデルとなった人たち——小山内克英氏、大谷嵐氏、ミドリさん、羽柴夫妻、潤子さんや久臣さんといった面々が中央の一番前の席にそれぞれ座を占めていた。

他に、大学の法学部を卒業したあと、例のラガーマンと結婚したR嬢こと二宮玲菜さん（旧姓沖田）にも招待状を送っておいたけれど、彼女は旦那さんの都合で十年も前に北海道へ転居しており、舞台は見たいけれど残念ながら介護の問題で来られないという通知があった。

そのかわり、楽屋へ続く廊下に並ぶ花の中でも、彼女は一等大きな目立つ花輪を贈ってきてくれていて——それが玲菜さんにとっても、ベルビュー荘がどんなに大切な青春時代の場所だったかを物語っている気がした。

まだ軽い挨拶と握手を交わしただけなので、あたしには小山内氏が本当はどんな人物なのかというのは、よくわからない。

でも、久臣さんが言っていた、例のステッキはやはり今も肌身離さず持っており、それを見ただけでやはり彼は「頭よすぎて凡人には理解できない」といった感じの人なのだろうとは思った。黒髪と白髪の混ざりあったふさふさの髪に、いかにも教授然といった気品のある横顔……あたしはその髪型のせいかどうか、彼に対して第一印象で（なんだかライオンみたい）と漠然と感じていた。

もっとも彼の場合、久臣さんの頭頂部が退化したのとは違い、髪の色に問題はなかったけれど——そのかわり、欧米型の長年の食生活が祟ったのかどうか、中性脂肪が隠しようもないほどズボンのベルトを圧迫しているようだった。

そしてジュンコ・スドウ・マッキンリーは、いかにも洗練されたニューヨーカーといった雰囲気身を纏った女性で、会った瞬間に思わずピリッとこちらの背筋が伸びてしまうような人だった。とても素敵なショートカットの黒髪に、オスカー・デ・ラ・レンタのシンプルなモスグリーンドレスがよく似合っている。ちなみに持っているバッグのブランドはプラダ、靴はグッチだろうとあたしは見ていた。

（あわわわ。ある意味作中の藤堂ジュンのイメージと似てるとはいえ……舞台を見たあとで、うん、もし潤子さんが芝居の途中で突然席を立ったりしたらどうしよう……）

あたしはそのことがとても心配だったけれど、残念ながらもはやどこにも逃げ場はない。

受付のところでそわそわしながら、来てくれたお客さん一人ひとりに丁寧に挨拶し、前の舞台『ゼウスとプロメテウス』の時にも来てくれた、レンの友人たち——今回もまた彼は十分に根回しをしていってくれた——に彼がいるかどうか尋ねられるたび、あたしは何度も胸が締めつけられるように苦しくなった。

アフガニスタンから戻ってこれそうなら、必ず舞台を見にきてくれるとレンは約束してくれた

けど、残念ながら開演五分前になっても、彼の姿は大ホールの前に現れなかった。レンはアフガニスタンで孤児院を運営するスタッフとして働く傍ら、孤児院の活動をブログで紹介するといった仕事もしているので、連絡をとるとしたらネットしか手段がないのだ。

奴は仕事以外では自分の携帯というものを持ち歩かないし、残念なことにあたしの携帯は国際電話対応機種ではない。

レンがネパールへ井戸掘りではなくアフガニスタンへ行ったと事務局の人に聞いてから――あたしはレンの所属するNGOのホームページで、アフガニスタン孤児院のブログを見つけるなり、早速そこに書きこみをしておくことにした。

もちろん、誰もが見るものなので、個人的な感情をぶちまけたりはしなかったけど、そのかわりとても丁寧な書き方でえらく遠回りに自分の言いたいことを伝えることにしておいた。迷惑になるとわかっていたから、そう度々書きこみをするのは控えるようにしていたけれど……とりあえず、レンのいる孤児院の場所は治安がかなりいいらしいとわかって、ほっとした。

それでも、三日前にどうしても我慢できなくなって書きこんだ、クリスマス前に帰国できるのかどうかという肝心の書きこみには、今も全然返事がないのだ。日本の事務局のほうにも、水嶋に帰国予定があるかどうかと問い合わせてみたけれど、「個人的なことでするので、ご返答しかねます」と冷たくあしらわれしまっていた。

（この事務局の女、もしかしてレンのことが好きなんじゃないでしょうね！？それであたしを頭のおかしいストーカー女かなんかだと思ってるわけ？）――思わずそう勘繰ってしまったけど、もちろんそうではないと思う。

なんにしてもあたしはこの開演の十八時という瞬間、舞台の上が気になるのはもちろん、自分が座っている座席に横並びになっている元ベルビュー荘の住人たちの反応も気になるわ、当然それ以外の観客がこの舞台を好きになってくれるかどうかにも気になる上、さらにはもしレンがやって来たらと後ろのドアのほうも気になって、本当に頭がどうにかなってしまいそうだった。

開演一時間前にはもう、舞台監督としてのあたしの役割はほとんど終わっていたとわかっていい。

あとはみんなのことを励ますために、大道具・小道具の美術の裏方含め、団員のひとりひとりに声をかけていった。

舞台出演者のうちの何人かのメイクも手伝ったし、どこか不安そうにしているヒロムには「一発抜いてきたらどう？」と冗談も言っておいた……すると彼は妙に真剣な顔のまま「ただの武者震いです」と答えたので、あたしは声にだして笑うのを堪えなくてはならなかった。

とにかく、舞台裏のことに関しては演出家のマッサー・アラカワがみんなのことを褒めたり励まし倒したりして、今ごろ魔法にかけているに違いない。「ユーもユーもユーもユーも、あんたたちは世界一の役者よ！120%自信を持って役になりきるの！わかったわね！？」――見なくてもその光景が目には浮かぶようだよ、とあたしが思っていた時、開演を知らせるブザーが鳴り響いて、幕が上がった。

千五百席のうち、埋まったのは大体千二百五十席弱といったところ。その観客全員から割れるような拍手がまずは巻き起こる。

舞台が終わった時にもお義理でない、同じくらいの喝采が欲しいと願いつつ、あたしは胃のあ

たりにぎゅっと力をこめて、自分の初舞台監督作品の、一観客になりきることにした。



『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』が終幕となった時――実は、観客席からは暫くの間、なんの反応もなかった。

そしてあたしはそのことに冷や汗を覚え、後ろを振り返ろうとした時に、最初に幕が上がった時以上の拍手が突然わき起こったのだった。

中にはしきりに口笛を吹いてくれる人や、後ろの座席には立って拍手をしてくれる人の姿も見え、あたしは本当に腰が抜けるくらい驚いた。

第一幕目、例の主人公デューク・サイトウが「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！」という登場シーンから始まって、あたしにとって一番胃の痛かったのが、自分にとって（受けてほしい）と思う場面で笑いが起きるかどうかということだった。

ついでにつけ加えておくと、最初のこのシーンで一番初めに遠慮なく大笑いしたのは、他でもない小山内氏だった。

彼の「わっはっはっはっ！」という独特な笑い方に続いて――他の観客も笑ってくれて、あたしはほっとする反面、素早くこう計算してもいた。

（今の笑いは果たして、本当に純粋に舞台に対するもの？それとも単に小山内氏の笑い方につられてってということ？）

それでも次の、羽柴リョウが「なーにが「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！」だ」と彼が敵対心を剥きだしにしてデューク・サイトウに迫る場面――そこが観客主導で受けたために、あたしはかなりのところホッと胸を撫で下ろしていた。

デューク・サイトウ：「羽柴君、「なーにがハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッだ！」って言うけど、たった今、君だって僕とまったく同じことを言ったじゃないか」

羽柴リョウ：「なんだって！？」

大谷アラシ：「まあまあ、リョウさんも落ち着いてくださいよ。「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！」のどこが悪いっていうんですか？何しろここは貧乏下宿のベルビュー荘、気合でも入れないことには、毎朝とても起きてくる気力もわきませんよ」

デューク・サイトウ：「そうとも、羽柴くん。君も耳を澄まして聞いてみたまえ。そよぐ春風、可愛い小鳥たちの鳴き声……生きてることは素晴らしいよ、うん。さあ、だから一緒に！！」

サイトウ&アラシ：「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！！」

羽柴リョウ：「アラシ、おまえっ。俺よりもこんな変な男の肩を持つ気なのか！？」

大谷アラシ：「そんなわけじゃありませんよ。ただ、なんか楽しいじゃないですか。さあ、リョウさんも一緒に」

サイトウ&アラシ&リョウ：「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！！」

羽柴リョウ：「俺にまでやらせるなっ！！」

デューク・サイトウ：「ははっは〜。さあてと、そろそろ七時だから、僕は朝ごはんを食べなくちゃ。諸君、一足先にしっつれーい！！」

(デューク・サイトウが舞台の片側にセットされた食堂へ移る。そのあとを追いかけるリョウとアラシ。食堂の壁時計は当然、七時を指している)

――ここで笹谷ユリ役のほたるの登場となる。あたしはデューク・サイトウと大谷アラシと羽柴リョウの三人が「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！」と動作を揃えたところで、観客が大受けしてくれたことが嬉しくて堪らなかった。内心、滑ったらどうしようと思っていただけに……意外に一般ピーポというのは、手のこんだギャグなどより、あくまでベタなほうが受けるのかも、と思ったほどだった。

食堂での食事場面は、デュークとリョウとアラシの三人が、管理人の娘ユリに全員惚れているらしいと印象づけるのが目的だった。彼ら三人はユリの作った玉子焼きやらフレンチトーストやらコーヒーの味やらを褒めそやし、それぞれ好意をアピールするのだけれど、食事の最中に突然、ゴキブリが現れる。

ユリ：「キャー――ーッ！！ゴキブリっ！！」

リョウ：「待っていてください、ユリさん！この俺が今、必殺のスリッパ・アタックでブリゴキメを一網打尽にしてやります！！」

(こんにゃろ、こんにゃろと一生懸命スリッパの裏でゴキブリ三匹を倒そうとする羽柴リョウ)

アラシ：「キャー――ーッ！！リョウさん、こっちにもゴキブリが〜っ！！」

(アラシがユリの後ろに隠れて、新たに現れたゴキブリ二匹から逃げようとする)

リョウ：「くそっ、まったくしつこいゴキブリだなっ。おい、アラシ、おまえ女じゃないんだ

から、男なら俺と一緒にこの巨大なゴキブリと戦えっ！！それとデューク、てめーも何をのんきにトーストに齧りついてるんだ！！」

デューク：「ふん、ゴキブリが五匹出た如き、なんだっていうんだい？戦時中はゴキブリだって立派な食糧だったっていうじゃないか……だがまあ、哀れな小市民を救うため、僕が必殺の新兵器を君たちに見せてやろう！！」

(優雅に足を組んでコーヒーをすすっていたデューク、すっくと立ち上がると手にしていた杖から、プシューッ！！と何かスプレー剤のようなものを巻き散らす)

リョウ：「ゴッホ、ゴッホッ。なんだこの、白い煙みたいなものは……」

デューク：「害虫撃退スプレーさ。さあユリさん、こんな害虫のことは放っておいて、僕と一緒に散歩にでも行きませんか？」

ユリ：「は、はい…… (顔を赤らめて、白い手袋をはいたデュークの手をとる)」

リョウ：「だーれが害虫だっ！！ゴキブリと人間さまの俺を一緒にしてんじゃねえぞっ！！つーか、アラシ。おまえマジで失神してんのか！？おい、しっかりしろ！！」

デューク：「あ、言い忘れてたけど、このスプレー剤にはゴキブリだけでなく、人間にとっても有害な物質が含まれてるんだ。でも心配いらないよ、たぶん数分後には大谷くんも目が覚めてるだろう……それでは諸君、アディオス！！」

リョウ：「おい、デューク！！アラシの奴、マジで白目剥いてるぞっ！！つーか、口から泡もでてきた……お、俺、もうなんにも知ーらねっと！！」

(デュークはゴキブリにも効くと言っていたが、むしろ巨大なゴキブリたちは元気になり、わさわさと失神したアラシの体を覆っていった……目が覚めた時、彼がもう一度失神したのは、言うまでもないことだったろう)

短いナレーションが流れ、作り物の大きなゴキブリたちがアラシの体を覆ったところで、舞台が暗くなる。そして最後に「ひいいいィ〜」っと情けない男の声がしたところで、第一幕は終わりだった。

そして第二幕。桜並木へ散歩にでたデュークとユリは、てっきりいい雰囲気になるかと思

きや、全然そうはならない。

デュークは片手に虫取り網を、また肩からは虫籠を下げており、まるで子供のように花に群がる蝶やピョンピョン跳びまわるバッタを捕まえるのに夢中なあまりユーリの存在など、まるで眼中にないのだった。

それでも彼女がデュークのことをもっと知りたいと思い、思いきって話しかけてみると……。

ユリ：「あ、あの、デュークさん。随分昆虫がお好きなんですね？」

デューク：「うむ？僕に何か言ったかい？」

(そう言ってくるりとユリのほうを振り返ったデュークの手には、タランチュラのような大きな蜘蛛が手に握られている)

ユリ：「キャーーーーッ！！」

デューク：「はっはっはっ。駄目だなあ、これだから女の方は。いいかい、見ててごらん？」

(デューク、手の平にのせたタランチュラを、地面に下ろす)

ユリ：「キャーーーーッ！！」

デューク：「ほーら、僕がタランチュラの上に手をかざすと……タラちゃんは動かなくなるだろ？でも僕が影を作らなくなると……」

(サカサカサカッとタラちゃんが再び活発に動く)

ユリ：「……………！！」

デューク：「でもまた僕がタラちゃんの真上に手をかざして影を作ると、タラちゃんは動かなくなるんだ。どんな生物にも習性っていうものがあるからね、そこを理解してやれば、たとえタランチュラでもゴキブリでも、怖れる必要はまるでないのさ」

ユリ：「デュ、デュークさん。タラちゃんって、このクモの名前なんですか？」

デューク：「いかにも。タランチュラのタラちゃん。そして僕は今、自分が飼っている他の脱走したタランチュラを捜索してるところなんだ。名前がチュラちゃんとララちゃん。ユリさん、僕と一緒に名前を呼んで彼らを探してもらえませんか？」

デューク&ユリ：「チュラちゃ〜ん、ララちゃ〜ん！！」

(草むらからもう一匹、タランチュラの姿が現れる。「おお、そんなところにいたのかい？」  
と言ってクモに近づき、デュークが頬ずりする)

デューク：「何故僕の元から逃げたりしたんだい？きのうあげたエサのコオロギが美味しくなかったのかな.....まあ、いいや。かわりに僕が今捕獲したばかりの新鮮な虫を君にあげよう」

ユリ：「.....デュークさん、もしかしてあなたが昆虫をとっていたのって.....」

デューク：「いかにも。彼らにエサとして与えるためだよ」

ユリ：「(絶句)」

デューク：「さあて、と。あと、残る一匹はタランチュラのララちゃんだけだな。お〜い、ララちゃ〜ん！！」

ジュン：「もしや貴様が探しているのは、この忌々しいクモのことではあるまいな？」

ユリ：「ジュンちゃん！！」

デューク：「タランチュラを素手で驚ぶかみにするとは.....なかなかやるな、ジュンとやら」

ジュン：「ふん。タランチュラは猛毒を持っていると一般に信じられているが、実際にはタランチュラの毒で死んだような人間はいない。無知な人間どもの一種の妄信だ」

デューク：「で、でも噛まれると相当痛いぞ！！」

ジュン：「ということは貴様、自分の飼っている毒蜘蛛に噛まれたことがあるということか...  
...ざまあないと、まさにこのことだな」

デューク：「な、なんだ！？貴様、なんとなく僕とキャラが被ってるぞっ！！女のくせに黒のタキシードに蝶ネクタイなんか締めて、一体どういうつもりだ！？」

ジュン：「ふん。女が男の格好をしてはいけないという法律でもあるのか？貴様こそ、そんな白いタキシードに蝶ネクタイなどという気障な格好をして、これから七五三にでも行くつもりで

はあるまいな？」

デューク：「くっ、くそっ！！なんかよくわからないが、この僕が押されている……！！ユリさん、このジュンとかいう女、一体何者なんですか！？」

ユリ：「ジュンちゃ～ん！！」

(ユリ、幼馴染みのジュンの胸の中に飛びこんでいく)

ジュン：「ああ、私の可愛いユリ。心配したよ……公園の木の上で休んでいたら、ユリの叫び声が二度も聞こえたからね。まさかとは思いますが、そこの下衆な男に、何かされたんじゃないだろうね？」

デューク：「こ、この紳士の僕に向かって、よりもよって下衆だと！？」

ユリ：「ううん、大丈夫よ、ジュンちゃん。デュークさんとはただ、いなくなったタランチュラ探しをしてただけだもの。それより、今日の三時のおやつはジュンちゃんの好きなホットケーキよ」

ジュン：「ユリの作るホットケーキは絶品だよ。もちろん、ホットケーキだけじゃなく、ユリの作るものはなんでも美味しいけどね」

ユリ：「やだもう、ジュンちゃんったら！！」

(ジュン、ユリの肩を抱いて、いちゃいちゃしながら公園を去っていかうとする)

デューク：「ままま、待て～い！！なんかおかしいぞっ！！このどこか宝塚的なノリ……そして僕は今、確信した。おそらくユリさんを巡る最大のライバルは羽柴でも大谷君でもなく、このジュンとかいう女であることを！！」

ジュン：「ふん、覚えておくがいい。この下衆め。清純なユリのごとは、この私が決して誰にも渡しはしない！！デュークとやら、宣戦布告のかわりに、一応こちらから名乗っておこうか。私の名前は藤堂ジュン！！人呼んでベルバラのジュンとは私のごとさ！！覚えておくがいい！！」

デューク：「べ、ベルバラのジュンだと！？まさか、ユリさんがユリだったなんて、僕はそんなこと、絶対信じないぞっ！！いや、ユリのごとは絶対にこの僕がまともな愛の道へと戻してみせる！！」

――ここで最後に、白いマントを翻して走り去るデュークの肩より、タランチュラが一匹、ポトリと落ちる。

そして第二幕は終了となるのだけれど、あたしは隣に座る潤子さんが、どんな顔をしているだろうと心配でならなかった。中央、一番前の座席は、舞台後ろから見て大体次のような席順になっている。一番左の座席に小山内氏、その隣にミドリさん、そして次が大谷氏で、その隣が羽柴夫妻、久臣さん、潤子さん、そしてわたしの順だった。

だから最初のデューク・サイトウの「ハイッ、ハイッ、ハイッ、ハイッ、ベルビューハイッ！！」のシーンで、彼女がピクリとも笑っていないことが、あたしにはよくわかっていたので。

そしてあたしがおそろおそろといった態で隣の潤子さんの様子を窺おうとしていると――座席の腕木にのせられた彼女の手が、微かに震えているのがわかった。

（まさか、震えるくらい怒ってるのか？）

一瞬、そう思ったけれど、実際にはそうではなく、潤子さんはもう片方の左手で口元を覆い、なんとか必死に笑いを噛み殺しているのだった。人への共感性に乏しく、割合無神経だという小山内氏とは違い（彼はモデルになった自分にしかわからない箇所を、遠慮なく笑っていた）、常識的社会人である潤子さんは決して同じ真似をしなかったということだ。

なんにしても、ほっとしたあたしは、再び座席の椅子に深く掛け直して、第三幕が始まるのを待った。

### 第三幕 ベルビュー荘の女子寮と男子寮

ハルミ：「ユリったら、まったく罪な女ね！！男子寮の男どもをすっかりメロメロにしちゃって！！」

レイナ：「そーよう。それにズルいわよ。食事で男どもの胃袋をつかむと同時に、心まで一緒につかむだなんて！！」

ジュン：「まあ、そう言うなよ。ユリだって好きで男子寮に出入りしてるってわけじゃないさ。奴らの食事を作るのは、ユリの管理人としての仕事なんだから、仕方ないだろ？」

ユリ：「うん……でも、みんなが美味しそうにガツガツ食べてくれるのを見ると、少し嬉しかったりもするんだけど」

レイナ：「じゃあ、やっぱりそうなんじゃない！！ユリ、男子寮の中に誰か、この人いいなって思う人とかいるの？」

ユリ：「べ、べつにあたしは……そんな人、いないけど」

ハルミ：「あ、今なんか赤くなった。っていうことは、誰かいるのね！？白状しないと……」

(ハルミ、レイナと目配せしあって、ユリを両方からちょこちょこの刑にする)

ユリ：「や、やめてってば！！そう言うハルミは、羽柴くんのことが好きなんでしょ！？」

ハルミ：「……………！！」

レイナ：「まさか、本当にそうなの！？あんなワンダーフォーゲル部の筋肉バカ、一体どこがいいって言うのよ！？」

ハルミ：「羽柴くんは筋肉バカなんかじゃないわよっ！大体バカが医学部に入れるほど、世の中甘くないもの。あたしはただ、彼とは同じ医者を目指す者同士として、お互いを高めあいたいと思ってるだけっ」

レイナ：「お互いを高めあうですって？うっわー、ウザッ。結婚したら、ハルミってこう言って旦那を出迎えるタイプなんじゃない？「あなた、お風呂にします？それともお食事？いいえ、お互いを高めあいましょう！！」なんて言って、男がまったく安らげないタイプよ、たぶん」



ハルミ：「うるさいわねっ。とにかく、羽柴くんとは友達以外のなんでもないんだってばっ！！」

ジュン：「そう言うレイナも、ラグビー部のキャプテンとつきあってるんだから、筋肉バカっていう意味では、彼も五十歩百歩っていう気がするけどね」

レイナ：「もう、ジュンは男のことに関しては辛口なんだからっ。それより、あのデューク・サイトウとか名乗ってる男、マジでちょっとイカれてるんじゃない？いつも白づくめのスーツ着てステッキ持ってるところからして、どうかしちゃってるわよ」

ジュン：「でもあいつ、ああ見えて頭いいんだぜ？何しろ、うちの大学の入試、トップの成績で入ったらしいから」

レイナ：「ええっ！？あの変人そうに見える男が！？」

ハルミ：「それだけじゃなくて、物理学の天才だっていう、もっばらの評判よ。天才とバカはなんとやらっていうタイプなんじゃない？きっと」

レイナ：「へえ～。じゃあもし、彼と結婚したりしたら、将来はノーベル物理学賞夫人になれたりしちゃうわけね？そして羽柴くと結婚できれば院長夫人になれるかもしれない、と……でも、そのふたりに比べて、残るひとりの大谷くんだけ？彼はちょっとパツとしない感じね。見た目もなんか暗そうだし、それでいて名前はアラシだなんて、完璧に名前負けしちゃってる感じじゃない？」

ユリ：「あら、そんなことないわ。大谷さんはとてもいい人よ。あの人はきっと、心の内側のどこか深いところに激しい嵐を持ってるんじゃないかしら。でも今はまだ、ベルビュー男子寮唯一の常識人にしか見えないかもしれないわね」

――一方、こちらはベルビュー男子寮。

アラシ：「はーっくしょん！！あれ、おかしいな。風邪でもひいたかなあ」

リョウ：「女子寮の女どもがきっと、何か噂してるんだろ」

アラシ：「やだなあ、リョウさんは口を開けばすぐに女性の話しかしないんだから……それより、なんでリョウさんが僕の部屋にいるんですか？勉強の邪魔になるので、さっさと自分の部

屋へ戻ってくださいよ」

リョウ：「おまえ、どうしてアラシなんていう名前なのに、そんな常識的でつまらないことしか言わないんだ？」

アラシ：「名前のことは言わないでください……僕だって気にしてるんですから。なんでも、僕が生まれた日っていうのが物凄い嵐の吹き荒れた夜のことらしくて、それで親父がこの名前にしたんですよ」

リョウ：「ふう～ん。でもデューク・サイトウの奴、本当は本名、斉藤正っていうらしいぜ。正義の正って書いてタダシ……なんかすげえダッセえって感じだよな。だから自分のこと、デュークとか名乗ってるらしいぜ」

デューク：「僕の名前のことは言うなあっ！！」

(バーン！！とドアを開けて、デュークがアラシの部屋へずかずかと入ってくる)

リョウ：「なんだおまえ、盗み聞きか？その白づくめの格好といい、まったくいい趣味してやがんな」

デューク：「何をいう、羽柴くん。紳士のこの僕が盗み聞きなんて、するわけがなからう……それより、今度はタランチュラのタラちゃんが行方不明になった。実験動物のマウスをケージに入れたら、臍を曲げて家出したらしい」

アラシ：「実験動物のマウスって、ようするにネズミのことですよ？そりゃタラちゃんも臍曲げますって」

デューク：「いや、大谷くん。君は何か誤解しているようだが……マウスはタラちゃんたちのエサとして放りこんだのだよ。ネズミにネズミ花火を巻きつけたらどうなるか、実験してたら失神したので、タラちゃんのエサにすることにしたのだ」

アラシ：「っていうか、マジでいつも何やってんですか、サイトウさんって。というより、タランチュラってネズミも食べるんですか！？」

デューク：「食べるとも。他に、鶏のササミなんかも大好物なんだよ。それと、大谷くん。君のその美味しそうな足の肉なんかもね……イーヒッヒッヒッ！！」

アラシ：「（ぞ～っとするあまり、突然必死になって、ベッドの下など、クモが隠れていそうな場所を探しはじめる）」

リョウ：「まったく、いちいちこの変人の言うことを真に受けてんじゃねえぞ、アラシ。なんにしても、俺はもうアツタマにきた！！いつてめえの部屋からタランチュラが逃げだすか、ビクビクすんのにウンザリだ！！こうなったらデューク、俺と勝負しろ！！もしおまえがこの勝負で負けたら、ここベルビュー荘から出ていけ！！わかったか！？」

デューク：「ほほう、この物理学の天才である僕に対して勝負を挑むとは、命知らずな奴め... ..で、どうする？ゴキブリレースがいいか？それともカエルのジャンプ競争.....」

リョウ：「ふん、何小学生みたいなこと言ってやがる。悪いが俺はワンダーフォーゲル部で鍛えて、足腰には相当自信がある。てめえみたいな頭でっかちの理論でコチンコチンになってる奴が、もし壁のぼりをして勝てるっていうんなら——どんな手を使ってもいい、この俺様に勝ってみろ！！どうだ、この勝負、受けてみるか！？」

デューク：「いいだろう。相手のもっとも得意とする分野で打ち負かしてこそ、まことの紳士たるに相応しい.....その勝負、受けてたとうじゃないか、羽柴くん！！」

アラシ：「もう、ふたりとも何言ってんですか。それより、真面目にちゃんとタラちゃんを探しましょうよ。僕たちがこんなことを言ってる間にも.....って、あれ？」

（デュークとリョウ、ふたりは早速競いあうようにアラシの部屋を出ていった）

アラシ：「なんにしてもとりあえず、僕の部屋にタランチュラはいないみたいだ。良かった～。これで枕を高くして、ぐっすり眠れるぞ！！」

（そしてこの日の夜遅く.....ベルビュー荘の男子寮では、依然として行方不明のままだったタラちゃんが、廊下の上を行ったり来たりして徘徊していた。アラシのいる3号室の前へ来たかと思うと、次は1号室のリョウの部屋の前へ.....そしてドアの狭い隙間からもぐりこむと、いびきをかいているリョウのベッドの上へのぼっていった。そして彼の顔の上まで到達したところで、「ヒィィィッ！！」という叫び声があたりに響き渡る。それで第三幕は終わりだった）

#### 第四幕 女子寮とターザン

アラシ：「デュークさん、リョウさん本気ですよ。あの人、本当に本気で怒ってますから、もしこの勝負に負けたら、ベルビュー荘を出ていかなくちやならなくなりますよ」

デューク：「フッ。この僕があんな筋肉マッチョの、脳みそまで筋肉で出来てるようなバカに――負けるはずがないじゃないか。でも大谷くん、君が本気で僕を心配してくれてるのがわかって嬉しいよ……君こそジャイアンがよく言っている〈心の友〉って奴だ」

アラシ：「いやあ、そんな……でも本当に、こんな洗濯紐を女子寮まで渡したようなもので、大丈夫なんですか？この上に滑車をつけてターザンよろしく女子寮の屋上まで到達するっていうのは、一応理論としてはわかりますけど……こうして見ると意外に、地面まで距離が結構ありますよ」

デューク：「あの筋肉バカが女子寮の壁をのぼって屋上まで到達するのが約20.53秒……その点、この強化洗濯紐を使って滑車で向こうへ渡れば、必ず奴に十秒以内のタイムで勝てる！」

アラシ：「それにしても、なんで女子寮の壁なんですかね。リョウさんもこんなこと、男子寮の壁でやればいいのに」

デューク：「そのほうがやる気ができるとかなんとか言ってたぞ。そら、筋肉バカとスケベゴリラを足して二で割ったような奴のお出ました」

(リョウが上半身裸、ピッチピチのスパッツをはいた格好で、ボディビルダーのように上腕筋を見せびらかしながら、舞台の前面を歩いていく。ちなみにBGMは、マッチョマン☆)

ハルミ：「キャーッ。羽柴くん、素敵な筋肉！！」

リョウ：「ハッハッハッ。どうもどうも、女子寮の諸君。ご機嫌いかがかな？ちなみにこんなことも出来ちゃうよ」

(リョウ、右手だけで腕立て伏せをし、次には左手だけで腕立て伏せする)

ハルミ：「ますますステキ！！」

レイナ：「一体アレのどこがよ？」

ジュン：「恋は盲目っていうからな」

ユリ：「まあまあ、ふたりとも……」

(ここで、リョウが男子寮の屋上にいるデュークとアラシに大きな声で呼びかける)

リョウ：「さあ、ギャラリーも揃ったことだし、そろそろ勝負というこうじゃないか、斉藤タダシ！！」

デューク：「くそっ。筋肉バカが調子に乗りやがって……僕のことを本名で呼んだが最後、どうなるか思い知らせてくれる！！さあ、勝負だ、羽柴リョウ！！」

(ジュン以外、チアリーダーの服を着ている女子たちに混ざって、突然同じチアリーダー姿の女性レフェリーがマイクを手にして現れる)

レフェリー：「どうも、どうも。わたくし、この勝負の審判を務めさせていただきます、羽柴先輩の後輩で〜す。まあ、同じワンダーフォーゲル部の後輩といっても、身びいきは致しませんので、どうぞご安心を！！

それでは、ふたりとも位置についてください。ようい、スタートッ！！」

(女子寮の屋上にかけてフックから伸びるロープを、壁を蹴って巧みに上っていこうとする、羽柴リョウ。

一方、デューク・サイトウはというと……)

デューク：「さあ、大谷くん。この強化洗濯紐の力を信じて、女子寮まで滑車を使ってひとつとびするんだ！！」

アラシ：「ええっ！？冗談やめてくださいよ。こんな勝負、僕にはなんの関係も……」

デューク：「何をいう、心の友よ！！君はさっき、僕のためなら命を投げ捨てても構わないと言ったばかりじゃないか！！」

アラシ：「言ってませんでば！！勝手に話を捏造するのはやめてください！！」

デューク：「ああっ。あの羽柴のバカはもう数秒で屋上へ到達するぞっ！！

なんという友達甲斐のない奴だ、君はっ。見損なったぞ、てっきり君がアラシを巻き起こして、僕を救ってくれると思ったのにつ。かくなる上は……」

アラシ：「僕が、アラシを巻き起こす……」

レフェリー：「おおっと、どうしたデューク・サイトウ！！何か揉めているようだぞ！？  
その間にも羽柴先輩は壁を巧みに上っていく……流石はワンダーフォーゲル部！！女子に見せびらかす以外にも、どうやら筋肉の使い道があったようだ！！  
この勝負、我がワンダーフォーゲル部の星、羽柴リョウの圧倒的勝利となるか！？」

(アラシが滑車のついた乗り物に手をかけているのを見て、ユリがレフェリーからマイクを奪い取る)

ユリ：「アラシさあん、がんばってえ！！お願いだから、デュークさんをベルビュー荘から出ていかせないで！！」

アラシ：「ゆ、ユリさん！！僕はあなたのためなら、このインチキくさい乗り物に乗ってたとえ怪我をしたっていい！！」

(ところがこの時、意を決したアラシが男子寮の屋上から飛び出すのと同時に、ハングライダーを身に着けたデュークが、風によって屋上の床を蹴っていた――そして、ちょうどリョウは屋上のでっぺんに手をかけるところだったけれど、その前にデュークが女子寮の屋上へスタッと足を着けて着地している)

レフェリー：「おおっと、これはなんとも意外な展開に！！  
もしかして、洗濯紐はただのフェイクで、ライバル・羽柴の目を欺くためのものだったのか！？

デューク・サイトウ、ものの3秒とかからず、女子寮の屋上へ到達！！  
この勝負、どうやら最初の予想とは裏腹に、鍛え上げられた筋肉ではなく、デューク・サイトウの頭脳の勝利となったようだ！！」

デューク：「ふふん。これぞ物理学の勝利だ」

リョウ：「くそっ。貴様が毎日夜遅くまで何かしているのは知っていたがな……まさか、そんなパッチワークでつぎはぎのハングライダーを作っていたとは。まったく命知らずな奴だ。負けたぜ、デューク。俺の完敗だ」

デューク：「君こそ、毎日ダンベルを持ち上げて、腕の筋肉を無駄に極限まで鍛えていたじゃ

ないか。

まったく、僕には理解できないよ。そんなことをして一体何が楽しいのか……  
けど、まあいい。

これでユリさんの美味しい食事をこれからも食べられる」

アラシ：「うわああああっ。デュークさん、助けてくださいよォ！！」

(男子寮と女子寮の中ほどで、宙ぶらりんになっているアラシ。と、その時ふと、プツリと洗濯紐が無情にも切れた)

ユリ：「アラシさんっ！！」

レフェリー：「おおっと、この勝負になんの関係もないはずの男子寮の住人が、どうやら怪我をしたようだぞ！？」

誰か、霊柩車、じゃなくて救急車を呼んでくださーいっ！！」

(ピーポー、ピーポーというサイレンの音ともに、救急車が止まる音、そして発進する音が響き渡る)

リョウ：「……あいつ、生きてるかな」

デューク：「まあ、命に別状はないだろう。僕は骨折なんてしたことがないから、どのくらい痛いのかは想像も出来ないけどね」

(場面が変わり、病院の一室となる。片足にギプスをして、吊り上げている格好のアラシが、ベッドの上に横たわっている)

ユリ：「アラシさん、怪我のほうは大丈夫？」

アラシ：「は、はいっ。ユリさんの笑顔と手厚い看護さえあれば……こんなの、屁でもありませんよ」

(ここでドアを開けて、リョウとデュークのふたりがやってくる)

リョウ：「よう、アラシ。足の具合はどうだ？」

デューク：「まさか君が僕のために、命まで賭けてくれるなんて思いもしなかったよ。大谷くん、君こそまさに僕にとって、真心からの友人だ」

アラシ：「ってというか、デュークさんがその論法で僕を脅迫したんじゃないですかっ……って、いてて」

ユリ：「アラシさん、しっかりして。大丈夫？看護婦さん呼びましょうか？」

リョウ：「ひゅうひゅう。いいね、いいねえ。なんか新婚の夫婦みたいだぞ、ふたりとも」

アラシ：「何言ってるんですか、やめてくださいよ。ユリさんはあくまで管理人として心配してくれてるんですよ」

ユリ：「（真っ赤になって、下を向く）」

デューク：「なんにしても、今回の勝負は僕の勝ちだ。これでもう、絶対に誰にも僕のことを本名でなど呼ばせないぞっ！！」

リョウ：「別に、本名で呼んだっていいじゃん。第一、タダシって名前のどこが気に入らないんだよ？」

デューク：「タダシっていうなあっ！！僕は、その名前のせいで周囲から正しいことを行うよう、強制されてる気がするんだっ。だから小学生の時には自ら進んで学級委員に立候補し、中学・高校では生徒会長に立候補した……公園にゴミが落ちていけば拾い、いじめられっ子のごとは嫌々ながらも庇ってやった。でも大学へ入ったからには、もうそんな呪縛とはオサラバしたいんだっ！！」

リョウ：「……変な奴。それにおまえ、もしタダシって名前じゃなかったとしても、やっぱり学級委員長になったり、生徒会長になったりしてたんじゃねえの？大体、普段からそんな格好してるところからして、目立とう精神がもともと強いんだよ、デュークは」

アラシ：「ははっ、確かにそうですね。ってというか、目立とう精神って死語ですよ、リョウさん。

でも、デュークさんの気持ち、僕にはなんとなくわかります。僕もこのアラシなんていう名前のせいで、随分嫌な思いをしてきましたから……学校の先生には、「おまえが中心になってクラスにアラシを巻き起こしてみろ」とか、変な期待をされたり。「アラシっていう名前のわりに、大谷くんって全然つまんないよね」って女子に言われたり。



揚げ句の果てには、某アイドルグループの誰にも似てないよねって言われたり……

」

デューク：「大谷くん、君も名前のこと随分つらい思いをしてきたんだな。

その気持ち、物凄くよくわかるよ」

アラシ：「デュークさん。僕の怪我のことなら、気にしないでください。

あの時、デュークさんに頼ってもらえて、僕、なんでかわからないけど、凄く嬉しかった。

僕みたいななんの取り柄もない凡人でも、デュークさんみたいな人のために役に立ってるんだなって思って」

リョウ：「あ、それは違うぞお、アラシ。この世界がもしデュークみたいな変人の巣窟にでもなったら、むしろおまえみたいな凡人が希少種として尊重されるようになるんだ。そうだな、この世界は凡人10人に対して変人が1人くらいの割合でいるってのが、たぶんちょうどいいんじゃないか？」

デューク：「まあ、アリの世界の働きアリ10匹に対して、そのうち2匹がまったく働かずに怠けてるっていうのと似たような論理だな、うん」

リョウ：「うんって、おまえ自分が変人だって、本当に自覚してんのかよ？」

デューク：「失敬な。これほど頭脳の優れた僕が、大谷くんのような凡人如きと一緒にあはるまい？」

ユリ：「（くすくすと笑いだす）」

アラシ&リョウ&デューク：「（ユリにつられるように、三人で声を揃えて笑う）」

――この第四幕は、意外なことにとっても苦心した。

脚本を書くのが難しかったということではまったくなく、舞台の見せ方としてどうするかで、裏方の美術さんたちと相当話し合いを重ねることになったのだ。

デューク・サイトウは、羽柴リョウが壁を登りきるタイムを20.53秒と言っているけれど、当然これは出鱈目というか、適当な数字だ。舞台の上を見る以上、小学生だってそんなにかからず、簡単に屋上まで登れるのは一目瞭然といったところ。まあ、そこは東郷氏の演技力でうまくカバーしてもらって時間を稼ぐにしても……つぎはぎパッチワークのハングライダーでどうやってうまくデューク・サイトウをピーターパンのように飛ばすか、また大谷アラシが宙ぶらりん

になる危機感を、どう演出するか。

ここは本当に難しいところだったけど、最終的にその部分はみんなで力を合わせて最善を尽くしたのち—あとは「観客の力を信じる」ということになった。つまり、舞台を見るお客さんの「想像力を信じる」ということだった。

たとえば、大谷アラシが宙ぶらりんになって下まで落ちる距離は、実際には三メートルにも満たないわけだけれど、彼が草むらの中へ落ちたあと、リアルにポキリという音がすることになっている。そして救急車がピーポーピーポーとやってくるという、なんともベタなパターンではあるけれど、客席にいてわたしが感じた感触としては、受け具合からいっても成功したように思う。

舞台上の役者たちの力については、わたしはそれこそもう120%以上信頼していたけれど、この時初めて「観客の舞台を見る力」を信じることも大切なのだと、そのことにふと思い至っていた。

## 第五幕 恋の季節

(第二幕では、桜の花が舞っていた公園が、すっかり紅葉している。

そしてそのもみじやイチョウといった樹々の間を、ハルミとリョウのふたりが手を繋いでやってくる)

リョウ：「は～るみちゃん♪」

ハルミ：「なあに、リョ～ウさん♪」

(ここで、暫くふたりでイチャイチャしたあと、公園のベンチに座っているアラシに、バカッフルはようやく気づく)

リョウ：「おやおや？ヴェルレーヌの詩なんか読んじゃって、一体アラシくんはどうしちゃったのかな？」

ハルミ：「あら、何か恋の悩みでもあるの、アラシくん？あ、そういえばアラシくんはユリのが好きなんだっけ？」

アラシ：「(ふ～っと溜息を着く) 両思いでお幸せなふたりには、僕の胸の内の苦しさなんて、どうせわかりっこありませんよ」

ハルミ：「あら、そんなことないわよ。あたしだって、リョウさんとこうしてカップルになるまでは――苦しい片想いをしてたんですもの。お姉さんに話してごらんなさいよ、アラシくん。もしかしたら、何か協力できることがあるかもしれなくてよ？」

リョウ：「そうだぞ、アラシ。思いきって試しに話してみろって」

アラシ：「……その、僕が気になってるのは、デュークさんのことなんです」

ハルミ：「デュークって、あの2号室でタランチュラを三匹飼ってる、相当な変人のデューク・サイトウさんのこと？」

アラシ：「ええ、その変人のデューク・サイトウさんのことです。彼、なんかアメリカの大学に留学するっていう話があるらしくて……」

リョウ&ハルミ：「(驚いて) 留学!？」

アラシ：「そうなんですよ。アメリカのボストン大学。あの人の日常生活を見てると、とてもそうは思えないけど――あの人、本当はスペシャル級に頭のいい人らしいんです。小さい頃から英才教育を受けてたとかで、英語もペラペラですしね。ついでにドイツ語やスペイン語、フランス語なんかもしゃべれるらしいです。あと国際共通語のエスペラント語なんかも」

ハルミ：「へえ～。まさしく天才と馬鹿は……じゃなくて、ウォッホン。それで、アラシくん。あなたは仲のいい下宿の友人がベルビュー荘を去っていきそうだから――それで元気がないってこと？」

アラシ：「ええ。なんていうか……デュークさんはユリさんのこと、どう思ってるのかと思って」

ハルミ：「どうって？」

リョウ：「はは～ん、なるほど。わかったぞ！アラシ、おまえはトンビに油揚げよろしく、デュークの奴がユリさんをアメリカへ連れていったらどうしようって思ってるんだな！？」

ハルミ：「ああ、なるほど！そういうことね。だったら何も心配ないんじゃない？ユリは内気な性格だし、英語も全然しゃべれないのに、突然アメリカへいくような度胸なんてこれっぽっちもないような子だもの。それに、あたしの見たところ、ユリはデュークなんかより、アラシくん、あなたのほうによっぽど心惹かれてるんじゃないかしら？」

リョウ：「……それは、確かな話なのか？」

ハルミ：「はっきり聞いたわけじゃないけど、まあ、女の勘ってやつよ！女の勘！」

アラシ：「本当にそうでしょうか。僕は違うと思います……なんていうか、ユリさんは僕を男としては見てない気がする。単に友達として、デュークさんやリョウさんよりは、僕とのほうが話しやすいついていうだけなんだと思います。そしてデュークさんは、ああ見えて結構……鈍そうに見えて鋭いところのある人です。だから、僕がユリさんのことを好きだっていうのをわかって、友達の僕を差し置いて、横から彼女のことを奪っていくようなことをするとは思えない。そう思うとなんだか、ここのところ胸がモヤモヤして……」

リョウ：「な～るほどなあ。まあ、いわゆる三角関係つつーか、青春の悩み、恋と友情の板ばさみってやつだ！そら、苦しいわなあ」

アラシ：「……人ごとだと思って。リョウさん、あなただつて人のこと、言えないじゃないで

すか。最初はリョウさんだってユリさんのこと、好きだったくせに。もういいです！」

(すっくと立ち上がると、アラシはヴェルレーヌの詩集を抱きしめたまま去っていく)

ハルミ：「(横のリョウのことをジロ〜リと睨んで) ふう〜ん。リョウさんはユリのが好きだったの？へええ〜、そんなこと、わたしちっとも知らなかったわ！」

リョウ：「まあまあ、ハルミちゃん。そんなのはハルミちゃんにつきあう前のことなんだから、大目に見てよ。

このとおり、ねっ！！」

(そっぽを向いていたハルミだけど、リョウに観音様のように拝まれて、もう一度くるりと彼に向き直る)

ハルミ：「ま、今回は許してあげる。でも、もし次に誰かと浮気したりしたら……」

リョウ：「わかってる！わかってますって！！」

ハルミ：「うむ、わかっていればよろしい。でね、リョウさん、わたし思ったんだけど……この機会にわたしがこっそりそれとなく、ユリの心の内を聞いてみるのはどうかと思うの。それで、ユリがアラシくんのことを好きなら、何も問題はないわけでしょ？でももしあの超変人のデューク・サイトウを好きなんだとしたら、あたしがユリの背中を押すなり、リョウさんがサイトウさんの背中を押すなりする必要があると思わない？だって、あの人ってどう見ても恋愛とかに鈍そうだし、ユリは内気すぎて、彼のことがもし好きでも、告白なんてとても出来る子じゃないもの」

リョウ：「う〜ん。そいつはどうかなあ？こういうことには他人が余計な横槍を入れると、むしろまくいかないっていうのが俺の実感なんだが……でもまあ、ハルミちゃんがそう言うなら、俺たちで恋のキューピッドって奴になってみようぜ！」

ハルミ：「じゃあ、決まりね！それじゃあたしは早速、女子寮へ戻って、ユリの本心を探りだしてみるわ！」

(そんなわけで、場面変わってベルビュー女子寮のリビング。

ユリが鼻歌を歌いながらキッチンで料理を作っている)

ユリ：「ふんふんふん～ん♪」

ハルミ：「やっほう、ユリ。今日の晩御飯は何かしら？」

ユリ：「あら、おかえりなさい、ハルミ。今日の晩御飯はビーフシチューよ。ジュンちゃんの大好きな」

ハルミ：「あらあら。ユリったらいつまでたっても幼馴染みのジュンから卒業できないのね。  
ジュンはきっと――小さい頃から内気で頼りないあんたを守ろうとするあまり、あんな男まさりの性格になったんだとは思わない？」

ユリ：「……どうということ？」

ハルミ：「つまり、あんたがいつまでたっても男を作らないから、ジュンはあんたの保護者役を卒業できないってこと」

ユリ：「ジュンちゃん、もしかして本当にそうなの？」

(戸口に突然、ジュンが姿を現す。どうやらふたりの会話を聞いていたらしい)

ジュン：「余計なことを言うなよ、ハルミ。自分が羽柴と恋人同士になったからって、他の人間の恋の面倒まで見ようとするなんて、そういうのを大きなお世話っていうんだぜ」

(ジュンからジロリと睨まれて、どこかしょんぼりと気落ちするハルミ)

ハルミ：「そ、そうかもねっ。ごめんね、ユリ。あたし今日はリョウさんと外でお食事する予定だから、晩御飯はいらないわ」

(そそくさと再びコートを着、バッグを手に出ていくハルミ)

ジュン：「レイナも今日は、例の筋肉バカのラガーマンとのデートで、遅くなるそうだ。  
だから今日は、久しぶりにふたりきりだな、ユリ」

ユリ：「ジュンちゃん……」

(テレビを見ながら、最初は黙々と食事を続けるふたり。でもふと、ジュンがソファの上にあった『嵐ヶ丘』というタイトルの本に気づく。

そして、それをぱらぱらと開いて読んだジュンが、食器の後片付けをしているユリに後ろから声をかける)

ジュン：「エミリー・ブロンテの『嵐ヶ丘』か。

もしかしてユリは今、この本の主人公のキャサリンと同じような気持ちなのかい？

主人公のキャサリンは、本能では孤児のヒースクリフに惹かれながらも、理性によって社会的地位のあるリントンという男と結婚する……ユリはきっと、本能ではデューク・サイトウとかいうあの超のつく変人が好きなのかもしれないな。

でも、あのアラシとかいう名前負けしている男が、自分を好いてくれていることも、よくわかっている……それで、ユリはどうするつもりなんだい？デュークのことを、このままだ黙ってアメリカへ行かせてしまうのかい？」

ユリ：「その前に、ジュンちゃんもわたしに答えて。

ジュンちゃんは、小さい頃から内気で大人しいわたしを守るために――それで今も、恋人を作ったりしないの？」

ジュン：「わたしはいつだって、女性たちの黄色い声援に囲まれているさ。

だけどユリ、問題はそういうことじゃないんだよ。わたしにとっては恋人になる対象が男か女かなんて、正直どうだっていい。大切なのは人を愛すること、誰かを真心から思いやることの出来る心こそが尊いものなんだ。

ユリは優しいから……もし自分がデュークに告白したりしたら、あのアラシとかいう見るからに冴えない、生まれつき運の悪そうな男が傷つくと思ってるんだろう？

でもね、ユリ。彼だってもし、ユリが心の中で本当はデュークのことを好きなんだってわかったら、その時にはもっと傷つくんだよ。

私の言ってることがわかるかい？」

ユリ：「うん……でもジュンちゃん、わたし本当にわからないの。

自分がデュークさんのことを男の人として好きなのかどうか。そういう意味ではアラシさんのこともそう。

わたし、アラシさんとは同じ凡人としてとても話があうし、あの人もあたしと同じく内気で大人しい感じの人でしょ？だから、一緒にいて話をしてると、芯からほっとするの。

でも、デュークさんは違う。デュークさんは、わたしにはあまりわからないことをよく言うの。

ずっと前にね、デュークさんがネズミにネズミ花火を巻きつけて、火をつけていたことがあって……わたし、なんて人なんだろうってその時思ったわ。だから言ったの。「こんな残酷なことをして、ネズミさんが可哀想だと思わないの!？」って。そしたら彼、なんて言ったと思う？」

ジュン：「（くすりと笑って）なんて言ったんだい？」

ユリ：「君はなんにもわかってないって。自分はこの実験用のマウスを医学部の教室から命懸けで連れてきたんだっていうの。どのみち麻酔をされた上、解剖されて死ぬ運命なんだから、命を助けた僕が何をしようと自分の勝手だって……それからそのあと、マウスを使ったガン細胞の研究の話もしてたわ。デュークさんの話によると、人間がこれまで医学の向上を名目に、一体何千万匹のマウスを実験材料として使ってきたかとか、そんな話。だから、もしわたしが将来ガンになったとして、その時にガン治療の薬を飲むとしたら、それは何千万匹ものマウスの命を犠牲にして出来た薬かもしれないとか何とか……」

ジュン：「まあ、あいつお得意の詭弁という奴だな。

それでユリ、おまえは奴のそんな話を聞いていてどう思ったの？」

ユリ：「なんて屁理屈が好きな人かしらって思ったわ。

でも……どうしてかわからないけど、あの人の言ってることっていつも、どこか正しいのよ。

もちろん、全部が全部っていうわけじゃないんだけど。

それに……常識人のアラシさんと違って、デュークさんはあんな人でしょ。アラシさんは将来、別にわたしとじゃなくても、可愛らしい感じのする、いい人が現れて結婚するかもしれないわ。

でもデュークさんは……確かに頭のいい人だけど、これからもまわりの人に色々誤解されそうだし、それでももし常識人で凡人のわたしがそばにいたら、うまくフォローしてあげられるかもって思うの。

それに、あの人好みのごはんやおやつを、毎日作ってあげられるかもしれないし……」

ジュン：「なるほどね。まさか、ユリがいつの間にかそんなに深いところまであいつのことを考えてたとは思わなかったよ。

じゃあ、あいつに自分の気持ちを伝えるんだね？」

ユリ：「わからないわ——だってジュンちゃん、怖いもの。

あの人は本当は心の中で何をどう考えてるか、全然想像のつかない人だから……アラシさんならきっと、もし駄目でも人の心が傷つくようなことは言ったりしないってわかってる



けど、デュークさんは違うの。

あの人はわたしの心をもみくちゃにして踏みつけても、無邪気な子供みたいに笑ってるんじゃないかって思うと、なんだかとても怖いの」

ジュン：「それはユリの考えすぎだよ。

あいつは確かにデリカシーのない奴だけど、そこまで馬鹿じゃないさ。

ユリが怖いのはたぶんーどんな形であれ、デュークに拒絶されたらと思うと、そのことが怖いんだよ。

でも、怖がってばかりいたら、いつまでも何もできない。

自分の力で運命を変えたいと思うなら、なんだって勇気を持ってやってみることが一番大切なんだ。

もし、結果がユリの思ったようなものじゃなかったとしたら、その時には……また私の胸の中に戻っておいで。

友達ってというのは、そういう時のためにいるものなんだからね」

ユリ：「（涙ぐみながら）ジュンちゃん……」

（ジュンが、慰めるようにユリのことを抱きしめ、女子寮の明かりが消える。

そして一方、男子寮ではデュークの部屋にリョウがあぐらをかいて座っていた）

デューク：「一体どういう風の吹きまわしだい？

君が僕の部屋へやってくるだなんて、僕の記憶にある限り、これまで一度もなかったような気がするけど？」

リョウ：「ああ、まあな。こんなタランチュラやら、ヘビやイグアナやら、よくわからない生き物を飼ってるような男の部屋へは、出来ることなら一度も来たくなんかなかったさ」

（ヘビやカメやイグアナ（もちろん作り物）のいるケージをのぞきこみ、ぞっとしてぶるぶると顔を振るリョウ）

デューク：「ふうん。でもその君が、今日は何故か僕のいる部屋へやってきた……なんだい？もしかして頭の悪い君に代わって、カンニングペーパーでもバレないように作ってほしいのかい？」

リョウ：「ふん。てめえに同情なんかされなくても、こちとら成績のほうは特に問題ないっつーの。

それより、アラシから聞いたんだが、デューク、おまえアメリカに留学するって本当か？」

デューク：「いかにも。偏狭な考え方しか出来ない教授ばかりが、今の日本の大学にはびこっているからね。

僕は井の中の蛙になるつもりはないんだ……もっと広い世界を見るために、外の世界へ羽ばたいていくことにするよ」

(ここでデュークが、ステッキを持った手をハンカチで隠して、そこから鳩をだすというマジックをしてみせる)

リョウ：「ふう～ん。まあ俺は、これからはヘビやサソリやタランチュラなんかに囲まれる心配が一切なくなって、ほっとしたってところかもな。

でもまあ、このベルビュー荘には実に物好きな奴がいてさ、おまえがここからいなくなるのを寂しく思う奴ってのも、いるみたいだぜ？」

デューク：「そうかね？まあ、仮にもし僕がいなくなっても、明日からも太陽は昇ったり沈んだりを繰り返すだろうよ。

季節は巡って、春には桜の花が咲き、夏にはミンミン蝉がうるさく鳴くだろう……そうして万物は流転するんだ。

そして僕たちはその一部だという、それだけの話だよ」

リョウ：「(溜息を着いて)ほんと、おまえって変な奴な。

どうやら遠回りに話を続けても、デュークにはさっぱり通用しそうにないから、単刀直入に言わせてもらうぜ。

もしおまえが近いうちにベルビュー荘を出ていくのだとしたら、複雑な気持ちになる奴がここにはいるってことさ。

まず、アラシの奴な。あいつは駅のプラットフォームでおまえのことを最後まで走って見送りそうな感じの奴だ。

それからユリさんも、白いハンカチで目尻をしきりと拭いながら、てめーのことは見送るかもしれん。

おまえ、そういうことについて、本当はどう思ってるんだ？」

デューク：「別に。第一僕は、そういう湿っぽいやつってのは嫌いなんだよ。

だから出ていくとしたら、夜逃げ同然にある日突然ここを出ていくさ。

まるで風みたいに、最初からここにいなかったかのように、そっとね」

リョウ：「（チッと舌打ちして）だから俺はてめーって男が嫌いなんだよ。  
このカッコつけ虫め！！」

デューク：「カッコつけ虫だと……？  
そんな虫の存在、生まれて初めて聞いたぞ」

（デューク、本棚から分厚い図鑑を取りだして、虫めがねで真面目に「カッコつけ虫」を索引から探そうとする）

リョウ：「ああ、カッコつけ虫ってのは、今ベルビュー荘の2号室に存在してる白づくめの格好した奴のことだ。

あとでてめーの写真を図鑑に貼って、その下に名前でも書いとけ。斉藤タダシってな」

デューク：「僕の名前のことは言うなといってるだろうが！！  
でもまあ、羽柴くん。君の言いたいことは大体なんとなくわかったよ。  
君は僕がアメリカへ旅立ったあと——大谷くとユリさんがどうなるか、心配なんだろう？

それなら何も、問題はないさ。僕がいなくなれば、ふたりはとてもいい似合いのカップルになるだろうから、ハルミさんと幸せいっぱい君が余計なことにまで気をまわす必要はないんだよ」

リョウ：「ちゃんとわかってんじゃねーか！！  
だったらなあ、男らしく俺とビシッと勝負したみたいに——ユリさんとのことをはっきりさせろ！！

俺はてめーに負けた時、潔く自分の負けを認めた……同じように、今度はアラシと勝負しろって俺は言ってるんだ。逃げるみたいにアメリカへ行くんじゃない！！」

デューク：「紳士のこの僕が、逃げる、だと？  
失敬な！！ナポレオンの辞書に不可能の文字がないように、僕の辞書に逃亡という二文字は存在しない！！  
いいだろう、羽柴くん。この勝負、受けて立ったと大谷くんに伝えておいてくれたまえ！！」

リョウ：「（はあ～と溜息をついて）まったく、変人と話をすると、普通の人間と話すより、

三倍は労力使うぜ。

「なんにしても、てめーはアメリカへ行く前にユリさんに告白するってことでいいんだな？」

デューク：「いかにも。ユリさんの三食の食事とおやつは、僕にとって物理学の研究を続ける上で、貴重なエネルギー源になるだろう。そのためにも男らしく彼女に、プロポーズの申し込みをするさ！！」

リョウ：「プ、プロポーズ！？い、いや、俺は別にまだそこまでのことは言ってないっつーか……」

デューク：「なんだね！？人をけしかけておきながら、君はもしや僕がユリさんの貞操だけを弄んで捨てるような最低男だとでも思っていたんじゃないだろうね！？」

リョウ：「貞操を弄ぶって……デューク、おまえ本当に一回、医者に頭でも見てもらったら？」

デューク：「（聞いてない）さて、そうと決まれば時間が惜しい。膳は急げ、だ。恋の先手は打たせてもらったと、大谷くんには伝えておいてくれたまえ」

（ポケットから懐中時計をとりだし、ステッキをつきながら外へ飛びだしていくデューク。

天井からタランチュラが三匹ぶら下がっている部屋で、リョウはぽか〜んと呆気にとられたままにいる）

リョウ：「プロポーズかあ。まあ、あいつらしいっちゃ、あいつらしいような……まあ、むしろユリさんがあいつの今の勢いにビビって、結婚の申し込みを断ったとしたら……なんか俺、すげえ余計なことをしたのかな。

でも、あいつがある日突然何も言わずにここから消えるよりは、いいっか。

俺だって、ライバルのあいつがベルビュー荘からそんなふうにいなくなるのは、なんか寂しい気がするもんな」

（デューク、男子寮を飛びだして、女子寮の玄関のドアを叩く）

デューク：「たのもーう！！」

ユリ：「あら何かしら？もしかしてまた、道場破り？」

ジュン：「ユリ、そんな昔のことを言うなよ。いくら私が柔道の黒帯を持っていて、合気道が二段だからって……あの声はたぶんデュークだよ。

なんの用でこんな夜分に女子寮へ来たのか知らないが、ドアを開けておやり。

私は自分の部屋へいってるけれど、あの変態……いや、変人がおかしい行動を見せたら、すぐに呼ぶといい。

こてんぱんにのしてやるから」

ユリ：「う、うん……」

(ジュンが場面から消えていなくなる。

そして、ドアを開けようかどうしようか、うろうろドアの前を歩いて迷うユリ)

デューク：「ユリさん、実はあなたに折り入って……いやいや、込み入っただけな。

なんにしても、とにかくあなたに大切な話があるんです。

ここを開けて、僕のベリーインポートな話を聞いてください」

ユリ：「は、はい……」

(ユリ、意を決して玄関のドアを開ける。

すかさず、そこから飛びこんでくるデューク)

デューク：「まずは、これを……」

(デュークがステッキを持つ手をハンカチで隠すと、そこから大輪の百合の花が現れる)

ユリ：「まあ、綺麗！！デュークさん、もしかしてこれをわたしに！？」

デューク：「ええ、まあ。時にユリさん、あなたは結婚制度というものをどう思われますか？」

(ユリ、花瓶にデュークからもらった白百合の花を飾ると、デュークに居間の椅子へ座るよう、促す)

ユリ：「そうですわねえ。まあ、一組の男女が愛しあって結ばれるという、とても素晴らしい制度だと思いますけど」

デューク：「（チッチッチ、と指を振る）ユリさん、誤解してはいけません。結婚制度というものは、基本的に昔から男に有利なように作られているんですよ。たとえば結婚式の時、女性はヴァージンロードを父親と歩いて、花嫁は花婿の手に渡されるわけですが……これは人間が古来より守ってきた悪しき因習とも呼ぶべきものです。

つまり、今より遡って遥かな昔の時代、女性は生まれるとまず、父親に彼女を支配する権利があった。

そして、娘が結婚する時に父親から花婿の手に娘を渡し——彼女の支配権を譲渡したんですよ」

ユリ：「まあ、あの儀式にそんな深い意味があるとは知りませんでしたわ。

本当、デュークさんは色々なことをご存じなんですね」

デューク：「また、それだけではありません。結婚式の時、新郎と新婦は、祭壇の前で例の「病める時も、健やかなる時も……」という誓いの宣誓をしますね。それは何故神父あるいは牧師、また祭壇の前でなされなければいけないのか……」

ユリ：「結婚の儀式というものが、それだけとても神聖なものだからなんじゃないかしら？」

デューク：「いかにも。ですが、人間は古来より、神聖とされる祭壇の前で何をしてきましたか？

動物を屠ってその血と肉を捧げてきたんですよ。つまり、昔からある結婚の儀式、このことの内にはある比喩が隠されているんです。父親から渡された花嫁を、花婿はどうにでもしていいという隠喩がね」

ユリ：「まあ……じゃあ、デュークさんにとって女性は、人間より一段劣った動物ってということなんですか？」

デューク：「まさか。僕の考える女性とは花です。あるいは動物といっても、リスとかうさぎみたいな、そういう感じの可愛い生き物だと僕は思っています。

ただ、結婚というものは、昔から女性にとって不利な取り決めだったんですよ。それはある部分、今も変わっていないと僕は考えます。

でも、もしそれでいいなら——ユリさん、僕と結婚してくれませんか？」

ユリ：「え、えええっ!？」

（ここで突然、剣道着を着たジュンが再び、女子寮の居間へ颯爽と姿を現す。

そして手に二本持っていた竹刀のうち一本を、デュークに叩きつける）

ジュン：「黙って聞いていれば、ゴチャゴチャ屁理屈ばかり抜かしおって、この腰抜け野郎め！！

まともなプロポーズひとつ出来ない男に、私の可愛いユリを渡しはしない！！  
もしユリと結婚したくば、まずはこの私、ベルバラのジュンを倒してからにしる！！」

デューク：「でたな、ベルバラのジュン！！

君とは、アメリカへ発つ前に勝負をつける必要があると思っていたが……今がその時ということか！！」

ジュン：「一応先に断っておくが、私の剣道の腕前は初段だぞ。そして柔道は黒帯、合気道は二段だ。

その私に勝てると思うなら、かかってくるがいい！！」

デューク：「くそっ。僕なんか、僕なんか……そろばん一級、習字が二級だぞ！！

貴様こそ、その僕に暗算と字のうまさで勝てるなら、かかってくるがいい！！」

(ここでリョウとハルミ、アラシ、レイナたちが女子寮の庭へやってくる)

リョウ：「なんだ、なんだ！？あいつ、ユリさんにプロポーズするとか言ってたのに、なんでベルバラのジュンと剣道なんかしてるんだ！？」

アラシ：「プロポーズって、どういうことですか、リョウさん！？」

リョウ：「あ～いや、なんかおまえが恋と友情の板挟みになってるみたいだったから、ちょっとデュークのことを棒でつついてやったら、いつの間にかこんなことに……」

アラシ：「ようするに、やぶへびってやつですね！？」

リョウ：「は、ははっ……そうとも言うかもな」

ハルミ：「リョウさんってば、何やってんのよ、もう！なんかむしろ逆効果だったみたいじゃない！？」

レイナ：「よくわかんないけど、ユリのことを巡ってふたりの男が……じゃなかった、ひとり

の男と女が勝負してるってわけね！？

わーっ！！ベルバラのジュン、がんばれーっ！！

デューク・サイトウみたいな変人のことなんか、ケチョンケチョンにのしちゃえ！

！

宝塚、フォーエバー！！」

デューク：「くそっ、うるさいぞ、外野！！」

ジュン：「まったく、口ほどにもない男だ……貴様のような理屈ばかりの頭でっかち男には、絶対にユリのことは渡さん！！

そろそろ本気で行くぞ！！

キエエエッ！！メェン！！！！」

ハルミ&レイナ&リョウ&アラシ：「おおおおおっッ！！！！！！」

デューク：「……………！！（まともに面をくらって素っ転び、なかなか立ち上がれない）」

ジュン：「次、行くぞ！！

胴ッ！！！！

そして小手！！！！」

(スパンスパン、スパパパン！！と竹刀でやられ放題のデューク。

今ではほとんど、ジュンの一方的ないじめにも見える行為と化している)

ジュン：「どうした、立て！立つんだ、デューク！！」

ユリ：「や、やめて、ジュンちゃん！！もうやめて！！

わたし、デュークさんと結婚するから！！！！」

ジュン：「ユリ、目を覚ませ！！

こんな情けない男の一体どこがいい！？

一瞬でも、おまえの好いた男ならと思った私が馬鹿だった……この男の頭でっかちな屁理屈根性は一生涯直らんだろう。

そんな男の嫁なんかになってみる！！ユリが苦労するのは目に見えている！！」

ユリ：「そうかもしれない……でもわたし、そんなデュークさんのことが好きなの！！

こんな人と結婚したら、もしかしたら不幸になるかもしれないし、すごく苦労するか



もしれないけど……でもあたし、まわりの多くの無理解な凡人から、こんなおかしなデュークさんを守ってあげたいって、そう思うの！！」

ハルミ&レイナ&リョウ&アラシ：「(なるほど～！という感じの) おおおおおお  
お～っッ！！！」

ジュン：「そうか……おまえがそこまで言うのなら、もはや私の出番はないな。  
デューク、まずはっぺでもかって、鼻血を止めるがいい。  
そして、っぺがとれた頃にでも、次はもう少し気の利いた、ロマンチックな話を  
ユリとするんだな」

デューク：「(ユリにっぺをしてもらいながら) は、ふあい……」

(颯爽と去っていくジュン。

そして、空気を読んだかのように散っていく、ベルビュー荘の住人たち。  
いつの間にか空には星や月がかかり、あたりには虫の鳴く声だけが聴こえている)

ユリ：「大丈夫、デュークさん？」

デューク：「うん……あんまり竹刀で殴られすぎて、まだ星が頭のまわりを回ってる気がするけど、まあ、なんとか」

ユリ：「アメリカへは、いつお発ちになるの？」

デューク：「来週にはね。でも、僕はまだ学生だし、物理学でごはんを食べていくには、もう少し時間がかかると思う。

それまで、ここベルビュー荘で君に待っててほしいだなんて、そんな都合のいいことは……僕にはとても言えないと思ったんだ」

ユリ：「そうだったの……でもわたし、デュークさんがアメリカで、金髪の女性とねんごろな関係っていうのにさえならなかったら、いつまでもずっと待ってられるわ。ここ、ベルビュー荘でね」

デューク：「本当に！？……でも、てっきりユリさんは大谷くんのことを好きなんだとばかり思ってたよ。

いつも僕より……彼とのほうが、話していて楽しそうに見えたから」

ユリ：「そうね。デュークさんがアメリカへ行って、あんまり小まめにお手紙をくださらないようだったら、わたしも浮気しちゃうかもね。大谷くんか、ジュンちゃんと」

デューク：「……君はてっきり、白百合の花のように清楚な人だとばかり思ってたけど、結構悪女なんだね」

ユリ：「ふふっ。知らなかった？そして悪女は、自分からこんなこともしちゃうのよ」

(デュークの右頬にキスするユリ。そしてその部分を信じられないというように、震える手で触るデューク)

デューク：「なんだかまるで、夢みたいだ」

(そう言って、今度は自分からきちんとしたキスをユリにするデューク。  
空には流れ星が流れ、やがてあたりは暗くなる)

## エピローグ

(駅のプラットホーム。

手に革の鞆を持ち、電車に乗りこむデューク。

そして、そんな彼を見送るベルビュー荘の住人たち)

レイナ：「空港まで見送らなくていいの？

ほら……あたしはともかくとしても、ユリとかさ」

デューク：「いいんだよ。駅まで見送ってもらうのだって、本当は嫌だったんだ。

なんか、湿っぽくなるからさ。だからベルビュー荘の庭先で十分だったのに」

リョウ：「まあ、そう言うなよ。

おまえのその気障な面は明日から見れないんだから……今のうちにみんなに見せておけよ」

ハルミ：「元気でね。何かあったら遠慮しないで連絡するのよ。

あと、ユリのことを泣かせるような真似をしたら、あたしが友達として絶対許さないからっ」

デューク：「まあ、僕のかわりにユリさんに変な虫がつかないかどうか、よく見ておいてください。

たとえば……」

アラシ：「な、なんで僕にビームのような集中光線を送るんですかっ！！  
やだなあ、もう。大丈夫ですよ。むしろユリさんのことをもっと信じてあげてくださいっ！！」

ジュン：「そうだぞ。ユリは断じてそんな、恋人がアメリカ在学中に寂しいからといって浮気するような女じゃない。

むしろ貴様が帰国したら、私とオスカルとアンドレのような関係になってるかもしれんぞ」

デューク：「ベルバラのジュン、君は本当に女にしておくのが惜しい女だ。  
向こうへ行ったら僕はまず、体を鍛えてアメリカにもあるという空手道場にでも通おうかと思う」

ジュン：「ふん。私は空手も初段の腕前だぞ？」

ユリ：「デュークさん、そんなに無理して自己改造しようとしなくても大丈夫よ。  
だってユリは、ありのままの、頭でっかちで屁理屈好きなデュークさんのことが好きなんですもの」

デューク：「うん。向こうへ着いたら、必ず手紙を書くよ。それからメールも……」

(ここで、プルルルルルル……と、電車の扉が閉まり、発車することを知らせる音がプラットフォームに響き渡る)

みんなで：「さよなら、デューク！！頭のおかしな、やたらと変に理屈っぽい、デューク・サイトウ！！」

(電車が見えなくなるまで力いっぱい手を振り、みんなが涙を堪えたり、あるいは目尻をハンカチで拭いたりしていた時――ユリがふと、プラットフォームの壁にデュークがいつも持っているステッキがあることに気づく)

ユリ：「デュークさんったら、もしかして大切なステッキを忘れていったのかしら？」

レイナ：「まったく、そそっかしい奴よね」

ハルミ：「物理学の天才だなんて言うけど、あいつはほんと、馬鹿となんとかは紙一重って奴よ！」

アラシ：「でも僕、デュークさんのこと、好きですよ。あんな変な人とは、人生でもう二度と会えない気がする」

リョウ：「俺もだ」

ジュン：「その点は、私も同意見だな」

ハルミ：「あら、もちろんあたしだって！」

（そしてユリが何気なく、ステッキの頭の部分、銀色の鷲の形をした部分をひねってみると――クラッカーのような音が鳴り響き、そこからたくさんの桜の紙吹雪があたりに散った。その中の白いハンカチをベルビュー荘の住人たちが広げて見た時、そこにはこう書かれていたのだった）

『みんな、ありがとう』

<ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら>・終幕

――一度閉じた幕が再び上がり、キャスト全員が手を繋いで頭を下げていると、デューク・サイトウ役の上月くんと、ヒロインのユリ役であるほたとが、あたしに壇上まで来るよう、しきりに手招きしている。

後ろには、役は与えられなくても、裏方として最後まで舞台を支えてくれた団員のメンバーが全員揃っている……芝居の中でリョウのワンダーフォーゲル部の後輩こと、謎のレフェリー役を演じてくれた琴野美也子から花束を渡されると――舞台が無事終わったという安堵感もあったのか、あたしはわっと泣きだしてしまった。

そして、多くの観客たちが立ち上がって拍手してくれる中、なんとか涙を堪えようと服の袖で目元をぬぐっていた時、水色のパーカーに紺色のジーンズ姿の男が、後ろのドアを押しているのが視界の隅に入ってきた。

(……………レンっ！！)

一応監督ということになってるあたしが、今この場から姿を消すのはまずいと、もちろん頭ではわかっていた。

あたしにしても、初舞台監督作品をまずは無事やり遂げたという達成感を、団員たちと分かちあいたいという気持ちもあった。でもそれよりも早く、体が勝手に走りだしていた。

「ごめんね、荒川ちゃん。あとのことは任せたから、よろしく頼むわっ！！」

「あとのことはって、あんた……サクラちゃん！？」

このままいくとたぶん、霧島さんが言ってたとおり、団員たちみんなが四方から寄ってきて、あたしは金八みたいに髪を耳の上にかけることになるだろう。互いに涙を見せながら、その感動を共有したいとはもちろん思ったけど――もし今レンのことを捕まえられなくて、あいつがすぐまたアフガンへ行ってしまう、暫くの間会えないとしたら、そんなのは絶対嫌だと思った。

でも、前方にふたつ、後方に三つあるドアを観客たちが出るのについて歩くだけでも、かなり時間がかかってしまった。顔見知りの人たち（ポスターを貼ってくれた喫茶店のマスターや、その他善意でチケットを配り歩いてくれた人たち）に会ってしまうと、挨拶したり、彼らの舞台の感想も聞かなくてはならず、あたしは本当にだんだん泣きそうになってきた。

そして、レンのことを追いかけるのをあたしが諦めようかと思った時、ふと公衆電話の横に、セブンスターが置いてあるのに気づいた。

(まさか……！！)

セブンスターの中身は、まだ十本以上詰まっている。

そしてレンは仕事で使う以外は携帯を持ち歩かない。もしここで奴が電話をかけてちょっとの間誰かと話し、外へでたのだとしたら――まだあいつは近くにいる可能性があるっていうことだった。

あたしはレンのものと思しきセブンスターをスーツのポケットに突っこむと、表に出て、レンらしき人物がそのへんを歩いていないかと探してみることにした。

とりあえず見当たらなかったけれど、どちらにしても、あいつのことだ。もしまたすぐにアフガンへ行かなくてはならないのだとしても、あの舞台を見たあとで、ベルビュー荘へちょっとでも立ち寄らないはずがない。

そう思ったあたしは、レンの後を追うべく、まずは駅へ向かうことにした。  
運がよければ、そこで奴に会えるかもしれないという望みを胸に抱きながら……。

駅の構内でも、あたりにレンらしき人物の姿がないかどうかと、あたしは挙動不審者のように探しまわっていた。

電車に乗ってからも、どこかの車両にレンがないかと一両一両探してもみた。

でも、収穫はゼロ。

あたしは暗い夜道をぱらぱらと微かに粉雪の舞う中、例の坂道を一步一步のぼっていった。

馬鹿みたいな話、コートも着ずに外へ飛び出したので、厚手のスーツを着ているとはいえかなり寒い。

(レンの馬鹿……)

今、あたしが舞台を見た感想を一番聞きたい相手は、他でもないレンただひとりきりだった。

彼がもし「くだらない子供だましの、高校生のような演劇ごっこ」とでも言うなら、他の人たちが仮にいくら褒めてくれても、それはあたしにとって意味のない賞賛だった。でもレンがもし、「すごく良かった」とか「感動した」って一言いってくれさえしたら――他の観客が全員親指を下に向けても、あたしは明日からも生きていけるだろう。

(レン、あんたって奴はどうしていつもそうなのよっ。あんたなんか、デューク・サイトウにも劣る、究極のカッコつけ虫よ！せっかくあんたがあんなに憧れてた小山内氏だって来てるのに……ちょっとくらい挨拶したって罰は当たらないでしょうがっ！)

そうなのだ。舞台が終わったあと、＜ピヨッと鷄まる！＞では、かつてのベルビュー荘の住人たちによる同窓会が開かれることになっている。あたしはその場所であらためて『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』は、あたしやほたるやミズキくんが、＜ベルビュー新聞＞を読んだり久居さんやミドリさんから話を聞き、勝手に想像力を膨らませて書いた舞台だということを、まずは頭を下げてあやまるつもりでいたのだ。

それと同時に、小山内氏がどんな人なのかも直接お近づきになって知りたいと思ったし、潤子さんからはきっと、本場の舞台を数えきれないほど見ている人特有の、辛口の意見を聞けるだろうと期待していた。

でもそうした貴重な時間を全部ぶち壊して、あたしは今、会えるかどうかわからない男の後を探しまわっている。

(まあ、もしベルビュー荘に戻って、暫く待ってもあいつの来る気配がまるでないとしたら……あたしはベルビュー荘と＜ふたり＞だけで、今日あった舞台の話なんかをすることになるわね)

あたしがそれも悪くないかなと思い、坂の途中、例の小人の灰皿のある休憩所を見上げた時、すっかり葉を落とした樹々をすかして、見覚えのある男の姿が目に入ってきた。それは他でもない、レンが煙草を吸っている横顔だった。

「……レンっ！！ちょっとあんたねっ！！」

でも、あたしの怒りの言葉は、それ以上長く続かなかった。

何故といって、いくら街頭の光が灰白い光を投げかけているからといって――レンの真っ黒く日焼けした日雇い労働者のような顔を、病的に見せることは不可能だったからだ。

「なんだ、あんた。初舞台で大成功を収めた監督さんが、なんでこんなところにいる？」

「そんなの、決まってんでしょーが！！他でもないあんたのせいよ、あんたの！！」

「俺の……？」

まったく心外だ、というようにレンはいつもどおりの落ち着き払った様子を変える気配がまるでない。

あたしはスーツのポケットからセブンスターを取り出すと、レンの奴に突きつけてやることにした。

「これ、あんたのでしょ？」

「ああ、たぶんそうだな。これ、どこにあった？気づいたらなくなってたから、駅の自販でまた買うはめになったよ」

ふーっと諦めと脱力の溜息を着くと、あたしは寒いことなんかすっかり忘れて、レンの隣に座った。

「まったくもう。向こうじゃ煙草なんて吸えないんでしょ？だから、日本でまとめて吸っておこうとでも思ったわけ？」

「まさか」と、灰皿に灰を落としながらレンが笑った。「つーかあんた、アフガニスタンを馬鹿にしてるだろ？アラブ世界でだって煙草くらい買えるさ。といっても確かに、向こうじゃ俺は一度も煙草なんか吸わなかったけどな」

「ふう〜ん。で、どう？文明社会へ戻ってきた今の御感想は？」

どうして舞台に来るなら来るで連絡をくれなかったのかとか、携帯くらい自分専用のを持ち歩けだとか、今時レトロに公衆電話に十円玉入れてるのなんかあんたくらいのものだとか――レンに対して言ってやりたいことはたくさんある。

でも今はただ、彼がわたしの舞台を見にきてくれたというそれだけで、十二分すぎるくらい十分だった。

「そうだな。あんた、『肉工場』を読み終えたあと、久臣さんの他の小説も読んだんだろ？その中に『砂漠のカタストロフ』っていう話があるんだけど、読んだか？」

「ああ、あれでしょ。＜すべてがある場所には時に何もなく、何もない砂漠のような場所にこそ、すべてが存在する＞だっけ？ようするに、あんたが言いたいのは、そういうこと？」

実をいうとわたしは、あれから久臣さんの書いた小説ばかりでなく、彼の薦めで「物を書く人間が必要最低限読んでおくべき」と思われる本のいくつかを、少しずつ読みはじめるようになっていた。なので当然、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』に名前の登場する本、『嵐ヶ丘』なども読んでいたというわけだ。

正直いってこれは、昔のあたしからはまったく考えられないある種の進歩だと思う。うん。

「アフガンでも、首都のカブールとかさ、以前では考えられないくらい発展してきたよ。でも、金さえ出せば自由に物を買えるってことがイコール豊かさとは限らないと思う。うちのNGOが孤児院を作った場所は、もっとずっと辺鄙なところだけど、今彼らが持ってる「何もない豊かさ」を失わずに、医療なんかのインフラが整備されて、本当の意味で発展してほしいって思うよ。アメリカとか日本とか、「すべてがある貧しさ」っていうちょうどいい見本がすでに存在してるわけだから」



「ふう〜ん。あんたがこのあたしにそんな話をしてくれちゃうだなんて、ちょっと感動的だわね」

「どういう意味だよ？」

あたしは横にいる精悍に引き締まった感つきをした男のことを、あらためてじっと見返した。「だって、あんたが最初にあたしに会った頃って、「こんな頭カラッポの馬鹿女に何話しても無駄」っていう感じだったじゃない？そういう意味で、レンがまともに話をしてもいいってくらい、自分もちょっと変わったのかなって思ったら、そりゃ感動もするわよ」

「まあ、確かにな」

レンが煙草を一本くれたので、あたしは彼の安物のライターで火をつけた。

「『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』は、すごくいい舞台だったと思うよ。あれを見る限り、サクラは確かに、最初にベルビュー荘へきた頃とは全然違う人間になったんじゃないか？あんたも今、人生が充実しててすごく楽しいだろ」

「うん」と、あたしは素直に頷いた。「レンが最初にあたしのことをビッチな駄目人間だって見抜いたとおりの——確かにあたしは間違いなくそういう人間だったのよ。レンはあとから、誤解してて悪かったみたいにあやまってくれたけど……誤解なんかじゃないわ。あたしは確かにそういう人間だった。たとえば、ちょうどいい例がホノルルマラソンよ」

「ホノルルマラソン？」

「えっと、あたしもよくはわかってないけど、確かあれって42.195キロだか走るんでしょ？前までのあたしだったら、こう思ったままだったと思う。日ごろから訓練・忍耐してそんな長い距離を走るなんて馬鹿みたい、そんなことして一体なんになるの？ただの自己満足、あるいは自分の健康のため、それとも「よくやった、自分！！」って自画自賛したいとか？って考えるような、本当に救いようのない奴だったわけよ。久臣さんから借りたニーチェの本に書いてあったけど——「末人は、ノミのように根絶しがたい人種である」だっけ？まさしくあたしはその、ノミみたいな人間だったわけ。自分じゃろくに体も動かさないのに、体を動かさないことの理屈だけは百も千も思いつくってタイプ。

今は、なんでレンが引きこもりだったミズキくんより、あたしのほうがしょうがない人間だって言ったか、よくわかるわよ。でもノミだって進化すれば、ラクダくらいにはなれるのよ」

「まあ、俺だってニーチェのいう超人になんか、なろうとは思わないけどな」と、レンは少しだけ笑った。「なんにしてもあんたは、農薬ぶっかけられて死ぬ前に、なんとか助かってよかったんじゃないか？あんたの名前のサクラっていうのは、漢字で花の桜って書くんじゃないけど——それでもちょっと象徴的な感じのする名前だよ。あんたはもともと、いい花を咲かせる素質だけはあったのに、たぶん自分で自分を駄目にしてたんだろ。そういうのは、他人が横からどうこう言うって直るタイプのものじゃないから、あんたも俺同様ベルビュー荘に感謝するんだな。他にもないベルビュー荘自身がサクラに夢をくれて、真っ直ぐに立って花を咲かせる方法を教えてくれたんだから」

「うん、そうね。なんかちょっと説教くさくてムカつくけど、確かにレンの言うとおりのかも。あたし、もしレンがここにいなかったら、ひとりでベルビュー荘へ戻って、お酒でも飲みながら「

ありがとう」って言おうかなって思ってたの」

「そっか。それも悪くないな……じゃあ、あんたと俺とベルビュー荘の三人で、舞台成功の報告がてら、酒盛りでもするか？」

「本当に!？」

あたしは嬉しさのあまり、両方の瞳を目いっぱい見開いて、たぶんすごく輝かせていたんだと思う。

一応念のために言っておくと、こういうのって計算して出来るっていうタイプの顔の表情じゃない。だから暫くの間、ただ驚いたようにレンがじっとあたしの顔を見つめるのを見て――今度はむしろあたしのほうが、驚いていた。

「……サクラは、本当に変わったんだな。それも、いい方向にさ」

そう言ってレンは、着ていた（あたし的な基準としてはダサイ）ダッフルコートを脱ぐと、あたしの肩にかけてくれた。

それからお互いにふざけあいながら、坂道と一緒にのぼって、息を切らせながらベルビュー荘へ辿り着く。

かつてのベルビュー荘の女子寮と男子寮の間にある夜空には、オリオン座が輝いていて、とても綺麗だった。

もちろん、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』で、デューク・サイトウとヒロイン・ユリがうまくいくシーンで流れ星が流れたみたいに……あたしとレンの関係というのは、同じようにうまくいったりしなかったけど、それでもこの日の夜、あたしはレンと忘れられない夜を楽しく過ごした。

たぶんあたしはこれから先も、（多少はお酒の力も借りたとはいえ）あんなに開けっぴろげに誰かに自分のことを話したりは出来ないと思う。随分あとになって、もしあの時レンの肩に体をもたせかけていたら、何かが変わっていたかもしれないと思わなくもなかったけれど――あたしはレンと、一時的に恋愛関係を持つことより、ずっと大切な友達でいられることのほうを選んだのだ。

そしてその友情は今も……あいつがアフガンで、一緒に孤児院のスタッフをしていた女性と結婚してからも、ずっと続いている。

ところで、これは直接参加はしていないけれど、あたしがレリックの他の団員たちや、〈ピョットと鷄まる！〉の後藤店長などから聞いた、「ベルビュー荘の同窓会」の模様である。〈ピョットと鷄まる！〉は、お世辞にも広いとはいえない、また「将来のノーベル物理学賞受賞者」に相応しいような洗練された居酒屋でもなかったけれど――木造の引き戸のところに、昔の「グリコ」や「ナビスコ」のポスターが貼ってあるのを見て、ただそれだけでも小山内氏はやたら興奮していたようだ。

氏は相変わらずステッキを振り回しながら歩き、何かあった時のために、純銀製の鷲の頭からは、催涙スプレーがでるよう改造してあるらしく……酒のつまみが運ばれてくる前に、ここで団員の中からひとり、犠牲者がでたという。

「僕は基本的にアメリカ国内では、高級住宅街のような場所にしか住んだことがないから――まあ、治安の悪いところへはあまり行ったことがないんだけどね、一応念のためにステッキには工夫がしてあるんだ」

「工夫って、どんな工夫ですか？」

もし、他の劇団から上月数馬がやって来なかったとしたら、デューク・サイトウ役をおそらく演じていたであろう、鈴木一明がそう聞いたらしい。よせばいいのにとは、まさにこのことだ。

「君、ちょっと試してみるかね？」

小山内氏はそう言ってどこかデモーニッシュに笑うと（※ちなみにこの表現は、霧島さんのものである）、一明の顔目がけて催涙スプレーをかけまくったらしい。最初の一吹きの出が悪かったのが、そもそも彼の不幸だったのだろう。

「あれ？おかしいな……まあ、最近あんまり使ってなかったから」

などと、ブツブツ呟いたのち、それぞれそれとばかり、一明の顔に催涙スプレーを噴霧した結果……。

「目があ、うおおおお、俺の目があッ！！！」

と叫んで、一明はすぐに店の引き戸をピシャッと開けて、外へ出ていったという。

ちなみに、他の団員たちは一明のこの行動を受け狙いの演技としか見ておらず、誰ひとり彼のことを追いかける者さえなく、みんなただひたすら笑い転げていたらしい。

酒のつまみが運ばれ、焼き鳥やお好み焼きが焼かれ、また店長がこの日のために用意した、普段店のメニューにはない寿司がふるまわれる頃になると（ちなみに後藤店長はその昔、寿司屋で板前の修業をしていた）――ベルビュー荘のかつての住人たちの間では、昔あった色々な楽しい思い出話が花を咲かせていた。そしてカウンター席に座る小山内氏やミドリさん、大谷氏や羽柴夫妻、久臣さんや潤子さんの後ろで、レリックの団員たちは自然、その話を静かに聞くような格好になったらしい。

小山内氏と大谷氏がミドリさんを挟んで座り、やたら陽気に笑いまくっていたせいかどうか（ちなみに、小山内氏も大谷氏も、普段お酒を一滴も飲まない人たちである）、団員の中のひとりが随分思いきった質問をしたという。

「それで僕、思うんですけど」

実際には<それで>にかかる話は何もなかったのに、数馬が突然切りだしたらしい。

「結局、ユリ……ってというか、ミドリさんは本当は、小山内さんと大谷さんのどっちが好きだったんですか？一応、小山内さんがアメリカへ行ってしまってから、ミドリさんは大谷さんにご結婚されたんですよね？でもその後離婚されてるってことは、実はミドリさんは小山内さんと結婚されてたほうが良かったんじゃないですか？僕みたいな若造が、人生の先輩に対してこんな突っこんだこと聞くのもどうかな、とは思うんですけど」

演劇をやってる人間というのは、わたしも普段彼らとつきあっていて思うけれど、かなりのところ厚顔無恥な連中ばかりである（というか、そうでもなければ、舞台の上に立つということすら思いつかないだろう）。それに数馬は、ミドリさんと大谷氏の間にも生まれた子供が、不幸な事件によって亡くなっていることを知らなかったのだから、こんな聞きにくい質問をズバリすることが出来たのかもしれない。

「正解は、どっちもよ」

普段飲みなれないビールをぐいっと一杯飲んだあとで、ミドリさんがそう答えたという。

「たぶんこれって、別に不思議なことでもなんでもないのよ。わたしは克英さんのことも、嵐さんのことも同じくらい好きだったの。当時はまだ若かったから、そういう自分の気持ちに戸惑ったりもしたけど……さっきの上月くんの言ったことじゃないけど、その論法でいくと、あたしは克英さんと結婚しても結局、離婚してたかもしれないのよ？運命って本当に、そんなふうにして誰にもわからないものなんだと思うわ。少なくともわたしは、自分がある時にした決定のことで後悔したことはないし、もしそうしていたら百八十度自分の人生が変わっていたとも思わない。でも、今日みなさんの舞台を見せてもらって、初めてこう思ったの。「ああ、そっか。わたしの人生にはこういうもうひとつの可能性もあったのかしら？」って。演劇って、本当に素晴らしいわね。実際に今自分が生きている人生だけじゃなく、他のたくさん「あったかもしれない」可能性のことに気づかせてくれるんですもの」

ミドリさんのこの答えが、まるで最初から何度も練習されたものであるように、完璧であったため――そこにいた三十名以上もの団員からは、自然と拍手が起きたという。もちろん、わたしはその場にいたわけではないけれど……でもその話をあとからみんなに聞いて、こう思った。たぶんミドリさんは息子さんがある日思いもかけない事件で亡くなって以来、ずっとそのことを考え続けていたのではないだろうか、と。<そのこと>というのはつまり、「自分が何をどうしていたら、息子は死なずにすんだのか」ということだ。そしてたぶん――その答えと、ミドリさんがもし小山内氏と結婚していたらということは、とても似通った形のものだったに違いない。

けれど、ひとしきり拍手が起こったそのあとで、今度は小山内氏が普段は飲まないビールをぐびぐびと飲み干し、こう宣言したという。

「ぼくは、もしノーベル物理学賞をとったとしたら、ミドリさんと結婚するぞーっ！！」

そしてまるでマウンテンゴリラがしきりに胸を叩くように、サスペンダーを胸の上で繰り返してバインバインさせていたらしい。

「ふふん、僕ちゃんがミドリさんと結婚したら、大谷みたいに不幸にさせたりなんかしないもんね！この説教の下手な、ヘボ牧師め！！」

日本では、牧師＝神に立てられた人という意識が薄いため、彼のこの言葉は大した暴言に聞こえなかったかもしれない。でももし小山内氏がこれから、本当にノーベル物理学賞をとったとしたら――彼のこの発言というのは、欧米人にとっては実に嘆かわしいものとして受けとられたに違いない。

「いい年をして、何が僕ちゃんだ！今の自分を鏡で見てみろ」と、大谷氏もビールを一杯飲み干してから続けた。「ただの中性脂肪で凝り固まった、コテコテのデブだろうが！大体そんなことを宣言するのは、実際にノーベル賞をとるか、昔と同じくらい痩せてからにするんだな、このハゲ！！」

「なんだとお！？僕ちゃんは太ってるけど、禿げてはいないぞっ！ハゲってというのは、今もベルビュー荘に住んでうだつの上がない生活を送ってる、あいつような奴をいうんだ！！」

そう言って、小山内氏が遠慮なく久臣さんのことを指差すと、あたりには微妙な空気が流れた。

ちなみに久臣さんは、実際は場持ちが実にうまい人なので、この時隣の潤子さんや羽柴夫妻と「いいお酒」を飲んでいる真っ最中だったのだけれど……それを小山内氏がぶち壊してしまったのである。

「あ、こんなところにハゲがいる」

小山内氏がそう言い、木の椅子を後ろに引くと、久臣さんのそばまで行って、彼の頭頂部を指差した。

そしてすかさず、壁にかかっていたバンジローを手にとり、それを爪弾きはじめる。

「♪ひとつ、人よりハゲがある～、ふたつ、ふたつもハゲがある～、みっつ、みなよりハゲがある～、よっつ、横にもハゲがある～、いつつ、いつつもハゲがある～、ななつ、ナナメにハゲがある～、やっつ、やっぱりハゲがある～、ここのつ、ここにもハゲがある……」

小山内氏がたった一杯のビールで、すっかり酔ったように踊りながら歌っていると、顔を真っ赤にした久臣さんが小山内氏からバンジローを奪いとった。

「ハゲに向かってハゲっていうな、このデブ！！」

そう言って、小山内氏のサスペンダーをビヨーンと引っ張ると、バシッ！！と久臣さんは容赦なく元に戻した。

その反動で、床に尻餅をつく小山内氏……見かねた団員たちが彼を起き上がらせると、ずっとアメリカにいて日本のカルチャーに疎いはずの小山内氏はこう言ったという。

「同情するなら、金をくれ！！」

そして、親切な団員二名の手を振りほどき、再びバンジローを爪弾きはじめる。

「♪何故かなかなか落ちない、僕ちゃんのこの贅肉～

毎日ゼイゼイ言って走ったなら～

この肉は落ちるのか～

でも僕ちゃんは本当は、こう思っている～

デブのほうが、ハゲよりはマシさ、と～  
何故とって、デブは痩せられるが～  
ハゲた頭髪は元には戻らない……

(セリフ。何故か軽くラップ調☆)

NASAにも無理!

誰にも無理!

でもそんなこと言っちゃいけないぜ、Oh, No, No,

何故ってあいつはしがない会社員

俺とはそもそもサラリーが全然違う……」

他の団員たちは、小山内氏が繰りだす即興の歌が面白すぎるあまり、当の久臣さんのハゲ頭のことはあまり念頭になかったようだ。それで誰もが大声で笑い転げていたという。

「なんか、変な方向に話がたって悪かったな、久臣」と、大谷氏。

「いや、あいつが自分のことを<僕ちゃん>っていうようになったら、それはすでに酔ってるってことだからな……ほんと、あいつはいい意味でも悪い意味でも、昔と全然変わらん」

「あんなのでノーベル物理学賞がとれるとしたら、物理学の世界的水準が下がってるとしか思えないわね」と、潤子さん。

「舞台のセリフにもあったけど、天才と馬鹿はなんとかっていう、典型的な例よねえ」と、晴美さん。

「まあ、俺たちもほんと、あいつのあの性格によく四年もつきあったよな」と、羽柴氏。

「でも、きっと大学でもあんなふうに、学生さんたちに囲まれて楽しくやってるんでしょうね」

ミドリさんが尊敬と憧れをこめて小山内氏のことを見つめると、かつてのベルビュー荘の住人たちは、一斉に彼女のことを振り返り、その中のうち少なくとも数人はこう思ったらしい。

(お互い、外見が年老いたというだけで、あのミドリ(さん)の小山内を見る目は変わりがないみたい(ようだ))

そんなこんなで、劇団レリックの団員たちはすっかり@小山内ワールドの虜となり、彼を囲んでアメリカの政治や経済や文化のことなどを熱心に話しこむようになっていた。潤子さんは藤堂ジュン役の神崎薫や荒川氏と宝塚歌劇団のことで花を咲かせ、久臣さんと羽柴夫妻、大谷氏とミドリさんは再び、今日の舞台のことや昔の懐かしい思い出について語りあっていったという。

そして時刻が零時近くになり、羽柴氏が「明日、ゴルフへ行く予定があるから」とのことで、夫人とともに席を立とうとすると……。

小山内氏が再び、敵意に燃える目をギラギラさせ、バンジョーを片手に歌を歌いはじめた。

「♪ゴルフ!ゴルフ!!明日はゴルフ!!!

俺は人が死んでもゴルフをするぜ～

アメリカから友人が来てても関係ないぜ～  
俺は根っからのゴルフ好き  
女の体にホールインワンするには  
隣の女房が邪魔な存在.....  
だからせっせと棒を振るのさ～

(セリフ。軽くラップ調☆)

「お父さん、またゴルフなの？」

「せっかくの日曜なのにね」

「お母さん、ゴルフがブルジョワのスポーツだって本当？」

「しっ、お父さんは共産黨員だって言ったでしょ」

.....これは、あとから久臣さんから聞いたことなのだけれど、小山内氏は羽柴氏の帰る理由がゴルフ以外のものだったら、バンジョー片手に絡むこともなかっただろう、とのことだった。

つまり、小山内氏の前ではいくつか禁句となっているワードがあって、その中には「ゴルフ」、「共産主義」、「ナチズム」、「高利貸し」、「白人至上主義」、「赤狩り」、その他色々な言葉があるということだった。

まあ、羽柴夫人がもともと、ゴルフ如きのためにこの場から離れたくないと思っていたせいか、小山内氏の失礼かつ際どい歌を聞いても、彼女は笑いこそすれ、怒った素振りなど微塵も見せなかったという。

「ああ、そうだったのね。この人、昔から暇さえあればゴルフゴルフっていう人だったから、そのクソゴルフのために離婚しようかと思ったこともあったのよ。でもまあ、愛人を作るかわりに棒を振ってるんなら、これからは考え方を変えることにするわ」

晴美さんのその言葉を受けるように、再び小山内氏が陽気にバンジョーを爪弾きはじめる。

「♪俺の女房、メチャいい女房

最高にイケてるぜ、イエイ、イエイ

それに引きかえ旦那はショボい

ヤブな内科で診察してる

俺のワイフに手をだす奴は

精神科医が相手をするぜ

水虫できたらみんなでかかろう

精神病院

マジであいつら狂ってる

(セリフ。軽くラップ調☆)

「僕、最近雪男に抱かれたんです……」

「え！？わたしなんかグレイ星人ですよ」

「レイプされたんですか？」

「ええ、それなりに良かったです……」

団員たちがみんな笑い転げていると、羽柴氏も同じように笑いだし、彼は明日のゴルフは諦めた様子だった。

そして結局、夜明け近くまでみんなで飲み明かし、わたしやレンとはまた別の意味で「べらぼうに愉快的時間」を彼らは<ピヨッと鶏まる！>で過ごしたらしい。

ちなみに、後藤店長は後日、「あんなに面白くて愉快的人には初めて会った」とあたしに言っていたけれど、確かにそうだろうと思う……うん、間違いなくこれはかなり。



『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』の初舞台が終わってから、随分な時が過ぎた。

潤子さんはあのあと「ブロードウェイでも十分イケるわよ」と、そんな嬉しい言葉を残して日本を発ち、小山内氏とレンはお正月過ぎまで母国で過ごしたのち、それぞれの場所へ戻っていた。

小山内氏はかつて自分の住んでいた2号室が、すっかり様変わりしているのを見て――しきりに「エクセレント！エクセレント！！」という言葉を繰り返していたようだ。どうもこの言葉は彼のお気に入りらしく、そのあともミドリさんの料理を口にすると、氏は何度も繰り返し同じ言葉を口にしていた気がする。

ところで、小山内氏はまだノーベル物理学賞に輝いていないけれど、ミドリさんと結婚した。

彼曰く、もしわたしたちが『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』という舞台を製作していなかったら、たぶん自分はミドリさんにプロポーズしようなどとはまるで思わなかっただろうということだった。

「でも、あの舞台を見て」と、小山内氏は言った。「若い頃の情熱とか、彼女のことをどう思っていたかとか、色々なことを思い出したんだよ。僕は研究第一で、それ以外のことはどうでもいいって生活を送ってきたから……まあ、今更結婚に理想とか夢を見たりはしてなかったけど、それがこう」しきりにステッキを振る。「まざまざと甦ってきたんだね。青春時代の憧れや夢とか、そういった忘れかけていたものが。君たちは僕が＜ベルビュー新聞＞を書いていたからこそ、あの舞台が完成したって言うけど、むしろ感謝したいのは僕のほうだよ。人生で一番大切なものを思い出させてくれて、本当にありがとう」

もちろん、小山内氏が物理学研究の軸足を置いているのはアメリカだけれど、彼は向こうへミドリさんのことを連れていったりはしなかった。一応、結婚式は挙げたものの、彼はベルビュー荘へ帰ってこれる時だけなるべく戻ってくる……といったような生活を送っている。

まあ、なんといってもその結婚式、司式を執り行ったのが他にもない大谷氏で、正直あたしは彼の心中はどんなものなのかが不思議で、そのことを聞いてみたことがあった。

「むっちゃ腹立つわ、あいつ～。今ごろなんやねん！人の元女房に手をだしくさりおって」とか、思わないんですか、と。

「まあ、もうこの年だからね。嫉妬心なんていうものは、随分薄らいでるよ」

大谷氏は自分が牧師をしている教会で、祭壇を前にした座席に座り、そう言っていた。

まあ、彼の仕える神さまの前なのだから、嘘はついてなかったんじゃないかと思うけど。

「うまく言えないけど、まあ、それでもね。やっぱりあいつが一番いいところを持ってく奴だなんて思う気持ちはあるよ。僕が牧師になったのは、息子の死がとても大きく影響しているけれど、あの時の僕には、＜神＞というか、宗教っていうものが物凄く大きな救いに繋がることだった。もともと大学では哲学を専攻してたから、西欧文明を理解するのにキリスト教の教えについて書かれた本は随分読んでいたし……でも、ミドリにとっては、僕が宗教の世界へ逃げたっていうふうに見えたんだろうね。本当は自分と一緒に息子を失った悲しみを受けとめてほしいのに、僕

はひとりで宗教の世界へいってしまい、彼女をひとり取り残してしまったんだよ。そのことをはっきりした言葉でミドリに聞いたことがあるわけじゃないけど、「男親と女親は違う」っていうふうに、彼女はそう思ったみたいだ。自分の体の一部をもぎ離されるような、そこまでの痛みを、僕は感じていないんだと……わかるかな？ミドリは普段、あのおりの温厚で優しい人だけど、一度火薬に火がつくと、まるで火の女神みたいになる女なんだよ。彼女はそのことで僕のことを絶対に許さなかった。それがまあ、離婚した原因かな」

「……そのこと、小山内氏は知ってるんですか？」

結婚式専用のチャペルではない、本当の教会という場所へ来るのが初めてだったので、あたしは教会堂の様子をきょろきょろ見回してばかりいたけれど、もちろん大谷氏の話は至極真面目に聞いているつもりだった。

「知ってるって何を？ミドリが本気で怒ったら、火のように激しくて手のつけられない女になるってことを？」

「えっと、それもありますけど……それよりも、大谷さんがミドリさんと離婚した理由について、彼は知ってるのかどうかと思って」

大谷氏が牧師をしている教会の本堂は、とても清潔で綺麗ではあったけれど、わたしの頭のイメージにあるカトリック教会とは随分様子が異なっていた。確かに、祭壇の中央、牧師が説教をする説教壇の後ろには十字架が掲げられている……でも、その背後にある窓にはステンドグラスといったものは嵌まっていない。

本当にシンプルなただの、明かりとりとしてのガラス窓。

他に本堂にあるのは、平等な形でいくつも並んでいるような、机と椅子が一体になったような長方形の座席だけだった。

「もしミドリが小山内の奴に話していたとすれば、知ってるだろうな。でもあいつはそんなこと、ミドリが自分から話そうとしない限りは、絶対自分からは聞いたりしない奴だよ。僕があいつに適わないと思う最たることは……最愛の息子を不条理な運命の手から助けられなかったミドリのことを、小山内の奴が代わりに救ったっていうことかな」

「どういうことですか？」

「息子が死んで暫くたった頃、たぶん風の便りみたいなもので、小山内も僕とミドリが静を失ったっていうことを聞いたんだと思う。で、何か自作の詩みたいなものを書いて、花と一緒に電報で送ってきたい。それになんて書いてあったのかはわからないけど、とにかく、その時から彼女の様子が変わった。だからね、嫉妬なんていう浅ましい感情を抱くのは、僕にとっては筋違いであるように思えるんだよ。僕に救えなかったミドリの心を、小山内が直接会いにきもせず、ちょっと電報を送っただけで、たちどころに救ったんだ。そのことを思ったら、まあ、ふたりの結婚を祝福する以外にないかなって思う……もちろん、少し悔しい気持ちもあるけどね」

「でも、何もここで結婚式を行わなくてもいいんじゃないですか？それに、大谷さんが式を行う必要もない気がするんですけど……たとえば、他の神父や牧師さんに頼むっていうこともできるってうか」

「いいんだよ。僕が自分でそうしたくて、あのふたりにそう申し出たんだから」

——わたしが大谷氏といつも話していて思うのは、雰囲気はミドリさんにとってもよく似ている

ということだった。

だから、温厚で優しいという言葉は、そのままぴったり彼自身にも当てはまる。

それと、ミドリさんが本気で怒ったら火の女神のようだという大谷さんの言葉も、なんとなく理解はできるけど……でもわたしには、大谷氏が怒ったところというのは、ほとんど想像できない。

<ピヨッと鶏まる！>で彼が牧師からぬ暴言を小山内氏に吐いたのはたぶん、ついうっかり小山内氏へのせられてしまったからなんだろうし。

まあ、なんにしても、そうした経緯によってミドリさんは小山内氏と結婚した。

そしてミドリさんはわたしとレン、それにミズキくんやほたるがベルビュー荘を出ていってからも——今も同じ、その場所に住み続けている。唯一、今も1号室に住んでいるのは久臣さんだけだ。

もちろんこう書くと、小山内氏がアメリカに長くいる間、ベルビュー荘では久臣さんとミドリさんがふたりだけで暮らしているのかと思われるかもしれない。いくらなんでも、それは少し不謹慎ではないか、と。

でもそうではなく、あのあとベルビュー荘は下宿屋をやめて、グループホームに姿を変えていたのだ。

『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』の舞台を見て、小山内氏がミドリさんにプロポーズすることを決意したように、ミドリさんも彼と結婚したことで、以前からずっとしようと思っていた、どうしても出来なかったことを実行へ移す心構えが出来たらしい。

それはつまり、誰も人が住まなくなっていて久しい、ベルビュー女子寮をリフォームして男子寮と通路を繋げ、老人福祉施設として復活させるということだった。そのためにミドリさんはまずホームヘルパーの資格を取り、今はケアマネージャーの資格も取得した上、<グループホーム・ベルビュー荘>の施設長になっている。

現在、男子寮のほうには男性の老人が五名入居しており、女子寮のほうには、7名の女性の利用者さんがいる。

わたしも時々お邪魔させてもらうけれど、食堂や居間で聞くことの出来る彼らの会話というのは、かなりのところ天然ボケが利いていて面白い。もちろんそれは、耳が遠かったり、痴呆症のある利用者さんが多いせいでもあるけれど……この間あたしがベルビュー荘へ遊びにいった時は、彼らはこんな会話をしていた。

久臣さん：「（新聞を読みながら、ぶううっ！！と放屁する）」

口が達者なUばあさん：「あ、また屁えこいた」

痴呆症のIじいさん：「（大声で憤慨する）わしは屁なんか、こいてねえぞ！！」

耳が遠いFばあさん：「ああん？屁か？もしかしたら、こいたかもしれんな」

ベルビュー荘へ行くたびに、この種のことがいつもあるので、あたしはそのうち『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的老人たち』という脚本でも書こうかと思うほどだ。

なんにしても、久臣さんはベルビュー荘がグループホームになってからも住み続けており、彼は相変わらず印刷会社で夜勤の仕事をしてながら、コツコツ小説を書き続けている……わたしは『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』がドラマ化及び映画化されることになった時、出版社とも多少関わりが開かれたので、久臣さんにこれまで書き溜めたものを本として出版してみてもどうかと薦めたことがある。

これはどうも、その後売れっ子漫画家になったミズキくんもまったく同じことを考えていたようで――彼もまたわたしより先に、その申し出を久臣さんにしたことがあったらしい。

「まあ確かに、印刷所で働いていながら、自分の書いた小説だけは本にならないだなんて、凄く皮肉なことなのかもしれないけど」と、久臣さんは言った。「でも、俺はそれでいいんだよ。ゴッホとかゴーガンとか、もし生きてる間に成功していたら、もしかしたら彼らの絵は人の心にそう深く響かなかったかもしれないって思わないか？ゴーガンなんて死ぬ覚悟を決めていたからこそ、畢生の大作＜我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか＞を生み出したんだろうからね。まあ、俺なんかそう考えたらまだ、畢生の大作なんて呼べるものを書いてさえいないんだから……自分の書いた小説のことは、定年後にでもゆっくりどうするか考えることにするよ。たとえば自費出版とか、定年の記念に退職金で一冊くらい作るかもしれないな」

――正直、わたしにとって久臣さんは大恩ある人で、もし彼がいなかったら、その後の脚本家としてのわたしの人生は存在していなかったらと思う。

『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』は、初演の時に見てくれた人の中に、スポンサーになってもいいという某企業の社長さんがいて、すぐに再演されることが決定していた。それから公演の回数を重ねるうちに評判となり、ついにドラマ化が決定、ドラマ化されたものが今度は映画化されることになったというわけだ。

そして、もちろん『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』の脚本は、わたしひとりで書き上げたものではなかったけれど――わたしの元に、民放のTV局からドラマの脚本依頼が舞いこんだのだった。正直って、わたしは脚本の書き方をきちんと基礎から勉強したことがあるわけでもなかったし、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』自体、自分ひとりの力で書いたものではないということ、企画担当の人に何度も説明した。

ところが、「それでいいんです。いえ、それであればこそいいですよ」的に押し切られる形となり、まずは「なんでもいいから書く」ということを強引に約束させられてしまった。そこでわたしは飛び上がりそうなほど嬉しい反面、内心ではかなりビビっており、どうしたらいいかと久臣さんに泣きつくことにしたのだ。

「最近、頭が悪くなるようなつまらないドラマが多いからな」と、久臣さんはあたしに言った。「それよりは、少なくとも多少マシなものを書けば必ずヒットするっていうことだろう。サクラちゃんはキャバ嬢をしていたこともあるんだし、まずは一番得意な分野で勝負したらいいんじ

やないか？たとえば、恋愛ものとか」

神妙な顔をして久臣さんの言葉をすべてメモすると、あたしは久臣さんがアドバイスをしてくれた、物語を書く上で注意すべき留意点についても、彼の言うことをなるべく忠実に守るようにして脚本を書いた……久臣さんは物がわかるというか、自分は一応純文学的なものを書いているけれど、何がヒットして何がヒットしないかの、エンタメ的鑑識眼のきちんと備わっている人だ。だからもし久臣さんがその気になって、「今の時代にはこれが受けるだろう」というものを書きさえすれば、その小説はベストセラーになるのではないかと、あたしはかなり本気で思っている。

ようするに、わたしにとって久臣さんは脚本を書く上での影の参謀みたいなものだった。もちろん彼は、「こう書いたら？」とか「もっとこうすべきだ」といったような具体的なことは何ひとつ言わない。ただ、読んでみて「ここはまずいよ、サクラちゃん」とか「悪いけど、この展開はいただけないな」と言って、わたしの書いたものに赤線を引いて添削してくれるのだった。

そしてあたしは、その赤線の箇所についてうんうんと悩んでは、「もっと上の面白くて新しい展開」をなんとか考えだし、そうしてようやく『ロマンス通り113番地』というドラマの脚本を書き上げたのだった。

正直いってこのドラマの中には――あたしのレンに対する切ない想いがこめられていたので、もし奴がこのドラマを見たとなれば、「あいつ、俺に気があったのか」というのがすごくバレバレな内容ではある。でもあいつはその頃もまだアフガンにいたので、このドラマを見る可能性というのは、かなりのところ低くはあった。

もちろんその後、レンが帰国時にDVDなどで『ロマンス通り113番地』を見たかどうかというのは、定かではない。

あたしはそれから『草食男子撲滅委員会』、『天使と悪魔の恋物語』、『嵐の中で抱きしめて』など、いくつかのヒット作を生み出したのち、今も一脚本家として業界の片隅に生息している。

劇団レリックは、霧島さんの勤める大手商社の社長がスポンサーとしてついてくれたのち、今は東郷氏とユキが中心になって動く、前以上に団員数の多い劇団に成長していた。ほたるは『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』のヒロイン役をユキに譲るような形で退団すると、他の大きな有名劇団に所属し、そこでも看板女優として活躍することになった。

そしてのちにはドラマや映画の世界にも進出して、あたしが書いた脚本のドラマにも出演してもらっていた。

ほたるは結局、退団と同時に東郷氏とも別れ、上月数馬とつきあいはじめただけけれど、彼との関係というのはあまり長く続かなかったようだ。それというのも、ほたるがミュージカルや舞台で次々と当たり役を獲得していったのとは違い、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』以後、彼の俳優としてのキャリアはあまりパツとしたものでなかったせいではないかと思われる。

そしてほたるは今も痩せたままの体型をキープし続けているけれど、あたし同様独身のままだった。

ミドリさんはもちろんのこと、あたしは久臣さんやほたる、またミズキくんとも、ベルビュー荘を出てからずっと親交を持ち続けている。

レンの奴はアフガニスタンの地に二年ほど滞在したのち、そこで出会った女性と結婚するために帰国していたけれど……あたしはレンが結婚してからもずっと、奴といい友達関係というのを持ち続けていた。

わたしがあいつの奥さんに会ったのは一度だけで、それも相当強引に奴の新婚家庭へ押しかけて会ったというのが正しいと思う。たぶん昔のあたしなら「ねえ、本当にあの人があんたのミュージズなの？」とでも言って、レンのことを茶化したかもしれない。

レンの奥さんになった人というのは、一言でいえば、「テニスの試合に熱中するあまり、パンチラしててもまるでそのことを気に留めないタイプ」の女性だったとっていい。決して美人というわけではないし、ファッションといったことに関してもまるで無頓着なのが、着ているものを見ていてわかる……でもレンはたぶん、彼の眼鏡にかなう、とてもいい人と結婚したのだらうと、あたしはそんなふうに感じていた。

そしてかくいうわたしも、レンとの失恋を『ロマンス通り113番地』というドラマの中で昇華したのち（恥かしい話、あたしはこの脚本を泣きながら書いた）――何人かの男と再びつきあいはじめるようになった。

うまく言えないけれど、それはたぶんただの惰性として誰かとつきあっていたに過ぎないようなものかもしれない。

レンが言っていたとおり、そうそう<ミュージズ>という存在には巡り会えたりしないものなのだ。

<ミュージズ>という言葉自体は本来、女性に対して向けられるべき言葉なのだろうけれど、あたしにとってはレンこそが本当に恋をしたと誇れる、ただひとりのミュージズだった。

その証拠にというべきか、あたしの書くドラマには必ずといっていいくらい、レンと似たタイプの男が主役級の役か脇役として現れることが多い。そう、現実の恋とは別に、あたしは繰り返し何度もあいつに恋をしているのだ。

現実に存在して肉体というものを持つレンに対して、というわけではなく――わたしの心の中のレン、あいつの中に存在するミュージズ性みたいなものに、あたしは今も恋をしているのかもしれない。

もちろんレンとは会うたびに、「また男を変えたのか、このビッチめ」とか、そんな話ばかりしているけれど……出会った当時とは違い、お互い三十代になって、まだ一応若いとはいえ容貌のほうも少しは変わってきた。

それでもあたしが心の中にまざまざと思い浮かべることが出来るのは、初めて出会った時のレンだ。

あたしは今も思い出す、あの長い坂道を途中まで上った時、樹々の陰の間から、あいつの影がはみ出していたことを……そしてうるさく蝉の鳴く中を、汗だくになって顔を上げた時、レンがどこか不敵に微笑んでいたこと。

そしてあたしはあいつと一緒にベルビュー荘へと向かっていくのだ。

あたしの人生において、唯一<青春時代>だったと呼べるようなベルビュー荘での日々を、も

う一度繰り返すために.....。

終わり

ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら

<http://p.booklog.jp/book/27959>

著者：ルシア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lmnlive/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27959>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27959>